

府道松原泉大津線関連遺跡
発掘調査報告書

Ⅱ

— 西浦橋遺跡 —

財団法人 大阪文化財センター

府道松原泉大津線関連遺跡
発掘調査報告書

Ⅱ

— 西浦橋遺跡 —

財団法人 大阪文化財センター

欽定四庫全書
書 詩 野 查 歸 隱 錄

卷 一

一 卷 之 五 續 野 查 歸 隱 錄 人 選 四 十

序 文

堺市は大阪府の中央部西寄りに位置する府下第一の衛星都市であります。市域は南北に長く、北西の海浜部と南東の丘陵部にわかれ、海浜部には仁徳天皇陵古墳を中心とする百舌鳥古墳群や中世環濠都市遺跡「堺」など、我が国を代表する遺跡がみられます。また南東丘陵部には、これまた我が国最古で、最大の規模を誇る陶器古窯跡群がひろがっています。このように堺市域は、いわば文化財の宝庫とも言うべき地域であります。

さて、大阪府土木部では松原と泉大津方面を結ぶ都市計画道路の建設を計画いたしました。その路線が泉北丘陵の北端付近を通過することになりました。路線上では大園遺跡・信太寺跡などの著名な遺跡が調査されておりますが、当センターでは大阪府教育委員会の指導によって西浦橋・菱木下・万崎池・太平寺の4遺跡の調査を実施するはこびとなりました。ここに上梓する報告書は西浦橋遺跡にかかるものの第2冊目にあたります。本書が泉北丘陵を含むこの地域の歴史解明の一助となれば、これにまさる喜びはありません。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた大阪府教育委員会・堺市教育委員会・大阪府土木部をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げるとともに、今後とも当センターに対し一層の御指導・御鞭撻たまわるようお願いする次第であります。

1984年3月

財団法人 大阪文化財センター

理事長 加藤 三之雄

例 言

- 1 本書は府道松原泉大津線建設に伴う、堺市^{おしき}菱木所在、西浦橋^{にしうら}遺跡の発掘調査報告書である。西浦橋遺跡の発掘調査は下記のように3次にわたって実施している。

回数	工区	調査期間	面積	担当者	報告書
その1	Ⅱ工区	1981年9月8日～1982年3月30日	4,682㎡	芝野圭之助・橋本高明	松原泉大津線関連・I 本報告書(松原泉大津線関連・II)
その2	I工区	1982年5月15日～1983年3月31日	3,353㎡	安里 進・橋本高明	
その3	I工区	1983年4月1日～1984年3月31日	3,320㎡	大野 薫・橋本高明	

本書は(その2)・(その3)の調査について報告するものである。

- 2 調査は大阪府土木部より委託をうけて、財団法人大阪文化財センターが実施した。調査に要した費用329,863,000円(その他の遺跡の整理費を含む)は大阪府土木部が負担した。
- 3 遺物整理は調査と併行して実施し、本報告書作成にかかる総合的作業は1983年12月1日から1984年3月31日の間に実施した。
- 4 調査及び報告書作成に関係した者は次のとおりである。

1982年度

理事兼事務局長	井上定清
事務局次長兼総務課長	大塚恭朗
総務課	庶務係 主幹兼庶務係長 阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣・灰本明子・千野和久・宮本哲男・田口宗義・船山洋子
	普及係 主幹兼普及係長 福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子
業務課	業務課長 中井貞夫(調査総括責任者)、主幹 椋尾孝彦
	業務第4係 業務第4係長 広瀬和雄、技師 山口誠治
	業務第6係 主幹兼業務第6係長 石神 怡、技師 安里 進・橋本高明
	技能員 立花正治

1983年度

事務局長	小林廣喜
事務局次長兼総務課長	尾田勝之
総務課	庶務係 主幹兼庶務係長 阪上允子、主査 田中喜代子、主事 秋山芳廣・灰本明子・千野和久・宮本哲男・田口宗義・船山洋子
	普及係 主幹兼普及係長 福岡澄男、技師 杉本直子、主事 小島容子
業務課	業務課長 石神 怡(調査総括責任者)、主幹 吉村信男
	業務第1係 主幹兼業務第1係長 中西靖人、技師 山口誠治
	業務第5係 業務第5係長 尾上 実、技師 大野 薫・橋本高明

技能員 立花正治

5 調査にあたっては大阪府教育委員会の指導をうけるとともに、堺市教育委員会・大阪府土木部南部特定事業建設事務所・地元各位の協力を得た。

6 自然科学的分野の調査・分析には次の諸氏・諸機関の協力を得ることができた。

サーモ・ルミネッセンス年代測定	市川米太氏 (奈良教育大学)
¹⁴ C年代測定	山田 治氏 (京都産業大学)
樹種鑑定	松田隆嗣氏 (元興寺文化財研究所)
樹輪年代法	野田真人氏 (京都大学原子炉実験所)
花粉・珪藻分析	パリノ・サージュイ株式会社

7 調査および報告書作成にあたり、次の各氏から有益な指導・助言を得ることができた。記して感謝します。

泉 拓良氏 (京都大学)、奥田 尚氏 (八尾市立刑部小学校)、北野俊明氏・樋口吉文氏
野田芳正氏 (堺市教育委員会)、日下雅義氏 (立命館大学)、中尾憲市氏 (大成高校)、
那須孝徳氏・樽野博幸氏 (大阪市立自然史博物館)、松尾信裕氏 (大阪市文化財協会)、
家根祥多氏 (帝塚山大学)

8 本書の編集は橋本が担当し、安里・大野が援助した。

凡 例

1 西浦橋遺跡の遺跡略号はNUBである。NUB-I-2は西浦橋遺跡I工区その2を表わす。

2 本書遺構図中の方位は国土座標第Ⅱ系の座標北を用いた。

3 標高はT.P.に統一した。

4 遺構略号はSDが溝を、SKが土壌を表わす。

5 遺物は土器・石器・埴輪・土製品・鉄製品ごとに、挿図・図版・観察表に共通する通し番号を与えている。

6 遺物実測図の断面は次のように使いわけた。

黒 塗——縄文土器・弥生土器・土師器

白抜き——須恵器・須恵質土器・埴輪・陶磁器・土製品・サヌカイト製石器・子持勾玉

ドット——黑色土器・瓦器

斜 線——磨石・台石等

府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書

Ⅰ

— 西浦橋遺跡 —

本文目次

序 文
例 言

理事長 加藤三之雄

第Ⅰ章	はじめに	尾上 実・大野 薫	1
第Ⅱ章	西浦橋遺跡の位置と環境		
1	西浦橋遺跡の位置	大野	5
2	泉北丘陵の地理的特徴と遺跡分布	大野	6
3	泉北丘陵を中心とした考古学的環境	大野	10
第Ⅲ章	調査の結果		
第1節	基本層序	橋本高明	24
第2節	縄文時代の遺構と遺物		
1	土層の堆積状態と遺構	大野・橋本	29
2	縄文土器	大野	35
3	石器	大野	58
4	小結	大野	74
第3節	弥生時代の遺構と遺物		
1	遺構	橋本	77
2	遺物	橋本	78
第4節	古墳時代～江戸時代の遺構と遺物		
1	平安時代～江戸時代の遺構（水田跡）	安里 進	86
2	古墳時代～平安時代前期の遺物	安里・大野・橋本	95
3	平安時代中期～江戸時代の遺物	橋本	109

4	古墳時代～江戸時代の遺構と遺物の吟味	安里	122
5	小結	安里	135
第5節 自然科学編			
	西浦橋遺跡に関する液体シンチレーション ¹⁴ C年代決定	山田 治	137
	西浦橋遺跡の縄文土器のTL年代測定	市川米太	141
	樹種鑑定報告	松田隆嗣	143
	西浦橋遺跡花粉分析結果(抄)	パリノ・サーヴェイ社	146
第Ⅵ章	まとめ	橋本	157

図版目次

- | | | | |
|------|---------------|------|-------------------|
| 図版1 | 周辺航空写真 | 図版35 | 石器 |
| 図版2 | 調査区遠景 | 図版36 | 石器 |
| 図版3 | 調査前全景 | 図版37 | 石器 |
| 図版4 | 土層(下層) | 図版38 | 石器 |
| 図版5 | 土層(下層) | 図版39 | 石器 |
| 図版6 | 土層(下層) | 図版40 | 石器 |
| 図版7 | 土層(上層) | 図版41 | 弥生土器 |
| 図版8 | 全景(垂直) | 図版42 | 弥生土器 |
| 図版9 | 土城基 | 図版43 | 弥生土器 |
| 図版10 | 土城基 | 図版44 | 黄灰色土層、灰色粘土下層出土須恵器 |
| 図版11 | 土城基 | 図版45 | 黄灰色土層出土須恵器 |
| 図版12 | 遺物出土状態 | 図版46 | 灰色粘土層出土須恵器 |
| 図版13 | 遺物出土状態 | 図版47 | 茶灰色土下層出土須恵器 |
| 図版14 | 焼土遺構 | 図版48 | 茶灰色土下層出土須恵器 |
| 図版15 | 第四、五次水田遺構面 | 図版49 | 茶灰色土層出土須恵器 |
| 図版16 | 第三次水田遺構面 | 図版50 | 須恵器 |
| 図版17 | 第二次水田遺構面 | 図版51 | 須恵器へラ記号 |
| 図版18 | 牛足跡(第一次水田遺構面) | 図版52 | 灰色粘土下層・灰色粘土層出土土器 |
| 図版19 | 第一次水田遺構面 | 図版53 | 灰色粘土層出土土器 |
| 図版20 | 縄文土器 | 図版54 | 灰色粘土層出土土器 |
| 図版21 | 縄文土器 | 図版55 | 茶灰色土下層出土土器 |
| 図版22 | 縄文土器 | 図版56 | 茶灰色土下層出土土器 |
| 図版23 | 縄文土器 | 図版57 | 茶灰色土下層出土土器 |
| 図版24 | 縄文土器 | 図版58 | 茶灰色土下層・茶灰色土層出土土器 |
| 図版25 | 縄文土器 | 図版59 | 茶灰色土層出土土器 |
| 図版26 | 縄文土器 | 図版60 | 茶灰色土層出土土器 |
| 図版27 | 縄文土器 | 図版61 | 茶灰色土層出土土器 |
| 図版28 | 縄文土器細部 | 図版62 | 黄灰色土層出土土器 |
| 図版29 | 石器 | 図版63 | 黄灰色土層出土土器 |
| 図版30 | 石器 | 図版64 | 黄灰色土層出土土器 |
| 図版31 | 石器 | 図版65 | 埴輪 |
| 図版32 | 石器 | 図版66 | 埴輪・土製品 |
| 図版33 | 石器 | 図版67 | 鉄器・鉄滓 |
| 図版34 | 石器 | | |

挿 図 目 次

第1図	調査区位置図……………	3
第2図	地区割図……………	4
第3図	西浦橋遺跡の位置……………	5
第4図	遺跡分布図……………	7
第5図	土地条件と遺跡分布……………	8
第6図	旧石器時代遺跡の分布……………	10
第7図	縄文時代遺跡の分布……………	12
第8図	縄文土器……………	13
第9図	弥生時代遺跡の分布……………	15
第10図	古墳の分布……………	16
第11図	牛石8号墳……………	18
第12図	大野寺土塔……………	19
第13図	式内社及び古代寺院の分布……………	20
第14図	Scライン南面土層図(折込)……………	25・26
第15図	下層調査トレンチ……………	28
第16図	層序模式図と年代……………	30
第17図	土墳墓群……………	33
第18図	S K 15……………	34
第19図	S K 15土器棺検出状況……………	34
第20図	縄文土器(1)……………	36
第21図	縄文土器(2)……………	37
第22図	縄文土器(3)……………	41
第23図	縄文土器(4)……………	42
第24図	縄文土器(5)……………	43
第25図	縄文土器(6)……………	44
第26図	縄文土器(7)……………	46
第27図	縄文土器(8)……………	47
第28図	縄文土器(9)……………	48
第29図	縄文土器(10)……………	49
第30図	石鏃……………	60
第31図	石鏃・石鏃未製品・石槍・石槍未製品・尖頭器……………	61
第32図	石錐・石錐未製品……………	62

第33図	石匙・不定形スクレイパー(1).....	63
第34図	不定形スクレイパー(2).....	64
第35図	不定形スクレイパー(3).....	65
第36図	不定形スクレイパー(4)・石刀.....	66
第37図	磨石・砥石・台石(1).....	67
第38図	台石(2).....	68
第39図	台石(3).....	69
第40図	台石(4).....	70
第41図	花粉組成.....	75
第42図	杭列群.....	77
第43図	弥生土器(1).....	79
第44図	弥生土器(2).....	80
第45図	弥生土器(3).....	81
第46図	第五次水田遺構面実測図.....	90
第47図	第四次水田遺構面実測図.....	91
第48図	第三次水田遺構面実測図.....	92
第49図	第二次水田遺構面実測図.....	93
第50図	第一次水田遺構面実測図.....	94
第51図	灰色粘土下層(上)、灰色粘土層(下)出土須恵器.....	98
第52図	灰色粘土層出土須恵器.....	99
第53図	茶灰色土層出土須恵器.....	100
第54図	黄灰色土層(上)、茶灰色土下層(下)出土須恵器.....	101
第55図	茶灰色土下層出土須恵器.....	102
第56図	子持勾玉実測図.....	106
第57図	埴輪・土製品.....	111
第58図	灰色粘土層出土遺物.....	112
第59図	茶灰色土下層出土遺物.....	113
第60図	茶灰色土下層出土遺物.....	114
第61図	茶灰色土層出土遺物.....	115
第62図	茶灰色土層出土遺物.....	116
第63図	茶灰色土層出土遺物.....	117
第64図	黄灰色土層出土遺物.....	118
第65図	黄灰色土層出土遺物.....	119
第66図	小区画水田(太線)と長地型水田(細線)の比較.....	124

第67図	水田各層における須恵器杯蓋の時期別出土量	128
第68図	西浦橋遺跡と菱木下遺跡	130
第69図	西浦橋遺跡における樹木・草本・シダ類花粉組成の変遷	132
第70図	西浦橋遺跡・菱木下遺跡における樹木花粉組成の変遷	132
第71図	西浦橋遺跡の土器(7079)の熱発光曲線	141
第72図	花粉分析試料の採取地点と層位的対比	148
第73図	奈良時代溝平面図	159
付図	西浦橋遺跡平面図	

目 次

第1表	土壌一覽表	32
第2表	縄文土器一覽表	52~57
第3表	石器一覽表	71~73
第4表	弥生土器観察表	83~85
第5表	水田層出土須恵器杯の分類	96
第6表	ヘラ記号須恵器(図版51)観察表	97
第7表	古墳時代~平安時代前期出土遺物集計表	97
第8表	水田層出土須恵器観察表	103~106
第9表	埴輪観察表	107~108
第10表	平安時代中期~江戸時代の遺物集計表	110
第11表	層別平瓦重量表	120
第12表	水田各層の遺物包含密度	127
第13表	栽培植物花粉の出現率	134
第14表	採取データ	141
第15表	西浦橋遺跡の縄文土器のTL年代測定の結果	142
第16表	樹種鑑定結果一覽表	143~145
第17表	花粉分析試料表	146~148
第18表	西浦橋遺跡花粉分析結果 II工区 A、B地点(折込)	149・150
第19表	西浦橋遺跡花粉分析結果 I工区 D地点(折込)	151・152
第20表	西浦橋遺跡花粉分析結果 I工区 67-bライン 1、2(折込)	153・154
第21表	西浦橋遺跡花粉分析結果 I工区 Scライン(折込)	155・156

第 I 章 は じ め に

堺市の南半部は和泉山脈より派生する泉北丘陵によって、その大部分が占められる。この泉北丘陵は後章に詳しいように、長い間にわたる豊かな歴史の舞台となってきた地であり、我々の祖先の足跡がいたるところに残されている。古墳時代に日本の窯業生産をリードする地位にあった陶邑古窯址群を代表として、先史以来の多くの文化財が知られているが、未だ知られざる遺跡も数多く眠っていると考えられ、我が国の歴史を解明する一つの鍵ともなり得る地域である。近年まで牧歌的な農村や山林としての風景を保ってきた泉北丘陵ではあるが、泉北ニュータウンの造成を契機として、その周辺地域をも含め、開発による急激な都市化の波が寄せつつある。その波の一つが、今回の調査の契機となった府道松原泉大津線である。

昭和40年に計画決定、昭和46年に事業認可されたこの都市計画道路は、堺市域において泉北丘陵の先端近くを横断する計画となっており、予定路線内に多くの埋蔵文化財が包蔵されていることは充分に予測されることである。そこで埋蔵文化財の取扱いについて協議を進めてきた大阪府教育委員会（以下、府教委）と大阪府土木部（以下、土木部）は、府道堺かつらぎ線以西についての分布調査及び既周知遺跡の範囲確認を目的とする試掘調査を財団法人大阪文化財センター（以下、センター）に委託することとした。昭和50年に実施したこの調査によって太平寺・万崎池・菱木下・西浦橋・鶴田池東の5遺跡が新たに発見されるとともに、既にその存在の知られていた大園・観音寺の2遺跡の道路予定地内における範囲を確認することができた^{註1}。この調査結果に基づき、和田川以西の大園・観音寺・鶴田池東の3遺跡及び西浦橋遺跡の一面については府教委による発掘調査が実施され、調査の終了した現在では工事に着手され、既に一部区間では道路としての供用が開始されている。

一方、和田川以東の4遺跡についても、その範囲や埋没深度の確認を目的とした試掘調査が、昭和54年に府教委によって実施されたが、その結果、府道堺かつらぎ線に接する石津川から、和田川によって形成された段丘崖にまで及ぶ全区間において遺構・遺物が確認され、全面にわたる発掘調査が必要とされるに至った。この4遺跡の発掘調査については再びセンターに委託されることとなり、昭和55年8月に着手した調査は多時期にわたる多くの遺構・遺物の検出によって泉北丘陵の歴史に新たな一筋の光明を与えつつ、昭和57年3月には未買収地などの一部を除いて現地調査を一応終了した^{註2}。

しかるに、この調査によって更に遺跡範囲の拡大することが確認された。4遺跡の最西端、西浦橋遺跡は段丘面上に立地するものと考えられたため、段丘崖直下までを調査区として設定し、予測通り段丘面上に古墳時代や中世の集落址が検出される成果を得たが、併せて段丘崖直下に「杭列群」が検出されたのである。この「杭列群」は弥生時代中期中葉に属し、農耕社会形成の

初期に既にかかなりの治水技術を伴ったことを証明する非常に重要な資料と考えられる。この遺構が調査区内で完結せず更に西方に延びることや、そのベースとなる流路堆積土中には多くの遺物が含まれることもあって、西方への調査区の延長が必要となってきた。そこで調査が更に長期間にわたることが予測されたため、「杭列群」の検出までをもって調査を一旦中断し、その時点までの調査成果を他の3遺跡と併せて報告することとした。

昭和57年度の調査は、調査区を西へ約70m延長して再開したが、今次調査については調査区が和田川旧流路に当り掘削深度が大きくなる可能性を考えて、南北両長辺には鋼矢板による土止め工を施し事故の防止に努めた。調査は「杭列群」の全形を確認するとともに、古代末から中世にかけての何層にもわたる水田面や縄文晩期の墓墳群を検出し、黄色粘土上面までの調査を進めて当初の目的を達した。しかるに当初はベース面と考えられたこの黄色粘土の下層に更に縄文土器の含まれることが判明したのは、下層確認のための坪掘りにおいてであった。よって更に下層の調査が必要とされ、昭和58年度事業として実施するに至った。

昭和58年度の調査は、既に鋼矢板による土止め工が施されていたため、その掘削深度に制約を受けた。調査区全体は地表面下 2.0mまでの掘削に止め、道路敷中央に幅28mのトレンチを設定したが、このトレンチの調査も地表面下 3.5mまでに止めざるを得なかった。更に下層を確認するため、トレンチ中央に 7.5m角の坪掘りを、東西両端近くにライナープレートによる土止め工を施しながらの坪掘りを実施し、地表面下 6.2mまで達したが、和田川旧流路底を検出するには至っていない。

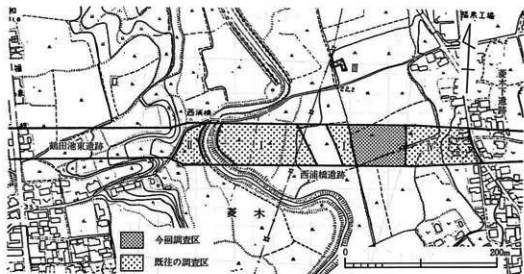
この間、「杭列群」はその重要性に鑑み移築保存の計画がたてられた。府教委と府土木部を中心に関係各署の協議が進められているが、巨額の経費を要することでもあり、現在に至るも決着を見ていない。「杭列群」はP. E. G. の連日の散布と二重のビニールトンネルによる仮保存施設によって移築の日を待っている。従って当該部の下層調査は今回は実施せず、将来の課題とした。また縄文晩期墓墳群も埋没保存されることとなり、当該部の下層調査は実施していない。

なお「杭列群」は近い将来実施されるべき移築に伴い、構造等の精査が予定されており、この再調査時の所見と併せて報告する所存であり、今回の報文からは省いた。了承されたい。(尾上)

既往の調査〔第1図〕

西浦橋遺跡が周知されるようになったのは府道松原泉大津線建設計画に伴う分布調査によってであった。1975年2月～3月に当センターが分布調査を実施し、遺物の散布を確認した。報告書には「第4地点は、当該道路と和田川が交差する兩岸で地籍は堺市菱木、現状は田畑と荒地である。表採した遺物は年代不明の須恵器、土師器及び瓦がある。」とあり、その範囲は西が和田川旧河道、東が段丘崖となっている^{註4}。

1979年3月に至り、本格的な発掘調査を実施するためのデータを得るため、府教委によって試掘調査が実施された。この調査結果に従って、1979年8月から府教委によって発掘調査が実施さ



第1図 調査区位置図 (1:5000)

れ(第1図第Ⅰ地区)、8世紀代の溝2条が検出された。^{註5}府教委はひきつづき1980年6月から和田川旧河道以西部を発掘調査し(第1図第Ⅱ地区)、中世の自然流路・溝・土壌などを検出、弥生土器・6世紀～8世紀の須恵器を得ている。^{註6}

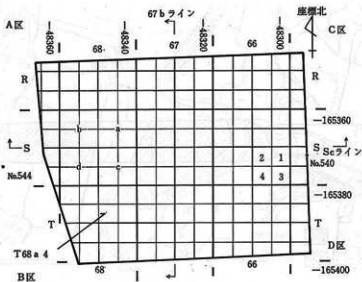
1981年度には堺市教育委員会と当センターが発掘調査を実施している。堺市教育委員会の調査は関西電力配電線塔建設に伴うもので(第1図第Ⅲ地区)、溝・土壌・ビッドなどを検出したが、これらは時期不明のものが多かったようである。出土遺物には縄文土器・石器・弥生土器・須恵器・磚(釈尊寺と関連か)などがあるが、重要なのは、従来、地山とされてきた黄色粘土層よりも下層から縄文土器が出土した点であった。^{註7}

同じ1981年度に当センターは西浦橋遺跡の東端部の発掘調査を実施した(第1図第Ⅳ地区)。この地区は中位段丘西縁から段丘崖下にあたる部分であるが、段丘縁辺部から、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の竪穴住居・溝、奈良時代の掘立柱建物・溝、中近世の掘立柱建物・溝・井戸・土壌・埋甕などを、段丘崖下から弥生時代の自然河川・しがらみなどを検出している。^{註8}

地区設定〔第2図〕

調査区の地区割は当センターの実施した府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査の共通の軸を使用した。これは国土座標を基準にした一辺20mの東西南北の方格区割りで、南北線には東から順にアラビア数字を、東西線には北から順にアルファベット大文字を与えている。この地区割りでは、東西は65～69、南北はR～Tで今回調査区のすべてをカバーすることができる。

この20m方格の中をさらに10mごとに区切って中地区を設定した場合、アルファベット小文字a～dを与えることとし、さらに5mごとの小地区を設定した場合には同様にアラビア数字を与



第2図 地区割図 (1:1000)

えることとした。

土層観察用アゼは適宜設定したが、調査区中央を東西に走る Sc ラインと南北に走る 67b ラインは、最も基本的な大アゼとし、最後まで残すこととした。この2本の大アゼによって区画された4つの地区を便宜的にA区～D区と称した。(大野)

註

- 1 財団法人大阪文化財センター「都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書」(1975 財団法人大阪文化財センター)
- 2 芝野圭之助「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」(1980 大阪府教育委員会)
上林史郎「西浦橋遺跡発掘調査概要」(1981 大阪府教育委員会)
上林史郎「鶴田池東遺跡発掘調査概要」Ⅱ(1982 大阪府教育委員会)
広瀬和雄「観音寺遺跡発掘調査報告書」(1982 大阪府教育委員会)
広瀬和雄「大園遺跡発掘調査概要」Ⅲ(1976 大阪府教育委員会)
広瀬和雄ほか「大園遺跡発掘調査概要」Ⅴ(1981 大阪府教育委員会)
藤永正明ほか「大園遺跡発掘調査概要」Ⅵ(1982 大阪府教育委員会)
- 3 石神 怡ほか「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書」Ⅰ(1984 財団法人大阪文化財センター)
- 4 財団法人大阪文化財センター「都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書」(前掲)
- 5 芝野圭之助「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」(前掲)
- 6 上林史郎「西浦橋遺跡発掘調査概要」(前掲)
- 7 野田芳正「西浦橋遺跡発掘調査報告」(「堺市文化財調査報告」第12集 1983 堺市教育委員会)
- 8 石神 怡ほか「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書」Ⅰ(前掲)

第Ⅰ章 西浦橋遺跡の位置と環境

1 西浦橋遺跡の位置〔第3図；図版1〕

西浦橋遺跡は大阪府堺市菱木2027番地を中心とした付近一帯にひろがる、縄文時代～中・近世の複合遺跡である。本項では西浦橋遺跡の所在する堺市、および堺市菱木について概要を述べておきたい。

堺市は大阪府の中央部西寄りにあり、新大和川を隔てて大阪市の南に位置している。東は松原市・美原町・狹山町・河内長野市に、南は高石市・和泉市に接し、西は大阪湾に面している。1889年（明治22年）の市制施行当時には3.67kmしかなかった市域が、町村編入をくりかえした結果、現在ではその約36倍の133.28km²を有する府下第一の衛星都市となっている。

市域は東西約14km、南北約20kmと南北に長く、地形は大別して西北部の海浜平野と東南部の丘陵地からなる。海浜平野部は旧市内を中心として市街地化が進んでいるのに対し、東南部は段丘地形の発達したのどかな丘陵地であったが、大阪府企業局による泉北ニュータウンの建設によって景観は一変してしまった。

西浦橋遺跡の所在する堺市菱木は市の南部にあり、北は草部、東は太平寺・大庭寺、南は野々井・赤坂台・檜尾とそれぞれ隣接し、西是和泉市上代と接して市界をなしている。町域の中央を和田川が北流し、東側を府道別所草部線が、西側を府道和田福泉線（父鬼街道）が南北にはしっている。

西浦橋遺跡は菱木の北端に近いところ、旧の菱木集落の北のはずれに位置する。上述の両府道のはほぼ中間点にあたり、和田川の右岸に立地している。遺跡範囲は必ずしも明確ではない。現在のところ、堺市道菱木33号線を東限として東の菱木下遺跡と接し、西限は鶴田池東遺跡ののっている偕太山丘陵東縁の崖下までと考えられ、東西約400mのひろがりをもつ。南北は不明だが、約300mにおよぶものと推定される。現地表面の標高はT.P. +約21mで、東に高く西の和田川よりがやや低い地形となっている。調査着手前は市道よりのやや高いところが畑地、和田川よりの低いところが水田となっていた。



第3図 西浦橋遺跡の位置

2 泉北丘陵の地理的特徴と遺跡分布〔第4・5図；図版1〕

泉北丘陵と一般に呼ばれている地域がどの範囲をさすのか、さまざまな場合があるようだ。本項では大津川・横尾川以北、天野川・西除川以西の丘陵地を総称して泉北丘陵と呼ぶことにしよう。泉北丘陵の北限は明確ではないが、ここでは、一応、石津川・和田川の合流点付近をとおる東西ラインとしておく。

これに対して大津川・横尾川以南の丘陵を泉南丘陵と総称し、その北部にあたる、横尾川と牛滝川の間を和泉丘陵と呼ぼう。

このように定義したとき、泉北丘陵は東西約9km、南北約10kmの広大な範囲となる。泉北丘陵内を流れる河川としては石津川とその支流の甲斐田川・和田川・伊勢路川・陶器川・前田川・砂見川などがある。いずれも平常は水量の少ない中小河川である。これらの河川によって泉北丘陵はいくつかの中小の丘陵にわけることができる。それについては『陶邑』^{註2}に^{註3}従う。それによると泉北丘陵は西から大野池地区・光明池地区・榊地区・富蔵地区・高蔵地区・陶器山地区にわけることができる。このうち、大野池地区は一般に信太山丘陵と呼ばれている丘陵の東部をさしたものであり、榊地区とは榊丘陵をさしたものである。

信太山丘陵とは和田川・甲斐田川以西の丘陵のことである。信太山丘陵の西縁には惣ヶ池遺跡・和泉黄金塚古墳・丸笠山古墳・信太千塚古墳群・信太寺跡など数多くの遺跡があるが、これらの遺跡は信太山丘陵の西側にひろがる低位段丘・沖積平野の生産力を背景にした集団にかかわるものであり、泉北丘陵内の遺跡とはわけて考えるべきであろう。

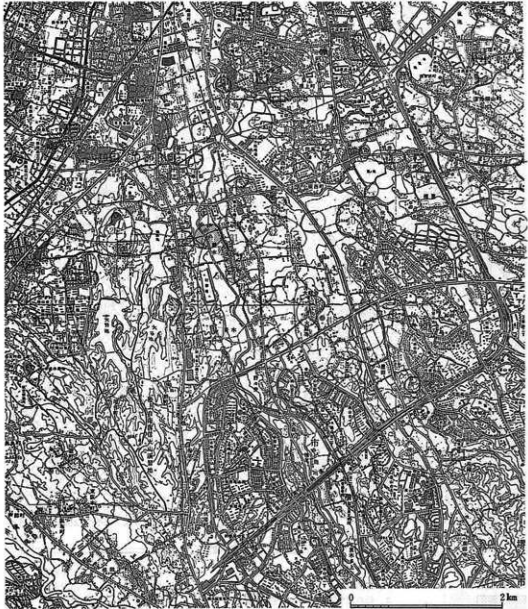
さて、泉北丘陵を構成しているのは大阪層群と呼ばれる、砂・礫・粘土からなる層で、層厚は厚いところでは600mもあるとされている。これが丘陵として露出しており、縁辺部には樹枝状の開折谷が発達している。

大阪層群を刻みこんで堆積しているのが高位段丘で、泉北丘陵では和田川左岸と石津川右岸に発達している。標高は45m～75mで、やはり開折谷が発達している。

中位段丘は大阪層群を不整合におおっており、高位段丘よりはかなり厚みをもっている。和田川・石津川にはさまれた地域、すなわち榊地区の北部に顕著にひろがっている。標高は20m～45mで平坦面が比較的広く、中・近世以降の古い集落が立地するものもこの中位段丘上である。開折谷をせきとめてつくった溜池が多い。また泉北丘陵周辺では横尾川の兩岸や西除川の流域に発達している。

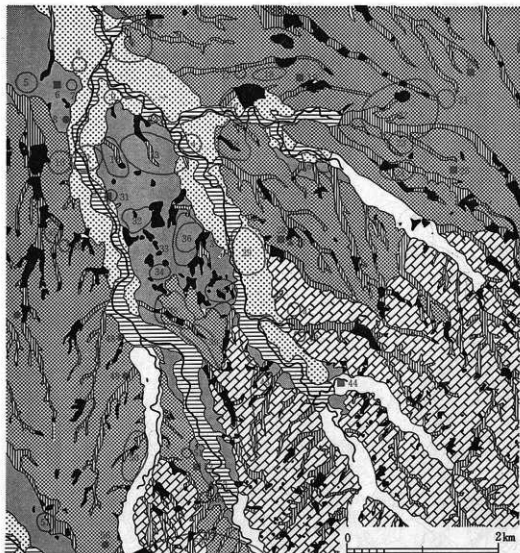
低位段丘は和田川・石津川流域に流れに沿って細長く分布している。氾濫原との比高差が約1mと小さく、洪水時の危険があるため集落などは立地しておらず、大部分が水田となっている。ただし、最近の調査によって、低位段丘と考えられていたところが実は沖積段丘であったという例がでてきており、低位段丘と沖積段丘は区別したいところもある。

氾濫原・谷底平野は石津川・和田川沿いに細長く分布している。ここでは水田も営まれている



- | | | | | |
|-------------|-------------|--------------|---------------|-------------|
| 1. 家原寺跡 | 18. 貝吹山古墳 | 35. 万田遺跡 | 52. 散布地B | 69. 二本木山古墳 |
| 2. 大鳥大社 | 19. 等乃伎神社 | 36. 小坂遺跡 | 53. 散布地C | 70. 野々井遺跡 |
| 3. 鳥東町遺跡 | 20. 原田遺跡 | 37. 上遺跡 | 54. 散布地D | 71. 野々井南遺跡 |
| 4. 毛穴遺跡 | 21. 日部神社 | 38. 平井遺跡 | 55. 散布地E | 72. 牛石古墳群 |
| 5. 榎林寺跡 | 22. 京部遺跡 | 39. 坂上神社 | 56. 大野池周辺遺跡群 | 73. 西山城跡 |
| 6. 惣堂山古墳 | 23. 駒山古墳 | 40. 伏屋遺跡 | 57. 山田遺跡 | 74. 小倉城跡 |
| 7. 殿宮山古墳 | 24. 上代遺跡 | 41. 陶器千塚古墳群 | 58. 山田古墳群 | 75. 東山城跡 |
| 8. 藤田神社 | 25. 和泉黄金塚古墳 | 42. 辻之遺跡 | 59. 聖神社 | 76. 榑舟神社 |
| 9. 鈴の宮遺跡 | 26. 信太寺跡 | 43. 田園遺跡 | 60. 聖神社古墳 | 77. 美木多第1地点 |
| 10. 深井清水町遺跡 | 27. 菅接池廃寺 | 44. 深坂遺跡 | 61. 惣ヶ池遺跡 | 78. 美木多第2地点 |
| 11. 大野寺跡 | 28. 道田池古墳群 | 45. T K 73号窯 | 62. 丸笠山古墳 | 79. 美木多瓦葺跡群 |
| 12. 無名塚古墳 | 29. 道田池東遺跡 | 46. 多治速比売神社 | 63. 信太山千塚古墳群 | 80. 美木多第2地点 |
| 13. 高木車塚古墳 | 30. 西浦橋遺跡 | 47. 深田遺跡 | 64. 原作2号墳 | 81. 榑尾塚原古墳群 |
| 14. 水部地遺跡 | 31. 妻木下遺跡 | 48. 野間池古墳 | 65. 原作1号墳 | 82. 池田寺跡 |
| 15. 敷石遺跡 | 32. 万寿池遺跡 | 49. 大坂寺遺跡 | 66. 信太山千塚62号墳 | 83. 船成遺跡 |
| 16. 大園遺跡 | 33. 太平寺遺跡 | 50. 善木神社 | 67. 阿闍梨池西古墳 | 84. 榑木寺跡 |
| 17. 上町遺跡 | 34. 万崎遺跡 | 51. 散布地A | 68. 野々井古墳 | 85. 観音寺山遺跡 |

第4図 遺跡分布図 (1:50000)



第5図 土地条件と遺跡分布 (地形分類図は「陶邑」Vを一部改変)

が、低位段丘にみられるような「条里制的地割」は存在しない。

このように東北丘陵の土地条件は、丘陵、高位段丘、中位段丘、低位段丘（神積段丘）、開折谷、氾濫原、谷底平野にわけることができる。水田として利用できるのは限られており、低位段丘・中位段丘・氾濫原などであるが、「条里制的地割」ののこっている低位段丘が比較的早く開発されたのに対し、中位段丘上は中世以降の新田開発によって水田化されたものと考えられる。平坦面の少ない丘陵や高位段丘は雑木林となっていたと推定され、これが大部分を占めていたのであろう。伝統的集落は中位段丘縁辺や丘陵・高位段丘上の尾根道に沿って立地していたと考えられる。

次に上述の土地条件と遺跡の立地について若干触れておく。旧石器時代の遺跡としては居住地等は未発見で国府型ナイフ形石器、有舌尖頭器などが偶然出土しているだけだが、丘陵や段丘上が多いようである。縄文時代・弥生時代の遺跡は分布が十分把握されていないが、石津川・和田川沿いの段丘縁辺に立地しているとみることができる。柵地区北端に近い西浦橋遺跡は中位段丘西縁から和田川の氾濫原にかけて立地しているが、土器等が出土するのは縄文時代の自然河川内からであり、居住地については確認できていない。しかし土器表面があまり磨耗していないことや、かなりまとまった土器が出土していることから考えて、ごく近くに居住地があるものと推定できる。上遺跡は従来低位段丘と分類されるところに立地しているが、縄文土器が出土するのはいままで「地山」とされてきた黄色粘土層の下からであり、ここが神積段丘であることが判明している。上遺跡の対岸にある鈴の宮遺跡も同様な立地で、鈴の宮遺跡からは多量の長原式土器が出土した。

このように縄文時代の遺跡は石津川・和田川沿いの低位段丘または神積段丘付近にあらわれてくるようだが、それは石津川河口近く立地する四ツ池遺跡との関連で理解すべきものかもしれない。しかし、ごくわずかだが東北丘陵にも縄文早期・前期・中期の土器があり、別の独立した集団がいた可能性もある。

弥生時代の遺跡も石津川・和田川を望む段丘縁辺に立地している。石津川右岸では毛穴遺跡・鈴の宮遺跡、石津川左岸では万崎池遺跡、和田川右岸では菱木下遺跡などをあげることができる。高地性集落は信太山丘陵の惣ヶ池遺跡くらいしか知られていない。惣ヶ池遺跡は信太山丘陵の西縁に立地しており、東北丘陵内部の地域とは区別して扱うべきことはすでに述べたとおりである。

古墳は数が少ないが丘陵・段丘の尾根上に立地する。信太山丘陵（大野池地区）には二本木山古墳・野々井古墳・榎尾塚原古墳群・山田古墳群が、柵地区には牛石古墳群が、陶器山地区には陶器千塚古墳群がある。

須恵器窯は一定の傾斜をもつ大坂層群が露出しているところに営まれている。すなわち丘陵斜面や高位段丘の段丘崖に立地している。

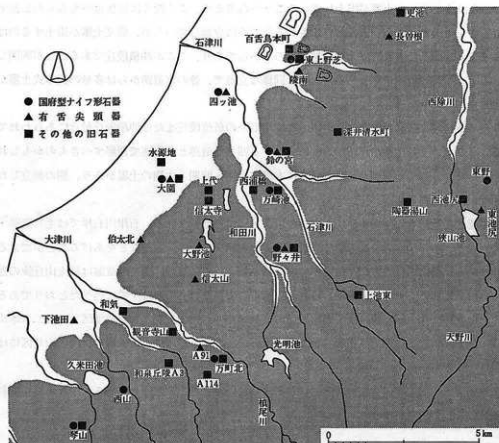
3 泉北丘陵を中心とした考古学的環境〔第6～13図；図版1〕

本項では泉北丘陵を中心とした地域の遺跡を旧石器時代より順に概観し、あわせて動向の若干についても言及したい。

旧石器時代〔第6図〕

泉北丘陵は旧石器時代の遺跡の空白地域ではないにせよ、遺跡数はかなり少ない。現在のところ、国府型ナイフ形石器をもつ文化と有舌尖頭器の文化が比較的に知られている。

藤井寺市国府遺跡出土例を標式とする国府型ナイフ形石器、そしてそれに代表される国府文化期の遺跡は泉北丘陵においても徐々にその例を増しつつあり、堺市筋の宮遺跡・万崎池遺跡・野々井遺跡などで国府型ナイフ形石器が発見されている。周辺にまで眼をひろげれば、狭山町東野遺跡^{註7}、堺市東上野芝遺跡^{註8}、今池遺跡^{註9}、四ツ池遺跡^{註10}、和泉市・高石市大園遺跡、和泉市万町北遺跡^{註11}、岸和田市西山遺跡^{註12}、翠山遺跡^{註13}、葛城山頂遺跡^{註14}などで出土例が報じられているが、これらは単独出土であったり、後世の堆積層から出土したものが多く、



第6図 旧石器時代遺跡の分布

国府文化期より遡る時期の石器としては堺市野々井遺跡出土のルヅァロア型石核^{RE15}1点が知られているのみで、石刃技法の文化は確認されていない。

国府文化期以降有舌尖頭器出現までの石器群も少ない。鈴の宮遺跡で宮田山型ナイフ形石器、和泉丘陵になる和泉市観音寺山遺跡で舟底形石核^{RE17}が発見されているのと、高石市・和泉市大園遺跡では接合資料を含むブロックが発見され、小型ナイフ形石器・チャート製石核などが出土した。大園遺跡ではこれ以前にも小型のナイフ形石器・翼状剝片・削器などの出土が報告されている。^{RE18}
^{RE19}

小型のナイフ形石器の文化につづく細石刃文化期の資料はまったく知られていない。

有舌尖頭器の例はかなり増えている。泉北丘陵では鈴の宮遺跡^{RE20}、大野池遺跡^{RE21}、野々井遺跡^{RE22}、佃太山遺跡などの例があり、周辺では四ツ池遺跡^{RE23}、狹山町東池尻遺跡^{RE24}、和泉市伯太北遺跡^{RE25}、和泉丘陵A91地点遺跡^{RE27}、大園遺跡^{RE28}、岸和田市下池田遺跡^{RE29}などで有舌尖頭器が出土している。中でも大園遺跡では現在までの調査で合計十数本の有舌尖頭器が出土しているという。有舌尖頭器は縄文時代草創期の隆線土器と共存することが知られているが、和泉地方では土器と共存した例は知られていない。

このようにみえてくると、泉北丘陵付近において旧石器時代人の活躍がみられるようになるのは国府文化期以降のことといえよう。しかし野々井遺跡のルヅァロア型石核の例もあり、国府文化期よりさらに遡る石器群が泉北丘陵にも存在していたかもしれない。国府文化期以降有舌尖頭器出現までの時期の遺物もずいぶん少ない。人口の稀薄な時期であったのだろうか。有舌尖頭器の時期になると再び活動が活発になるとみられる。今後はこれらの有舌尖頭器と土器との関連を追求してゆく必要があろう。

またこれら以外にも旧石器の出土が報じられている遺跡がいくつかある。これらについては位置づけが困難であるが、遺跡名を列記しておこう。堺市更池遺跡^{RE30}・深井清水町遺跡^{RE31}・西浦橋遺跡^{RE32}・陶器湯山遺跡^{RE33}・三国ヶ丘遺跡^{RE34}・百舌鳥本町遺跡^{RE35}・上池東遺跡^{RE36}、和泉市信太寺跡^{RE37}・和泉丘陵A3地点遺跡^{RE38}・同A114地点遺跡^{RE39}、狹山町西池尻遺跡。

縄文時代〔第7・8図〕

泉北丘陵の縄文時代は旧石器時代と同様に空白の部分が多い。ここではやはり周辺の遺跡をも参考にして縄文時代の遺跡について紹介したい。

草創期の遺跡はいまだ知られていない。ただ有舌尖頭器がかなり出土しているので、今後は土器を伴う例があるのかないのか問題となろう。

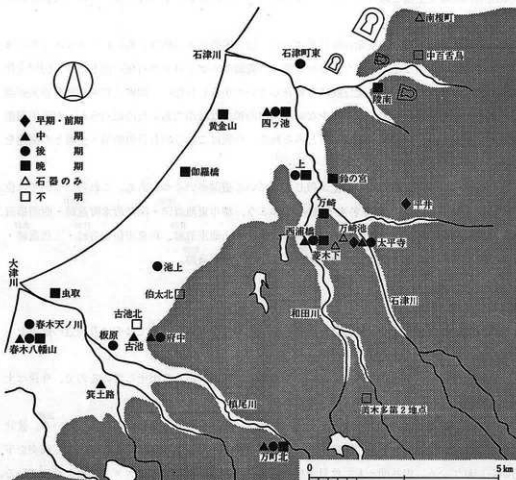
早期末から前期初頭に位置づけうる土器（第8図-1）が太平寺遺跡から出土している。^{RE40}波状口縁になる深鉢で頸部に2条の凹線をめぐらし、凹線の上下と凹線間に半截竹管による刺突を下方からいれている。内外面とも二枚貝条痕を施すが、内面口縁部付近はナデで条痕を消している。^{RE41}
滋賀県栗津湖底遺跡に類例がみられる。

前期の土器は同じく太平寺遺跡で北白川下層Ⅱa式の破片(第8図-2)が1点出土している。また界市平井遺跡では前期末の大蔵山式が出土している。

縄文時代中期では岸和田市箕土路遺跡で鷹島式の出土がある。

縄文時代中期末・後期初頭以降、遺跡は増加の傾向をみせる。そして河川ごとのまとまりもみられるようになってくる。和泉北部では横尾川・大津川流域と石津川・和田川流域にまとまりがみられる。

石津川河口近くの四ツ池遺跡は縄文時代中期末にはじまり、後期前葉福田KⅡ式併行期に最盛期を迎えるが、1981年度の調査では頸部に隆帯をもつ土器や、隆帯で楕円形に区画した内側に刺突をいれる土器が若干出土している。石津川・和田川水系ではいまひとつ西浦橋遺跡がある。西浦橋遺跡では星田式以降、縄文時代を通じて土器が出土しているが、中期の土器としては星田式のほか頸部以下に縦位の縄文をころがす土器、区画文の土器、隆帯をめぐる土器などがみられる。四ツ池遺跡ではひきつづいて中津式、福田KⅡ併行の土器、緑帯文土器が出土しているが、



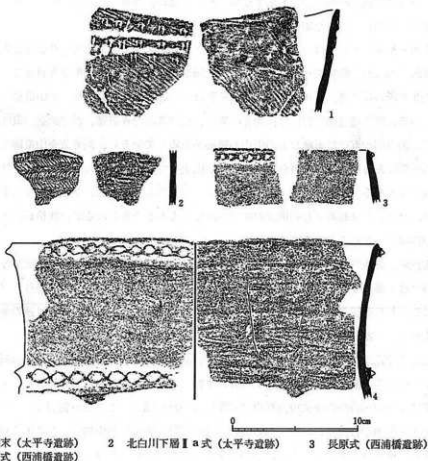
第7図 縄文時代遺跡の分布

中津式は少ない。西浦橋遺跡においても中津式は多くない。

縄文時代後期前葉では四ツ池遺跡、西浦橋遺跡に加えて、上遺跡⁶⁰が出現する。上遺跡では土器の量は少ないが、堀之内Ⅰ式と考えられる深鉢が出土している。堀之内Ⅰとみられる土器は西浦橋遺跡でも小片が出土している。四ツ池遺跡では瀬戸内の福田Ⅱ式⁴⁵に併行する時期の土器が多くみられる。緑帯土器の時期は泉州では遺跡数の増す時期であり、岬町淡輪遺跡でも集落を形成している⁴⁶。石津川・和田川流域では新たな展開はみられないが、西浦橋遺跡では土器の量が比較的多くなり、四ツ池遺跡・上遺跡でも土器は出土している⁴⁷。

縄文時代後期中葉から後葉・末の土器は石津川・和田川流域ではごく少なく、西浦橋遺跡や石津町東遺跡で若干の土器が出土しているにとどまり、いまだ中心となる遺跡を確立していない。

板尾川・大津川流域では縄文時代中期末の資料は石津川・和田川流域より少ない。わずかに古池遺跡⁴⁸・府中遺跡⁴⁹・万町北遺跡で数点の出土が報じられているのみである。縄文時代後期初頭になると泉大津市板原遺跡で包含層・畫構面・自然流路から中津式土器がまともに出土しており⁵⁰、この時期の資料が少ない泉州では目立つ存在となっている。ところが後期前葉の土器はそれほど



1 早期末(太平寺遺跡) 2 北白川下層Ⅰa式(太平寺遺跡) 3 長原式(西浦橋遺跡)
4 船橋式(西浦橋遺跡)

第8図 縄文土器

豊富ではなく、石津川・和田川流域とは好対照と言えよう。岸和田市春木八幡山遺跡では後期中葉の一乗寺K式を多く出土しており、その点でも石津川・和田川流域とは対照的である。

和泉北部では縄文時代晩期の遺跡も全般に低調である。石津川・和田川水系の西浦橋遺跡では滋賀里Ⅱ式以降、一応統いて土器が出土しているが、量は限られている。しかし晩期終末長原式の土壙墓が検出されており、付近に集落があるものと推定される。晩期の資料が増えるのはいま述べた晩期終末刻目突帯文土器の時期である。堺市鈴の宮遺跡・四ツ池遺跡などでまとまった資料が出土しており、縄文時代後期の遺跡や晩期でも前葉・中葉の遺跡よりも低地に立地するという特色を指摘しうる。河内平野の遺跡では長原式と弥生第Ⅰ様式中段階の土器が伴う例がいくつか報告されており、和泉北部においても長原式と弥生土器の関係が今後の課題となろう。特に四ツ池遺跡は弥生第Ⅰ様式古段階の土器を出土する泉州最古の弥生時代遺跡であり、縄文時代終末との関連は重要である。

弥生時代〔第9図〕

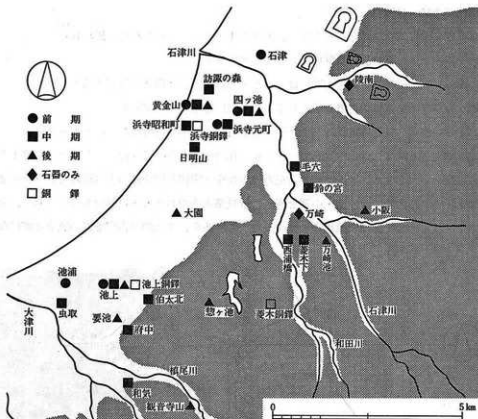
泉北丘陵では弥生時代の遺跡もあまり知られていない。当センターが実施した府道松原泉大津線建設に伴う調査で新たな知見が得られたが、その他は少ない。

石津川・和田川流域ではなんとといっても四ツ池遺跡が著名である。四ツ池遺跡は縄文時代に始まる遺跡であるが、弥生時代では第Ⅰ様式古段階からずっと続く拠点集落と言えらる。これまでの調査で3ヶ所の居住地、2ヶ所の方形周溝墓群ほかが発見されているが、水田遺構そのものは未確認である。四ツ池遺跡周辺には浜寺元町遺跡、浜寺諏訪の森遺跡、浜寺黄金山遺跡、浜寺公園駅遺跡、浜寺昭和町砂丘遺跡などの中小の遺跡が分布しているし、浜寺黄金山遺跡と浜寺公園駅遺跡の中間にある浜寺昭和町遺跡からは銅鐸が出土している。これらの遺跡の多くは浜堤上に立地するようであるが、いわゆるキャンプサイトのものもあろうし、墓地のようなものもあろう。いずれにせよ、四ツ池遺跡との関連の中で出現したものと考えられるが、性格がいまひとつ明確でないのは惜まれるところである。

泉北丘陵に弥生時代の遺跡が出現するのは、現状では、第Ⅱ様式以降のことであり、すくなくとも四ツ池遺跡よりは何段階か遅れるようである。しかし、西浦橋遺跡のしがらみ（第Ⅱ様式）の設けられた自然流路からは第Ⅰ様式の土器が断片的だが出土しているし、後述の鈴の宮遺跡でも第Ⅰ様式の土器があり、今後、弥生時代前期の遺跡が発見される可能性もある。

弥生時代中期になると菱木下遺跡の西半から西浦橋遺跡にかけて堅穴住居や方形周溝墓が営まれるようになる。堅穴住居3棟、掘立柱倉庫1棟、方形周溝墓計9基が発見されており、弥生時代中期には和田川右岸の中段段丘縁辺に定住していた集団がいたことが判明している。

石津川・和田川合流点の右岸にある鈴の宮遺跡では、弥生時代中期の方形周溝墓12基のほか、土壙などが検出されており、ここに一つの集団の存在が認められる。鈴の宮遺跡の北西には毛穴遺跡があり、第Ⅱ様式・第Ⅲ様式の土器を出すのが実態は不明である。また石津川・和田川合流点



第9図 弥生時代遺跡の分布

の南側にある万崎遺跡では磨製石剣や太型始刃石斧が出土している。

弥生時代後期になると万崎池遺跡に集落が出現する。竪穴住居・土墳墓などがみられる。石津川支流陶器川右岸の小阪遺跡でも弥生時代後期の土器が出土する。

このようにみえると、泉北丘陵における弥生文化は、まず四ツ池遺跡に定着し、しばらくのちに石津川・和田川を遡って、西浦橋・菱木下・鈴の宮・毛穴・万崎などの遺跡に波及したと推定されよう。それは弥生時代中期、Ⅱ様式の段階のことと考えられる。弥生時代中期以降、遺跡数の増大や遺跡規模の拡大がほとんどみられないのは、やはり広大な沖積平野がないためであろう。後期になると小規模な集落が点在するようになる様子がかいまみられるが、顕著ではない。その点では大津川流域とは対照的であり、この傾向は古墳時代前期にはさらに顕在化する。

和泉丘陵では弥生時代後期に観音寺山遺跡^{Ⅱ64}の大集落が営まれるが、泉北丘陵ではそれと対照的にこのような大規模な高地性集落はみられない。しかし、観音寺山遺跡が池上遺跡と関連づけて考えられるように、四ツ池遺跡と関連を有するような高地性集落が泉北丘陵のどこかに存在する可能性は十分にある。

銅鐸は第9図に示した3例以外に、陶器村出土と伝えるものと、家原付近出土と伝えるものがある。

古墳時代〔第10・11図〕

和泉北部における古墳の分布をみると、大きく4グループにわかれると思われる。^{註65}

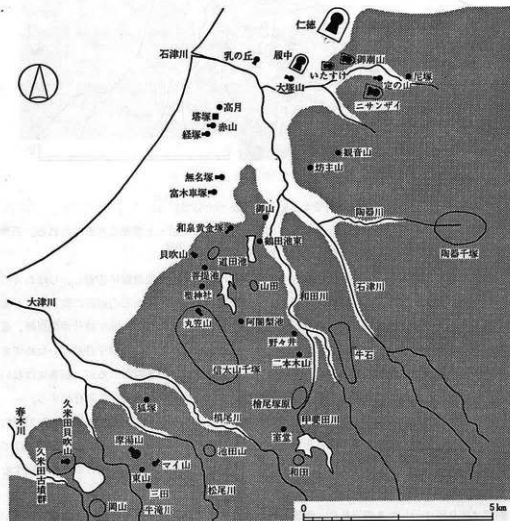
第1のグループ……百舌鳥古墳群を中心とするグループ

第2のグループ……和泉黄金塚古墳をはじめとする信太山丘陵西部に分布するグループ

第3のグループ……摩湯山古墳を中心とする久米田に分布するグループ

第4のグループ……泉北丘陵に分布する檜尾塚原古墳群・牛石古墳群などのグループ

ただ、前三者と第4のグループを同一レベルで比較することはできない。なぜなら、第1の百舌鳥古墳群を中心とするグループは5世紀の大和政権と密接な関係のある古墳群であり、第2・第3のグループは古墳時代前期・中期を通じて首長墓系譜のおおる古墳群であるのに対し、第4のグループは主として古墳時代後期に属する古墳群であり、また陶邑古竈址群の成立と密接な関



第10図 古墳の分布

係があると考えられるからである。

本項では第4のグループ、すなわち泉北丘陵に分布する古墳と古墳時代遺跡について、陶器古窯址群出現前と出現後にわけて考えてみたい。

現在知られている泉北丘陵最古の古墳は二本木山古墳²⁵⁶であろう。二本木山古墳は径約12m、高さ約2mの小円墳で、内部主体は砂岩製削竹形石棺を直葬したものであった。ただ、二本木山古墳はこれに続く古墳が確認されておらず、現状では単独で存在しており、たचितた議論をすることはできないが、たとえ古墳時代前期の首長墓だとしても径12mときわめて小規模である点や系譜上これにつながる首長墓がみあたらない点からして、泉北丘陵では和泉北部の平野部のような大きな勢力を有した集団は居住していなかったとみるべきであろう。このことは泉北丘陵の平野部の狭小性にもよくあらわれており、弥生時代を通じて継続する遺跡が存在しなかったことから背首できるのである。

二本木山古墳といかなる関係にあるかは不明だが、二本木山古墳と和田川を隔てた梅丘陵には陶器古窯址群出現前の集落として野々井遺跡をあげることができる。野々井遺跡では陶器古窯址群出現前の竪穴住居が25棟も発見されており、ここに居住した集団があったことを示している。

しかし、いずれにせよ古墳時代前期から中期にかけて、陶器古窯址群出現までは、顕著な集落はみられず、したがって大型の首長墓もつくられることはなかった。これは和泉北部の平野部とは著しく対照的である。

陶器古窯址群成立後は敢断には少ないながらも古墳群の形成がみられる。代表的なものをあげれば、陶器千塚古墳群、牛石古墳群、檜尾塚原古墳群などがある。なお、信太山丘陵に分布する信太山千塚古墳群や道田池古墳群などは、丘陵の西側つまり平野部を望むような立地をしており、陶器古窯址群との関連より平野部の遺跡との関係を考えるべきであろう。

泉北丘陵に分布する古墳群は10数基から50基程度の中小規模の群集墳であるが、いくつかの特徴を有している。それを列挙すると

- 1 群内に1基から数基の小型前方後円墳を含んでいる。
- 2 墳丘規模が径10m前後の小円墳が大部分を占める。
- 3 内部主体は、横穴式石室、カマド塚、陶棺をおさめたもの、特異な埴輪状の棺をおさめたものなどヴァリエティに富む。
- 4 丘陵ごとに一群が分布する傾向がある。

ということになる。しかしながら、古墳群の内容が十分には明らかにされておらず、集落との関係もほとんどわかっていない。

陶器千塚古墳群は陶器山地区およびその北の丘陵を中心に分布しており、御坊山古墳、ツキ塚古墳の2基の小型前方後円墳を含む群集墳である。この古墳群のすぐ南側には須恵器の集散地と考えられる辻之遺跡²⁵⁸があり、また陶荒田神社²⁵⁹が²⁵⁸この付近が須恵器生産者集団の中心地の一つであったことを物語っている。陶器千塚古墳群はこれらの須恵器生産者集団の奥津城であら



第11図 牛石 8号墳

う。

牛石古墳群は梅丘陵中央部に分布している。2基の小型前方後円墳（うち1基は7号墳＝高塚山古墳）を含む15基～20基からなる群集墳で、古墳時代後期にその中心をおくものと考えられる。13号墳・14号墳のように終末期の古墳をも含んでおり、一定期間造墓活動を続けた集団がいたことを示している。7号墳が全長約40mと東北丘陵

では最大の古墳である点や、13号墳・14号墳が終末期古墳であり終末期古墳を造営しうること自体大和政権内における一定の地位を示していると考えられる点などを評価すると、東北丘陵において中心的地位を占めた集団の形成した古墳群とみてもよからう。

この牛石古墳群の北に接して野々井遺跡・野々井南遺跡がある。これらの遺跡の調査でも削平された古墳が10数基発見されており、中には帆立貝式の大芝古墳もあり、古墳の敷の上からも上述の推定をうらづけるものとなっている。野々井遺跡は古墳時代前期から後期にかけての集落遺跡で、陶器古窯址群出現後の堅穴住居5棟・掘立柱建物30棟以上が発見されており、集落の面でも須恵器生産者集団の中核であったと推定しうるのである。

また牛石古墳群・野々井遺跡と石津川を隔てた対岸には須恵器集敷地の一つと考えられる深田遺跡、須恵器生産者集団の守護神を祀ると考えられる多治速比売神社、最古の須恵器窯の一つであるTK73号窯などがある。これらの諸遺跡は相互に有機的関連があると考えられる。野々井遺跡を居住地とした須恵器生産者集団が想定でき、彼等の生産・流通活動の場が高蔵寺地区窯跡群・深田遺跡、墓地が牛石古墳群、祭祀の場が多治速比売神社であろう。また野々井遺跡の北約2kmにある菱木下遺跡・万崎池遺跡などで発見されている夥しい数の土壊基群は須恵器工人達の墓である可能性が大きい。

檜尾塚原古墳群はそのほとんどが破壊されてしまったが、10数基からなる古墳群でやはり群内に2基ないし3基の小型前方後円墳を含んでいる。比較的よく調査されており内容をうかがうことができるものがある。

前方後円墳は7号墳と9号墳で、ともに全長17m前後の小型のものである。いま1基調査されずに破壊された前方後円墳があったという。円墳はおしなべて径15m以下の小規模なもので、報告書が刊行されていないため詳しくは検討できないが、6世紀～7世紀のものと言える。主体部が横穴式石室のもの、木棺直葬のもの、須恵器大甕を合せ口にして直葬したものなどさまざまであり、横穴式石室に陶棺をおさめたものもある。

以上述べた以外にもいくつかの古墳が知られている。山田古墳群は借太山丘陵の東縁に立地す

る敦基からなる群集墳である。内容は不明だがすぐ南西側に古墳時代住居址の発見された山田遺跡がある。

府道松原東大津線建設に伴って当センターが実施した調査では古墳時代の土壘墓が大量に発見されている。すでに述べたように、これらは古墳に埋葬されない下級の須恵器工人の集団墓地であろう。

古墳時代の集落は辻之遺跡、深田遺跡、野々井遺跡、万崎池遺跡、菱木下遺跡、西浦橋遺跡などで発見されている。このうち辻之遺跡・深田遺跡などは須恵器の集散地と推定され、万崎池遺跡・菱木下遺跡・西浦橋遺跡などは工人の居住地と考えられる。野々井遺跡も須恵器生産者集団の居住地だがこちらには須恵器生産の指導者層も含まれていよう。他に美木多^{註75}第2地点、檜尾第6地点、山田遺跡などで住居址が発見されているが、いずれも断片的である。

陶器古窯址群そのものについてはここであらためて述べるまでもあるまい。いままで合計8冊の報告書が刊行され、またいくつかの書籍でもとりあげられているのでそれらに譲りたいと思う。

歴史時代〔第12・13図〕

東北丘陵内においては飛鳥・白鳳時代建立の寺院はいまのところ知られていない。この地域に寺院が出現するのは奈良時代になって僧行基が活躍するようになってからのことであろう。

信太山丘陵西縁や、横尾川に面する信太山丘陵南縁には白鳳時代～奈良時代建立の寺院がいくつかみられる。律令制の国郡制では和泉国和泉郡に属する地域になるが、信太郷の郷名氏族である信太首が建立した信太寺^{註78}、池田郷の郷名氏族である池田首が建立した池田寺^{註79}、坂本郷の郷名氏族である坂本臣が建立した坂本寺（禪寂寺）^{註80}などが調査されている。珍県主建立とされる和泉寺は不明な点が多い。

東北丘陵の北側にあたる地域には上述のように行基ゆかりの寺院が建立される。家原寺は行基の生家であり、大野寺は土塔や文字瓦で著名である。

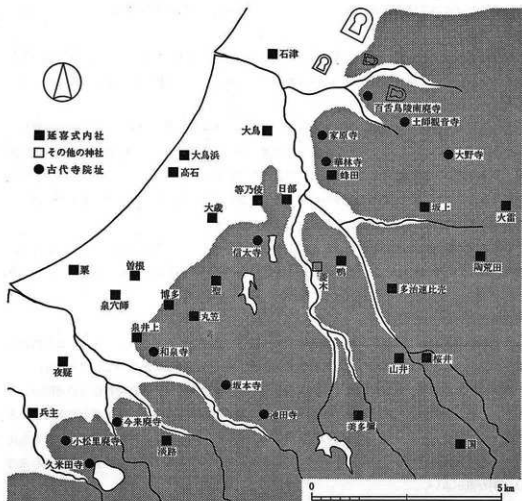
寺院が少ないのに対して、延喜式神名帳記載の古社は東北丘陵の各地に鎮座している。

和泉国一の宮とされる大鳥大社は信太山丘陵の先端に立地する。この地は律令制の大鳥郡大鳥郷にあたり、郡名を冠した郷であることから大鳥郡の中心地であったと考えられる。大鳥大社は大鳥連の祖の天兒屋根命を祀っており、中臣氏の同族の大鳥連の本貫地であろう。

大鳥大社のほか東北丘陵には、日部神社、蜂田神社、火雷神社、坂上神社、鴨神社、陶荒田神社、多治速比売神社、桜井神社、美多彌神社、国神社などの式内社が鎮座している。西浦橋遺跡に近い式内鴨神社は、かつて太平寺村内にあったが現在は多治速



第12図 大野寺土塔



第13図 式内社及び古代寺院の分布

比売神社に合祀されており、旧社地は詳かでない。祭神不明だが、加茂別雷神説と建内宿禰説がある。

式内社ではないが菱木村内に菱木神社がある。字椋山に鎮座し、由緒は詳かでないが須佐之男命を祀っている。^{註83}

古代の集落遺跡もほとんど発見されていない。深井清水町遺跡で奈良時代の掘立柱建物ほか^{註84}が検出されているのは古い例であろう。平安時代以降になると田園遺跡・万崎池遺跡・菱木下遺跡などに建物が見られる。^{註85} (大野)

註

1 地理的特徴については、日下雅義ほか「泉北丘陵および周辺部の地理的環境と遺跡の立地」(「陶色」

- Y 1982 大阪府教育委員会)に負うところが大きい。
- 2 中村 浩ほか「陶邑」Ⅰ(1977 大阪府教育委員会)
 - 3 「陶邑」Ⅱでは前田川を石津川から直接わかれる支流としているが、石津川から直接わかれるのは陶器川であり、陶器川の支流が前田川である。
 - 4 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」Ⅲ(「堺市文化財調査報告」第11集 1983 堺市教育委員会)
 - 5 大阪文化財センター「万崎池遺跡現地説明会資料(Ⅱ)」(1981)
 - 6 松藤和人「土器以前の文化」(「大阪府史」第1巻 1978 大阪府)
 - 7 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 8 樋口吉文「東上野芝遺跡発掘調査報告」(「堺市文化財調査報告」第10集 1982 堺市教育委員会)
 - 9 森村健一ほか「今池遺跡」(1976 今池遺跡調査会・堺市教育委員会)
 - 10 村上富貴子氏教示
 - 11 森 茂・白石耕治「和泉丘陵内遺跡発掘調査概要」Ⅰ(1983 和泉丘陵内遺跡調査会)
 - 12 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 13 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 14 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 15 中村 浩ほか「陶邑」Ⅰ(1976 大阪府教育委員会)
 - 16 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」Ⅲ(前掲)
 - 17 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 18 岸木道昭ほか「大園遺跡発掘調査概要」Ⅳ(1982 大阪府教育委員会)
 - 19 石神 恰「大園遺跡発掘調査概要」Ⅰ(1975 大阪府教育委員会)
また大園遺跡調査会による調査においても石核・翼状削片が出土している。神谷正弘ほか「大園遺跡発掘調査概報」2(1976 大園遺跡調査会)
 - 20 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」Ⅲ(前掲)
 - 21 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 22 中村 浩ほか「陶邑」Ⅰ(前掲)
 - 23 森 浩一ほか「和泉の古代遺跡」(「和泉考古学」第5号 1961 泉大津高等学校地歴部)
 - 24 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 25 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 26 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 27 和泉丘陵遺跡分布状況調査会「和泉丘陵遺跡分布調査報告書」(1977)
 - 28 岸木道昭氏教示
 - 29 石部正志ほか「岸和田市史」第1巻(1979 岸和田市)
 - 30 樋口吉文「新金岡更池遺跡発掘調査報告」(「堺市文化財調査報告」第6集 1980 堺市教育委員会)
 - 31 嶋谷和彦「深井清水町遺跡発掘報告—B地点第3地区—」(「堺市文化財調査報告」第13集 1983 堺市教育委員会)
 - 32 石部正志ほか「岸和田市史」第1巻(前掲)
 - 33 森村健一ほか「向井神社遺跡・四ッ池遺跡」(1981 堺市教育委員会)
 - 34 小野山節ほか「堺市史」続編第1巻(1971 堺市)
 - 35 中村 浩「長峯丘陵遺跡分布調査概要」(1974 大阪府教育委員会)
 - 36 大阪府教育委員会「観音寺跡(信太寺跡)発掘調査現地説明会資料」(1977)
 - 37 石部正志ほか「岸和田市史」第1巻(前掲)
 - 38 和泉丘陵遺跡分布状況調査会「和泉丘陵遺跡分布調査報告書」(前掲)
 - 39 松藤和人「土器以前の文化」(前掲)
 - 40 大阪文化財センター「大平寺遺跡現地説明会資料」(1981)
 - 41 泉 拓良氏教示
 - 42 北野俊明・白神典之氏教示

- 43 石部正志ほか「岸和田市史」第1巻(前掲)
- 44 樋口古文「四ツ池遺跡昭和56年度発掘調査概要報告」(1981 四ツ池遺跡調査会)
- 45 大阪府教育委員会調査、森井貞雄氏教示
- 46 第2阪和国道内遺跡調査会「池上・四ツ池遺跡」16(1971)
- 47 渡邊昌宏「淡輪遺跡発掘調査概要」Ⅱ(1981 大阪府教育委員会)
- 48 坂口昌男ほか「豊中・古池遺跡発掘調査概報」Ⅱ(1976 豊中・古池遺跡調査会)
- 49 尻掛 薫・佐藤正則「府中遺跡発掘調査概要」Ⅰ(1978 和泉市教育委員会)
- 50 久米雅雄「第2阪和国道内遺跡発掘調査概報」(1980 大阪府教育委員会)
- 51 聖田 直「岸和田市春木八幡山遺跡の研究」(1965 帝塚山大学考古学研究室)
- 52 本書第Ⅲ章第2節参照
- 53 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」Ⅱ(前掲)
- 54 堺市教育委員会調査、北野俊明氏教示
- 55 東大阪市木走遺跡、八尾市久空寺北遺跡ほか
- 56 聖田 直「堺市四ツ池遺跡調査概要」(帝塚山考古学シリーズ 5 1969 帝塚山大学考古学研究室)
- 57 聖田 直「堺市浜寺諏訪ノ森出土の弥生式土器」(「考古学雑誌」第43巻第1号 1957)
- 58 末永雅雄「大阪府堺市黄金山遺跡」(「日本考古学年報」1 1951 誠文堂新光社)
- 59 島田貞彦「和泉国泉北郡浜寺発見の銅鐸」(「歴史と地理」第21巻第6号 1934)
- 60 北野俊明・野田芳正「鈴の宮」Ⅱ(前掲)
- 61 報告書では第Ⅱ様式に位置づけられているが、2号方形周溝墓からは第Ⅰ様式の土器も出土しており、前期に遡る可能性がある。2号方形周溝墓に切られている4号方形周溝墓も同様である。
- 62 石田 修「万崎遺跡発掘調査報告」(「堺市文化財調査報告書」第8集 1981 堺市教育委員会)
- 63 野田芳正「小阪遺跡発掘調査報告」(「堺市文化財調査報告書」第12集 1983 堺市教育委員会)
- 64 森 浩一・鈴木博司「観音寺山弥生集落調査概報」(1968 観音寺山遺跡調査団)
- 65 広瀬和雄「和泉北部における古墳群の動向」(「大園遺跡発掘調査概要」Ⅱ 1975 大阪府教育委員会)では泉北丘陵に分布するグループを除いて3つのグループにわけている。
- 66 藤沢一夫「野々井二本木山古墳の調査」(「大阪府の文化財」1962 大阪府教育委員会)
- 67 中村 浩ほか「陶邑」Ⅰ(前掲)
- 68 堺市教育委員会「辻之遺跡現地説明会要旨」(1982)
- 69 中村 浩ほか「陶邑」Ⅱ(前掲)
- 70 中村 浩ほか「陶邑」Ⅲ(前掲)
- 71 中村 浩ほか「陶邑・深田」(1973 大阪府教育委員会)
- 72 大阪文化財センター「葦木下遺跡現地説明会資料(Ⅰ)」(1981)
- 73 大阪文化財センター「葦木下遺跡、万崎池遺跡現地説明会資料(Ⅰ)」(1980)
- 74 大阪文化財センター「万崎池遺跡現地説明会資料(Ⅰ)」(前掲)
- 75 中村 浩「陶邑」Ⅳ(前掲)
- 76 大阪府教育委員会「泉北丘陵内埋蔵文化財発掘調査概要」(1974)
- 77 大阪府教育委員会「泉北丘陵内埋蔵文化財発掘調査概要」(前掲)
- 78 田辺昭三「須恵器」(「日本美術工芸」388号~399号 1971)
- 79 田辺昭三「須恵器大成」(1981 角川書店)
- 80 中村 浩「和泉陶邑窯の研究」(1981 柏書房)
- 81 大阪府教育委員会「観音寺跡(信太寺跡)発掘調査現地説明会資料」(前掲)
- 82 尻掛 薫ほか「信太寺跡発掘調査概要」(1979 和泉市教育委員会)
- 83 大阪府教育委員会「池田寺跡発掘調査現地説明会資料」(1979)
- 84 大阪府教育委員会「池田寺跡現地説明会資料」(1979)
- 85 藤沢一夫「押成寺(坂本寺)跡調査概要」(1966 大阪府教育委員会)
- 86 藤沢一夫「大野寺跡土塔の実測調査」(「大阪府の文化財」1962 大阪府教育委員会)

- 82 式内社研究会編「式内社調査報告」第5巻（1977 皇学館大学出版部）
- 83 井上正雄「大阪府全志」巻之五（1922）
- 84 北野俊明・十河稔郁「深井清水町遺跡発掘調査報告 -B地点第1地区・第2地区-」（『堺市文化財調査報告書』第9集 1981）
- 鳴谷和彦「深井清水町遺跡発掘調査報告 -B地点第3地区-」（前掲）
- 85 石田 修・十河稔郁「田園遺跡発掘調査中間報告書」（1983 堺市教育委員会）

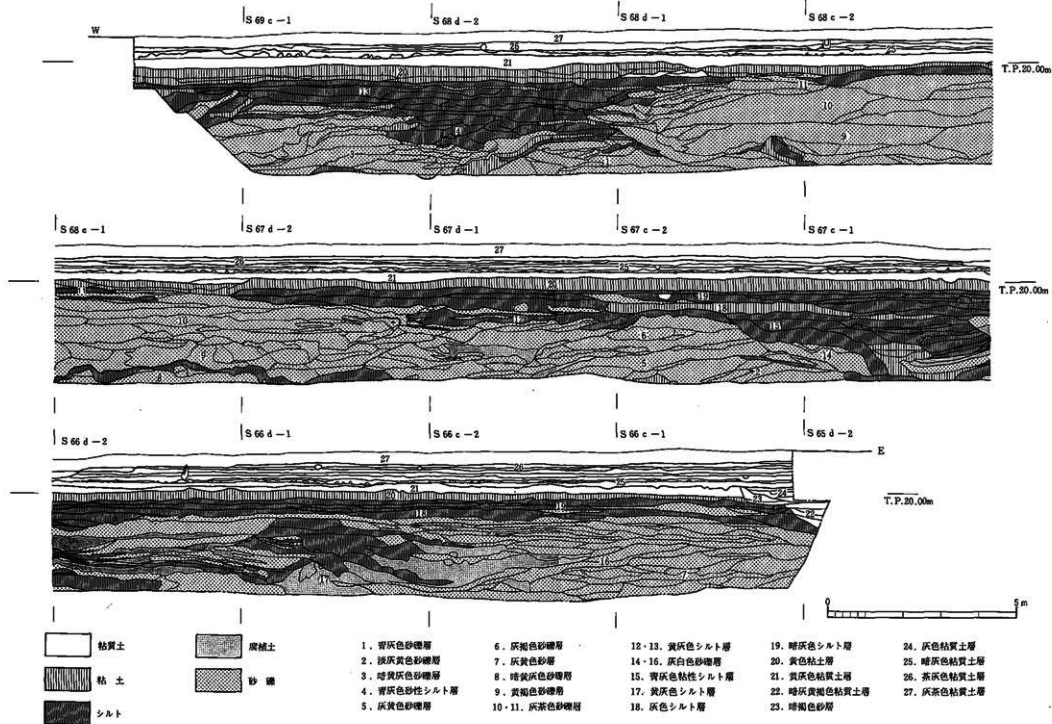
第Ⅲ章 調査の結果

第1節 基本層序

今回の調査は、先にも述べたように現和田川の東岸の沖積地部分にあたる。調査は、中央部分を東西方向に幅員28mをG. L. - 3.5m、両側11mづつをG. L. - 2mまで掘り下げた。概観としては、概ねG. L. - 3.5mからG. L. - 1.0m (T. P. + 19.50m) までは、和田川の氾濫原であり、砂礫・砂・シルトが複雑に入りこんでいる。上層は、粘土及び粘質土が水平堆積し、沖積平野を形成し、中近世においては水田に利用されている。

以下、基本層序について下層から順に述べることにする(第14図)。

- 第1層 青灰色砂礫層。山状に盛り上がっている。最も厚みをもつところで約1mある。縄文時代中期末の土器を検出している。
- 第2層 淡灰黄色砂礫層。この層も第1層と同様、山状に盛り上がっている。最も厚みをもつところで1.2mある。
- 第3層 暗黄灰色砂礫層。調査区の最西端に見られる。第1層を東肩とする河川の堆積層であろう。第1層の東側の上面に腐植土層が約10~40cmの厚みをもって堆積している。厚い所で1.7mある。
- 第4層 青灰色砂性シルト層。第3層の上部に見られるものである。
- 第5層 灰黄色砂礫層。第2層の上部にある。
- 第6層 灰褐色砂礫層。第5層の上部にあり、第5層上面の一部に腐植土が見られる。第2層、第5層、第12層と共に調査区東部に検出された縄文時代晩期の河川(縄文河川と呼称しており、その堆積土は、第14~17層である。)の西肩を形成している。縄文時代後期・晩期の土器が混在して検出されている。
- 第7層 灰黄色砂層。調査区の東端にみられるもので、先に述べた縄文河川の東肩を形成している。又、第14図では見られないが、調査区の東北部と東南部に検出された弥生時代の河川の西肩及び底面の一部を形成していると思われる。
- 第8層 暗黄灰色砂礫層。第6層の上部にある。腐植土層、シルト層を帯状に含んでいる。第9層を堆積層とする河川の東肩を形成している。
- 第9層 黄褐色砂礫層。第1・3・4層を西肩のベースに、第8層を東肩のベースにする河川の堆積層である。ブロック状に腐植土・シルトが見られる。
- 第10・11層 灰茶色砂礫層。山状に広く盛り上がって見られる。いわゆる「シユートバー」



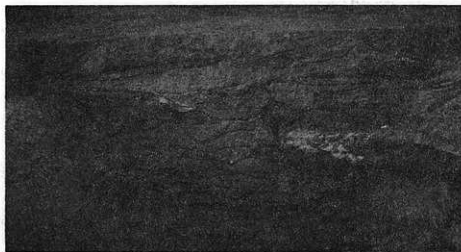
第14図 Scライン南面土層図

- と呼ばれるもので、平面的には調査区西南端から東北の方向に調査区の中央付近まで帯状に見られる。縄文時代後期の土器を主体に比較的多量含んでいた。
- 第12・13層 黄灰色シルト層。シュートバーの盛り上がりの両側に堆積したものである。第12層は砂層を、第13層は粘土及び砂層を帯状に含んでいる。
- 第14・16層 灰白色砂礫層。縄文河川の中の最も古い堆積層である。
- 第15層 青灰色粘性シルト層。第14層の上部にあり、縄文河川のある時期の西屑を形成していたものである。
- 第17層 黄灰色シルト層・灰黄色砂層の互層。縄文河川内の堆積層である。シルト・砂の互層である。上に腐植土が複雑に入りこんでいる。河川が徐々に埋没してゆく過程を見ることができる。縄文時代晩期の土器を含んでいる。
- 第18層 灰色シルト層。部分的には砂層又は粘土層が帯状に見られる。調査区東部から中央にかけてほぼ水平な堆積をみせている。
- 第19層 暗灰色シルト層。第18層の上部に見られるもので、第18層とはほぼ同じ地域に広がりが見られる。
- 第20層 黄色粘土層。調査区全域にわたって20~40cmの厚みをもって水平に堆積している。上面には、縄文時代晩期末の長原式の時期に属する土壌基群がある。この時期になって安定した沖積平地化したものと思われる。若干の縄文土器を含んでいる。
- 第21層 黄灰色粘質土層。第20層の上部に20~30cmの厚みをもって広がっている。遺物は確認されていない。
- 第22層 暗灰黄褐色粘質土層。弥生時代河川の上層にあたる。おそらく河川が埋没した後の凹地に堆積したものであろう。
- 第23層 暗褐色砂層。弥生時代河川が完全に埋没した後に河川の西屑付近を流れる溝があり、その堆積層である。
- 第24層 灰色粘質土層。第1次水田耕作土層（灰色粘土下層）である。厚さは10~20cmである。上面の凹凸は牛足跡である。この層は第23層を開墾したものと思われる。
- 第25層 暗灰色粘質土層。第2次水田耕作土層（灰色粘土）である。厚みは10cm前後である。
- 第26層 茶灰色粘質土層。第3次水田耕作土層（茶灰色土下層）である。厚みは30~40cmと比較的厚い。
- 第27層 灰茶色粘質土層。第4次水田耕作土層（茶灰色土）である。厚みは、20~30cmである。この層は、上下2層に分層でき、上層が耕作土、下層が床土と考えられる。

第28層 黄灰色粘質土層。第5次水田耕作土層（黄灰色土）である。厚みは、20~30cmである。時期としては近世に属すると思われる。

第29層 表土層。厚みは30cmである。

今回の調査では、調査方法の限界から地山（洪積層）を検出することはできなかったが、氾濫原から沖積段丘化する過程を理解する好資料を得たと言える。G. L. -3.5mから-2.0m付近すなわち縄文時代中期末葉から晩期に至るまでは、数回にわたる河川の氾濫が見られる。縄文時代晩期末葉長原式の時期になって黄色粘土層が面的な広がりを見せて水平に堆積する。この時期になって氾濫原から沖積段丘化し土壌基群を形成している。その後この沖積段丘面は10世紀ないし13世紀に至って条里制が施行され水田化されて現代に至っている。（橋本）



第15図 下層調査トレンチ

第2節 縄文時代の遺構と遺物

1 土層の堆積状態と遺構

縄文時代に属する遺構としては第20層黄色粘土層上面で検出した土墳墓群があげられる。この第20層上面には他に焼土遺構がありこれも本項でとりあげるが、これには時期を決定しうる資料がなく縄文時代に特定できるものではない。

第20層黄色粘土層以下は、粘土・シルト・砂・礫・腐植土などが互層に堆積している。これらは和田川の氾濫によって形成されたものと考えられ、人為的遺構は認められなかった。現地調査においては分層発掘を心がけたが、砂礫層の上にまた同様の砂礫層が堆積していることが多く、しかも調査区内ですこし地点が変わると堆積状況がまったく異なるということもあって、分層発掘を十分には果たせなかった感がある。

本項では、基本層序と重複する部分もあるが、まず第20層黄色粘土層以下の土層の堆積状況とその時期について述べ、その後第20層黄色粘土層上面で検出した遺構について述べる。

(1) 黄色粘土層以下の堆積とその時期〔第14～16図；図版4～6〕

第20層黄色粘土層以下は大きく8層にわけることができる(第16図)。

下層シルト〔第15図〕

最下層のシルト層は下層調査トレンチにおいて確認したもので、Scライン土層図にはあらわれていない。調査面積が限られており、その範囲では土器は出土しなかった。自然木・植物遺体・種子などが包含されていた。層序からみて縄文時代中期末以前の堆積である。なお、このシルト層よりも下は再び砂礫層となる。

下層砂礫

第1層青灰色砂礫層が主としてこれにあたる。また、第2層淡灰黄色砂礫層・第3層暗黄灰色砂礫層もこれに含めてよいと考えている。これらの層からは縄文時代中期末の土器が出土している。ただし、縄文時代後期の中津式以降縁帯文くらいまでの土器が十数点含まれているが、これは分層発掘が不十分なための混入であろう。したがって下層砂礫は縄文時代中期末の堆積と考えられる。

間層シルト

下層砂礫と上層砂礫・「シュートバー」の間に一部だがシルト層が堆積している。第4層青灰色砂性シルト層がそれで、この層が堆積している範囲では下層砂礫と上層砂礫・「シュートバー」の分層発掘を果たしている。間層シルトには土器はほとんど包含されていなかったが、わずかに時期の判明するものがあつた。この土器(38)は縄文時代後期初頭の中津式と考えられるものである。間層シルトの堆積時期を示しているものと考えたい。

上層砂礫

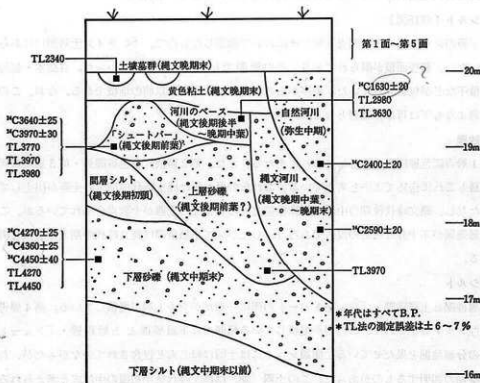
間層シルトと「シュートバー」の間に堆積したものの。第5層～第9層がこれにあたると考えられるが、「シュートバー」と一連の堆積の可能性もある。また下層砂礫を直接おおうところもあり、その分離は困難であった。さらに縄文晩期の自然河川との切り合い関係もあり、出土土器は縄文時代中期末から晩期にまで及んでいる。層序からみて縄文時代後期初頭～前葉の堆積であろう。

「シュートバー」

間層シルト及び上層砂礫の上は「シュートバー」と呼んでいる砂礫層で第10・11層灰茶色砂礫層がこれにあたる。この層も凹凸が著しく分層発掘が不十分で、縄文時代中期末以降晩期に至る土器が出土しているが、主として包含されているのは縄文時代後期前葉の緑帯土器である。層序からみても矛盾がなく、「シュートバー」は縄文時代後期前葉の堆積とみてよからう。

河川のベース

時期を限定しにくいのは河川のベース（第12・13層黄灰色シルト層）と縄文河川である。後述するように縄文河川が最終的に埋没するのは縄文時代晩期末と考えられるので、河川のベースは「シュートバー」の時期すなわち縄文時代後期前葉を上限とし、縄文時代晩期末を下限とする。



第16図 層序模式図と年代

出土土器にも縄文時代後期後半～晩期中葉の幅がある。一時期に堆積したのではなく一定の期間をかけて堆積した可能性もあるので、ここでは出土土器の示す時期、すなわち縄文時代後期後半～晩期中葉を提示するにとどめたい。

縄文河川

第14層～第17層がこれにあたる。出土遺物を検討すると、縄文時代中期末の土器や後期の土器も含んでいるが、縄文時代晩期の滋賀里Ⅱ式深鉢(98)や船橋式もしくは長原式に属すると考えられる底部(106)も出土しているので、縄文河川が最終的に埋没するのは縄文時代晩期末のことと考えてよからう。出土遺物からみた縄文河川の上限は縄文時代中期末だが、これは縄文河川が下層砂礫をけずって流れたために混ったものであろう。河川のベースに縄文時代晩期中葉の土器があることを根拠に、縄文河川の時期は縄文時代晩期中葉～晩期末と考えておきたい。

黄色粘土

土壌基群のベースになっている第20層黄色粘土層がこれにあたるが、ここでは第18層灰色シルト層・第19層暗灰色シルト層もこれに含めている。黄色粘土をベースにする土壌基には確実に長原式に属するものがあり、この点は動かしようがない。縄文河川が最終的に埋没するのが縄文時代晩期末であるから、黄色粘土は縄文晩期終末のごく短期間に形成されたと推定される。

(2) ^{14}C 法とTL法による年代測定〔第16図〕

上述の各時期の実年代を知るため ^{14}C 法とTL(熱ルミネッセンス)法による年代測定を実施した。分析試料は ^{14}C 法が自然木、TL法が土器片である。それぞれの測定結果については本章第5節に報告するとおりである。本項ではその測定結果に基づいて各時期の実年代に簡単に触れておきたい。

下層砂礫と「シュートバー」では各5点を分析した。これらの試料は出土層位・型式とも信頼できるもので、かつ量的にも十分なものであった。下層砂礫ではB. P. 4270～4450の間に、「シュートバー」ではB. P. 3640～3980の間に測定値が集中している。

上層砂礫の試料は縄文時代中期末と考えたものだが、測定値は若干新しく出ている。

河川のベースの試料は年代がばらついている。これには2つの要因が考えられる。まず第一に、 ^{14}C 法の試料は遺存状況の悪い小さな自然木であったこと、またTL法の土器片も型式を特定できないものであったことである。第二に、すでに述べたように河川のベースの時期に幅がある可能性があることである。この2つの要因が重なってばらついた測定値が出たものと考えられる。

縄文河川、土壌基、それに参考に分析に加えた弥生時代の自然河川(=弥生河川)、の試料は各1点という限界もあり積極的な評価はさしひかえるが、あまり矛盾ないものと考えている。土壌基の試料は土器棺に用いられた長原式土器の破片であり、縄文時代晩期終末のものである。

これらの測定結果は、不確定要素の強い河川のベースの例を除き、現在知られている長編年の実年代には合うものと言えよう。

(大野)

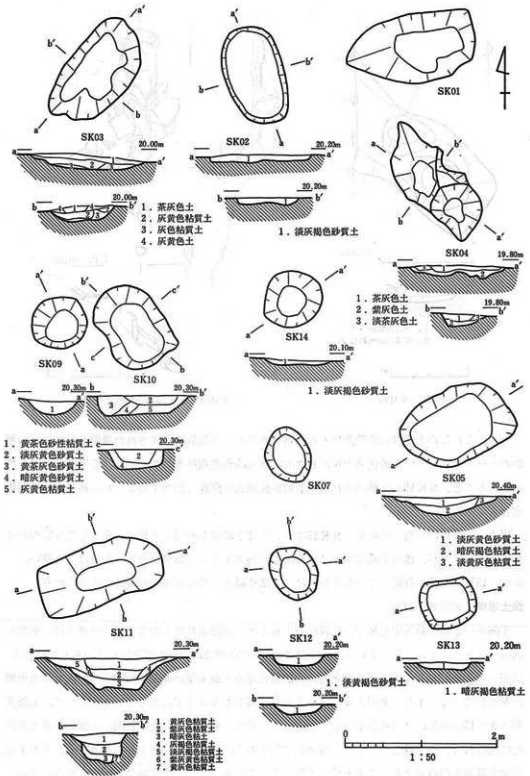
(3) 黄色粘土層上面の遺構

土壌基群〔第17～19図・付図；図版8～11・13；第1表〕

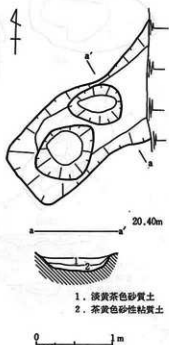
当調査区では、縄文時代晩期末頃、黄色粘土層の均一な堆積によって沖積平地が形成され、土地条件は安定する。すると、この黄色粘土層をベースとして土壌が形成されるようになる。土壌は、全部で15基検出され、そのうち大多数は、調査区南東部（D区）に集中して見られる。土壌の形状としては、楕円形のもの、円形・長方形に近い不定形を呈するものと様々であるが、長径（長辺）の長さが短径（短辺）の2倍近くあるもの——A群（SK01、02、03、04、05、11、15）と、長径（長辺）と短径（短辺）の差があまりないもの、あるいはほとんど円形に近いもの（SK07、08、09、12、13、14）——B群、とにはほぼ二分される。更に、B群の土壌の長径（長辺・直径）は、A群の土壌の短径（短辺）の数値に近い。すなわち、面的にはA群の土壌は、B群の土壌の約2倍に相当すると言える。ただ、土器棺を出土したSK15については、東部を土層確認用トレンチで切断して全形は見ることができないものの、長径が2mを超えていること、他の土壌からは、ほとんど出土遺物が見られないのに対して、長原式の深鉢が2個休、1点は、口縁部から体部下半までのもの、もう1点は口縁部片、更にどちらの個体に属するか不明であるが底部片、又、石鉢が1点検出されていること等、他の土壌とは若干異なっていると言える。

第1表 土 壌 一 覧 表

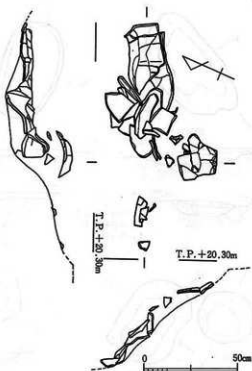
番号	形 状	法 量 (cm)			土 質
		長径	短径	深さ	
SK01	楕 円 形	173	83	15	茶灰色土・紫灰色土・淡茶灰色土
SK02	"	135	78	15	淡灰褐色砂質土
SK03	"	156	84	20	〔上層〕灰黄色土（茶灰色土のブロック含む） 〔下層〕灰黄色粘質土（灰黄色粘質土のブロック含む）
SK04	楕円形に近い不定形	170	76	16	〔上層〕茶灰色土・淡茶灰色土 〔下層〕紫灰色土
SK05	長 方 形	140	97	23	〔上層〕淡灰黄色砂質土 〔下層〕暗灰褐色粘質土・淡黄灰色粘質土
SK06	不 定 形	—	—	—	黄灰色粘質土（炭を含む）
SK07	楕 円 形	76	59	12	淡黄灰色粘質土
SK08	"	100	80	15	"
SK09	円 形	74		17	黄茶色砂性粘質土
SK10	楕円形に近い不定形	115	80	23	〔上層〕黄茶灰色砂質土・淡黄灰色砂質土 〔下層〕黄茶灰色粘性砂質土・灰黄色粘質土・暗黄灰色粘質土
SK11	長方形に近い不定形	170	80	28	〔上層〕黄灰色粘質土（中層）紫灰色粘質土（粘質土ブロック含む） 〔下層〕黄灰色粘質土
SK12	楕 円 形	70	60	12	淡黄褐色砂質土
SK13	長 方 形	73	65	9	暗灰褐色粘質土
SK14	円形に近い不定形	83		6	淡灰褐色砂質土
SK15	不 定 形	—	97	18	〔上層〕淡黄茶色砂質土 〔下層〕茶黄色砂性粘質土



第17図 土 墳 基 群



第18図 SK15



第19図 SK15土器棺検出状況

さて、これらの土壌群の時期及びその性格であるが、土壌群の形成された時期としては、土壌群のベースをなしている黄色粘土層が層位的に縄文時代晩期終末のごく短期間で形成されたことと推定されること、SK15から検出された土器棺が長原式の深鉢に相当することから縄文時代晩期終末と考えられる。

更に、土壌群の性格であるが、SK15については土器棺を検出しており、墓としてさしつかえないと思われるが、他の土壌はあまりにも出土遺物が少なく土器棺が存在したとは考え難い。しかし、15基の土壌が群集している点からは、土壌墓群としての可能性も十分に考えられる。

焼土遺構〔図版8・14〕

T66 a-2区 (D区中央付近) の黄色粘土層上面に検出されたもので、平面プランは、東部を試掘トレンチによって失っているが、長径3m以上短径2.2mの楕円形を呈していると思われる。試掘トレンチによって切られた南北方向の断面を見ると最も深い部分で約60cmの深度を測る土壌状を呈している。また、東西方向ではゆるやかな傾斜をもって東に落ちている。そして、土壌東部に3~15cm程度の焼土塊が集中して見られる。更に、焼土塊は、土壌底面から20cm程度上部以上に見られる。出土遺物としては、時期は不明であるが縄文土器片が1点、石鏃2点、石錐1点、石錐未製品等の石器とサヌカイト片が多数出土している。ただ、炭化物はまったく見られない。

(橋本)

2 縄文土器〔第20～29図；図版20～28；第2表〕

二次にわたる調査で出土した縄文土器はバスケット約120杯である。時間的には縄文時代中期末葉の星田式から晩期終末の長原式まで、一部欠落があるものの、ほぼ全時期の土器が出土している。しかしながら、各時期ごとの土器の量は決して多くなく、1・2点ないし数点しかないものもあり、また層位や遺構の一括関係によって純粋な資料を抽出しうるものでもない。したがって新たに型式を設定するのではなく、既存の型式^{註1}にあてはめるかたちで分類した。以下、時期ごとに土器をとりあげてゆく。

(1) 中期の土器

中期の土器は末葉のものばかりである。ただ1点のみ船元式の可能性をもつ土器があるが、小片であるうえに表面の磨耗が著しく不明瞭である。

中期の土器は8類に分類できる。

中期第Ⅰ類土器 (1)

キャリパー形を呈する有文深鉢で、口縁部外面に太い沈線で横に展開する文様をいれる。2本の平行する沈線をやや間隔をおいて横走させ、その間に長楕円形の区画をつくっている。縄文はみられない。型式不明だが中期の土器であろう。

中期第Ⅱ類土器 (2・3)

口縁部および頸部に沈線による連弧文をめぐらせたもの。(2)では口唇直下に3本の平行沈線をいれ、その下に連弧文を施している。連弧文は単位が短く「U」字形に近い。(3)は地文にこまかい縄文をころがし、そののち多重の連弧文をめぐらせている。これらの土器は星田式に属するものと考えられる。

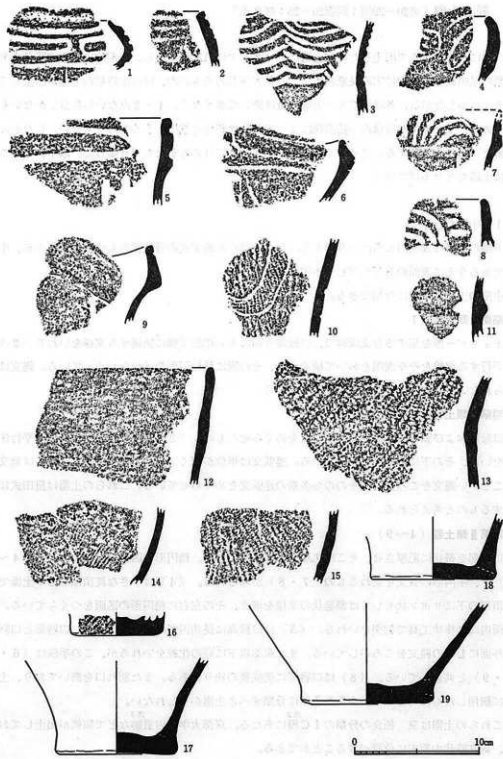
中期第Ⅲ類土器 (4～9)

口縁部を帯状に肥厚させ、そこに沈線で文様を描くもの。楕円形の区画文をつくるもの(4～6)や、半円形の弧文を重ねるもの(7・8)がみられる。(4)は小さな波頂部をもつ土器で、波頂部の下にリボン状もしくは渦巻状の文様を描き、その左右に楕円形の区画をつくっている。区画内には棒状工具で刺突をいれる。(5)は口縁部に長楕円形の区画をつくり、口唇部と口唇部外面にLRの縄文をころがしている。また頸部以下に縦の沈線をいれるが、この手法は(6・7・9)と共通している。(8)は口唇部に焼成後の抉りがある。また割れ口を磨いており、土鍾に転用したものであろう。中期第Ⅲ類に分類すべき土器かもしれない。

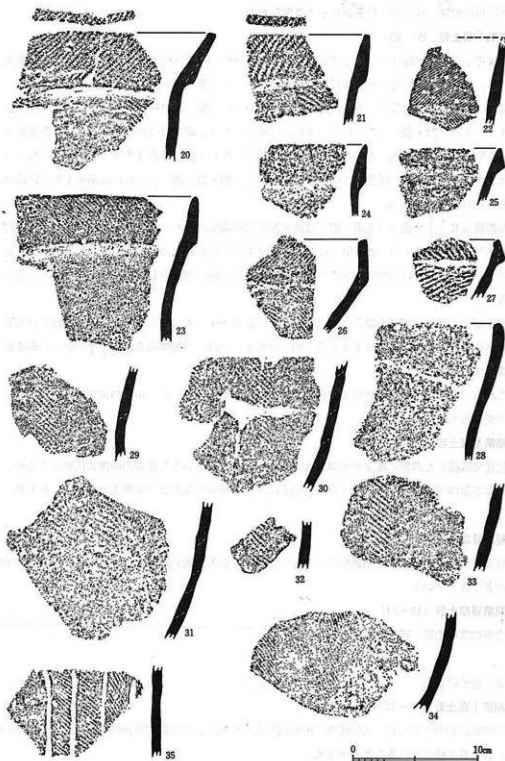
これらの土器は泉 拓良の分類のI C種にあたる。京都大学構内遺跡などで類例が出土しており、縄文時代中期末に位置づけることができる。

中期第Ⅳ類土器 (11)

頸部もしくは胴部に隆帯をめぐらせるもの。本例では隆帯上に指頭によるオサエがある。東大



第20图 绳文土器 (1)



第21図 縄文土器(2)

阪市馬場川遺跡^{図4}、堺市四ツ池遺跡^{図5}などに類例がある。

中期第Ⅶ類土器 (20~35)

口縁部を帯状に肥厚させ、そこに横位の縄文をころがし、頸部以下には間隔をおいた縦の縄文をころがすもの。口縁部にも頸部以下にも縄文を施した土器 (20~22・26~28) が一般的だが、口縁部のみ縄文を施し頸部以下には縄文を施さないもの (23)、口縁部にも頸部以下にも縄文を施さないもの (24・25) もみられる。また、口縁部の肥厚が顕著ではなく、屈曲や縄文の施文方向で区別する例 (26・28) もあるが、口縁部が肥厚しないものは後期まで下る可能性はある。口唇部が面をもつ例では口唇部にも縄文を施しており (20・21・26)、これは後期第Ⅰ類土器A種にもみられる要素である。

無節縄文R $\left\{ \frac{1}{1} \right\}$ を施した土器 (27) は縄文原体の開端部がわかる例である。また、胴部片で同一個体と考えられるもの (29~31) はLRの縄文をころがした例だが、太い縄と細い縄を撻り合わせている。(35) は胴部に4本の縦沈線をいれ、その間に縦位のLRの縄文をころがした例である。

第Ⅶ類の土器は中期の土器の中では数が多く、比較的まとまったものである。縄文原体はLRが圧倒的に多く12点、RLは1点のみ (23) である。(27) の無節縄文はR $\left\{ \frac{1}{1} \right\}$ の撻りだが2段の縄にするとLRとなる。

これらと同様な土器は奈良県天理市布留遺跡^{図6}で多く出土している。中期の末葉に位置づけうるものであろう。

中期第Ⅷ類土器 (10)

沈線で区画した内側に縄文を充填した土器。文様構成からいうと後期の中津式に含めうるが、無文部が原体不明のケズリである点や、胎土に著しく砂粒を含む点で中期末と位置づけたものである。

中期第Ⅸ類土器 (12)

無文粗製の深鉢。器形は砲弾形になるものと推定される。他に数例あるが、いずれも胎土に砂粒を多く含んでいる。

中期第Ⅹ類土器 (13・14)

全面縄文の土器。縄文はLRである。

(2) 後期の土器

後期第Ⅰ類土器 (36~43)

中津式に相当するもの。太い沈線で曲線的な文様を描き、沈線間の区画に縄文をころがしている。A・B 2種にわけることができる。

A種 (36~38) は口唇部がほとんど肥厚せず角張っており、口唇と口唇直下の沈線の間に縄文をころがしている。この種の土器は厳密な意味では中津式に含めることはできない。それは口

唇部にも縄文を施している(36・37)ことや、胎土に砂粒を多く含み中津式の精製土器とは様相を異にすること、口唇部が肥厚しないこと、などの特徴にあらわれており、中津式よりは先行すると考えられるが、文様構成からは中期にまで遡らせるのがむつかしいものである。

B種(39~43)は中津式に属するものである。(39)は波状口縁で沈線が口唇部にまで切り込んでいる。また胴部文様では沈線の一部が途切れて「からみ」に変化している。(42)は太い沈線で横長の柳葉形の区画をつくり、その中に縄文を充填し、さらにその区画をとり囲むように沈線をいれている。似かよった土器は東大阪市馬場川遺跡出土土器註7のなかにある。

後期第Ⅱ類土器(44~47)

2本ないし3本の平行する沈線で文様を描く土器。本遺跡の出土例では縄文はみられない。A・Bの2種にわけることができる。

A種(44・45)は位置づけが困難な土器である。(44)は垂下する2本の沈線の先が彎曲して互いに離反し、その沈線の先端に別の横位の沈線がからんでいる。しかも縄文原体(?)の圧痕らしいものもみられる。文様の展開、形式的な位置づけなどは不明である。(45)は2本の横位の平行沈線の下部にやはり2本の沈線で弧線を描くもの。同様な弧線が上側にもある。

B種(46・47)は2本ないし3本の太い沈線で口頸部から胴部にかけて文様を描き、しかも口唇部にも文様をもつ土器である。(46)では口縁部外面に2条の沈線をめぐらせ、胴部には2~3本の横位の沈線から3本沈線による「J」字文を懸垂させ、さらに「J」字文の横にも3本沈線が展開している。また口縁部文様帯と胴部文様帯の間には無文帯が生じている。(47)は2本の太い沈線で幾何学的な文様を連続して描く土器。口唇部は若干拡張され、2本の沈線と衝突がある。

これらB種の土器は堺市四ツ池遺跡F地点出土の土器註8とまわって似かよっている。また3本沈線で文様を描く点や口唇部にも文様をもつ点は瀬戸内の福田KⅡ式と共通する特徴であり、B種の土器は福田KⅡ式に併行する時期のものと考えられる。A種については位置づけがむつかしいが、おおむね後期初頭~前葉のものであろう。

後期第Ⅲ類土器(48)

口頸部は内面・外面とも無文で、口唇部にのみ縄文をころがし沈線(?)を施す土器。口唇部に文様がある点を重視するならば、やはり後期前葉くらいに位置づけるべきものだろうか。類例は藤井寺市林遺跡住居址出土土器註9、堺市上遺跡出土土器註10中にあり、どちらも後期前葉の緑帯文土器に伴っている。

後期第Ⅳ類土器(49)

沈線と縄文で文様を構成する土器。2本の平行する横位の沈線の下部に、2本ないし3本の平行沈線を「ハ」の字形にいれる。地文はLRの縄文。関東地方の堀之内Ⅰ式に対比しうる土器である。

後期第Ⅴ類土器(50)

口縁部が大きく外に開く浅鉢。内面・外面とも無文だが、調整はかなりていねいである。口唇部から口唇部内面にかけて細い粘土紐による隆帯をたらし、隆帯上には細い棒状工具による刺突を連続して施す。型的な位置づけは困難であるが、後期前葉と考えておく。後期前葉を主体とする海南市溝ノ口遺跡出土土器中に類似品がある。

後期第Ⅱ類土器 (15・51~73・75~82・89・107)

いわゆる緑帯文土器に属するもの。A~Fの6種にわけることができる。

A種 (52・53) は口縁部を帯状に肥厚させ、そこに横位の縄文を施すもの。頸部は無文で、胴部以下には縄文を施すのが一般的である。いわゆる縄文地の土器であり、かつて稻口式と呼ばれたものに相当する。

この種の土器の胴部となる可能性のある土器が (15・55~65) である。縄文だけを施すもの (15・55~61) が通例だが、頸部と胴部の境に沈線と竹筥刺突文をもつもの (62)、頸部に垂下する集合沈線、頸部と胴部の境に沈線をもつもの (63)、頸部と胴部の境に沈線をもつもの (64・65) もみられる。(63) のように頸部に沈線をもつものは口縁部文様帯にも沈線による文様をもつかもれない。

縄文の撚りはLRが多い。図示した14点ではLRが10点、RLが3点、不明1点という内訳になる。

B種 (51・54・73) は口縁部がほとんど肥厚せず、外反気味におわる土器で、口縁部内面に沈線や縄文をもつものである。(73) は位置づけ不明確。

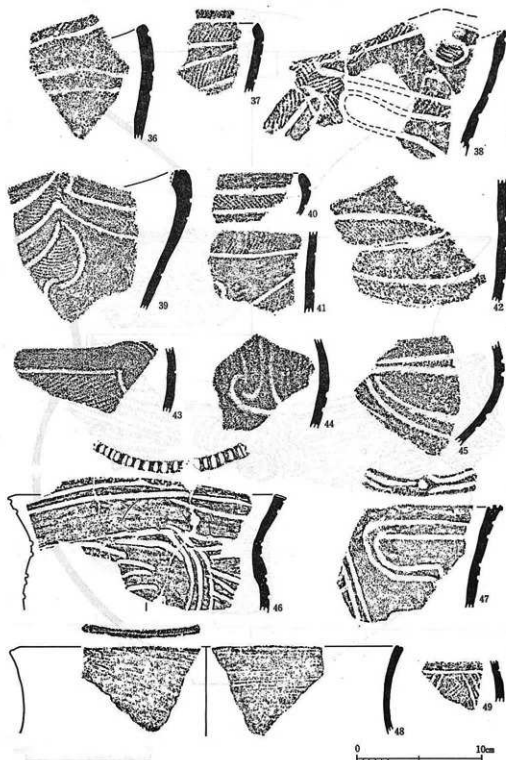
(51) は底部を欠くものの、ほぼ全体をうかがうことのできる土器である。口縁部内面に1条の沈線をめぐらし、口唇と沈線間にLRの縄文を施す。口頸部外面には文様を施さず、ていねいなミガキ調整している。胴部には「S」字文を上下に2~3段にからませ、その外側を渦文風に沈線でとり囲んでいる。この文様を5~6単位胴部に配置し、その間を横位と斜位の平行沈線でむすんでいる。これによって三角形の区画がいくつか生じている。平行沈線間にLRの縄文をころがしている。北白川上層式3期に属するものであろう。

C種 (66~69・72) は胴部に沈線文と縄文をもつ土器であるが、縄文の有無のはっきりしないものもみられる。沈線で渦文を描き縄文をころがした土器は二者あるが、渦文の幅が広く充填縄文を施す土器 (67) はむしろ中津式に含めるべきものかもしれないが、沈線が中津式のものと比較するとずいぶん細くなっている。

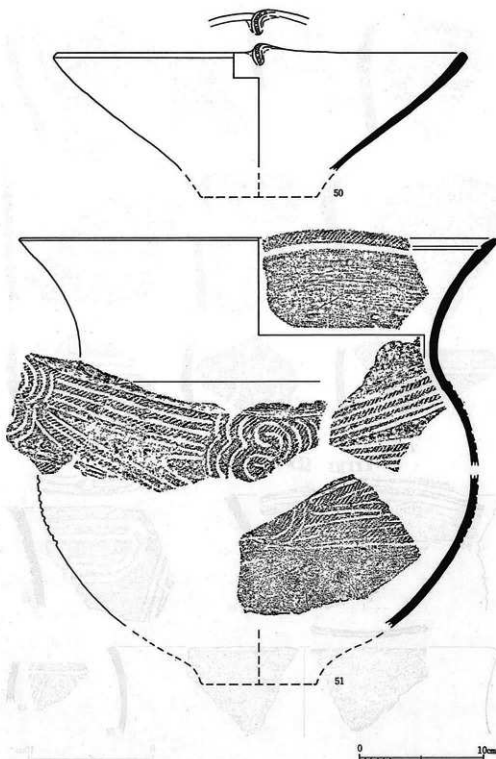
沈線が横帯文化している土器 (68・69・72) は (51) などの胴部と同様なものであろうが、胴部片のみであるのでC種に一括した。

(66) は器形・カーブからみて胴部片と考えるならば、後期の堀之内Ⅰ式のなかに同心円を多く重ねる例がある。ただし、中期末の土器にもこのような土器がみられることがある。

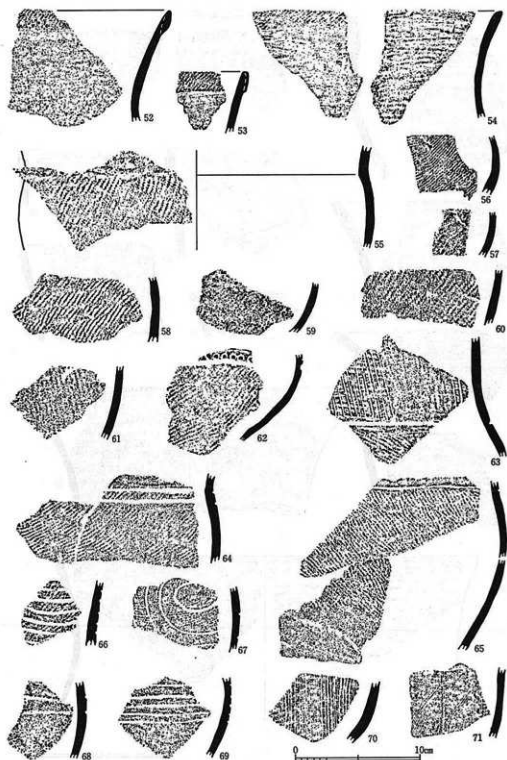
D種 (70・71) は頸部や胴部に垂下条線をもつ土器である。垂下条線は半篋竹管によって描かれている。(63) もよく似た土器だが沈線は一本一本へら状工具で施文されたものである。



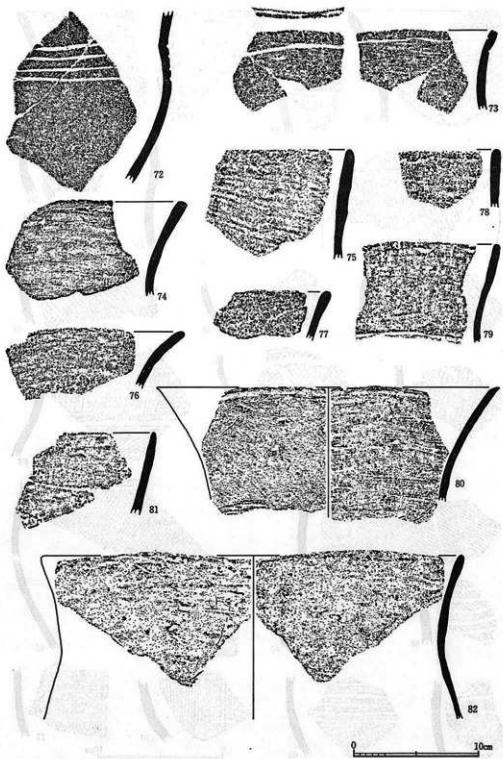
第22図 縄文土器 (3)



第23図 縄文土器(4)



第24図 縄文土器(5)



第25図 縄文土器 (6)

E種は無文土器のうちの精製のもの(76・77)である。内外面ともミガキもしくはナデで調整している。胴部以下には文様をもつ可能性がある。

F種(75・78~82・89・107)は無文粗製の土器。口縁部がわずかにふくらむもの(82)などは緑帯文土器に伴う粗製土器では典型的なものであろう。口唇部が細くどがる土器(80)は後期中葉まで下げるべきかもしれない。

後期第Ⅱ類土器はいわゆる緑帯文土器であり、北白川上層式に相当する。ただし、北白川上層式に典型的な、口縁部を帯状に肥厚させそこに同心円文や渦文を施す波状口縁の土器は出土していない。

後期第Ⅲ類土器(74・83・84)

後期中葉の一乗寺K式から元住吉山Ⅰ式に相当する土器。(83)は精製の浅鉢で、口縁部内面に2条の沈線を横走させ、沈線内に細い棒状工具で連続して刺突をいれている。沈線内の刺突という点から一乗寺K式に属すると考えられる。(74・84)はともに内面・外面をミガキ調整した土器。口唇部を角張らせ、面をなすようにつくっている。

後期第Ⅳ類土器(86)

後期後葉の元住吉山Ⅲ式に属する土器。巻貝尾部による凹線文をもつ典型的な宮滝式は出土していない。

浅い体底部から屈曲して口頸部がたちあがり、強く外反する土器(86)は、元住吉山Ⅲ式の浅鉢であろう。口縁部内面に1条の沈線を横走させ、口唇部内側にヘラ状工具による斜位の刻目を施している。頸部下半の凹線は巻貝の頂部によるものである。

(3) 晩期の土器

晩期の土器は滋賀里Ⅲ式以降、長原式まで、ほぼ全時期の土器があるが、全体としての量は少ない。その中では刻目突帯文土器が比較的目的存在となっている。

晩期第Ⅰ類土器(94)

器面に巻貝条痕を施すもの。巻貝条痕は後期以降、晩期の滋賀里Ⅰ・Ⅱ式まで用いられる。(94)は器壁が厚く、しっかりとしたつくりの土器。下端にみえるのは沈線か砂粒の動いた痕跡か決めがたい。

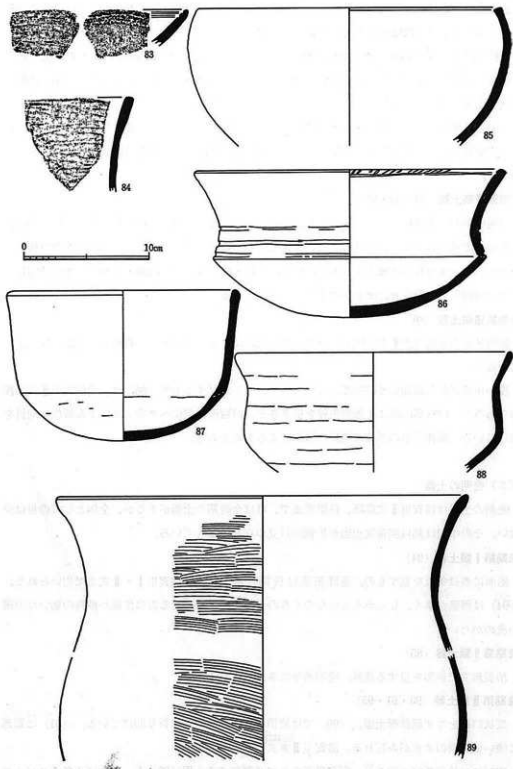
晩期第Ⅱ類土器(85)

精製無文で碗形を呈する浅鉢。晩期前半に多くみられる。^{RE14}

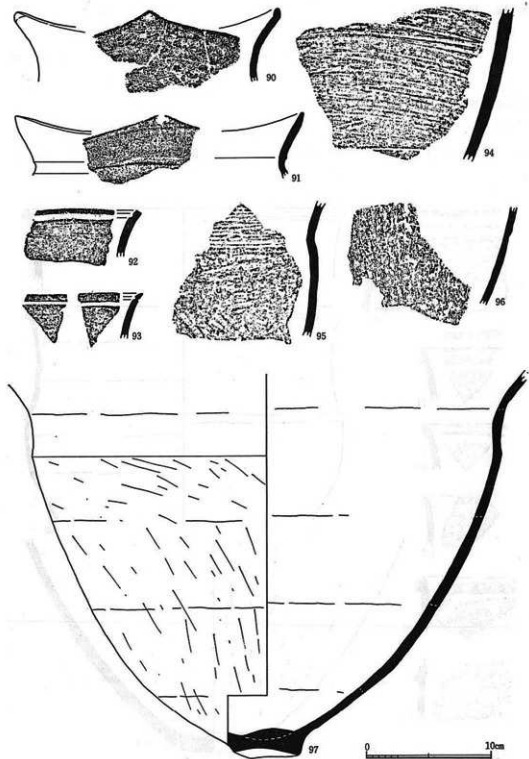
晩期第Ⅲ類土器(90・91・95)

波状口縁をなす深鉢形土器。(90)では波頂部を小さく内側に折り曲げている。(91)は頸部に強い横方向のナデがみられる。滋賀里Ⅲa式のものであろう。^{RE15}

頸部に二枚貝条痕がのこり、胴部以下をケズリ調整する土器(95)も、頸部に1条のユビナデがあり、この時期のものと考えられる。



第26图 縄文土器(7)



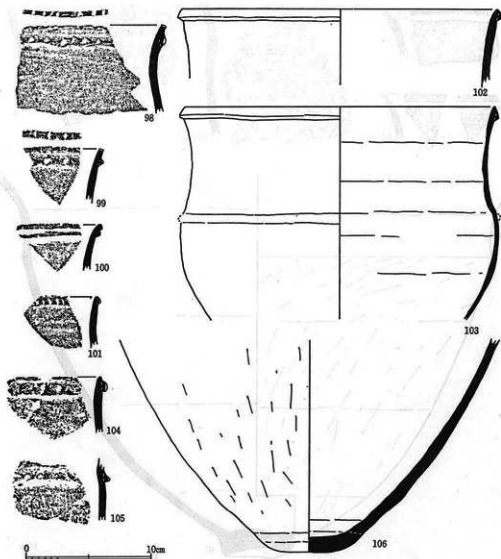
第27図 縄文土器 (8)

晩期第Ⅶ類土器 (92・93)

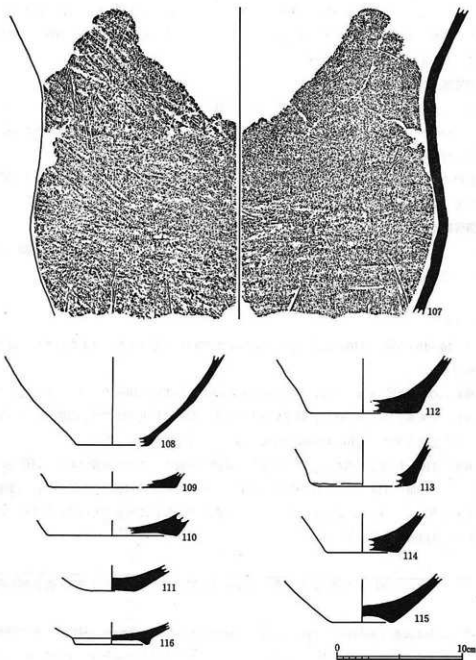
黒色磨研の鉢・浅鉢。(92)は口縁部内面に幅の広い沈線をめぐらせ、口唇部を平坦につくっている。(93)は口縁部内面・外面に各1条の細い沈線を走らせ、口唇部は細くとがるようにおさめる。

晩期第Ⅶ類土器 (96・97)

胴部をケズリ調整する土器。(97)は外反する頸部をナデ調整し、底部は小さくいびつな凹み底となっている。口縁部のひろがりがかかなり大きい。^{RE16} 滋賀里Ⅱ ^{RE17} b式に属するものと考えてよいであろう。



第28図 縄文土器(9)



第29図 縄文土器 00

晩期第Ⅴ類土器 (98~100)

刻目突帯文土器のうち、口頸部が外反する深鉢で、口唇部よりやや下ったところに1条の突帯をめぐらせるもの。胴部突帯の有無が判明する例はない。突帯上だけでなく、口唇部にも刻目を施すもの(98・99)は滋賀里Ⅴ式に属すると考えられる。刻目をたないもの(100)は口唇部のつくりも突帯のつくりもややかわっている。

晩期第Ⅵ類土器 (101~106)

刻目突帯文土器のうち、口頸部がほぼ直立する深鉢で、口唇部外面に突帯をめぐらせるもの。口唇部と突帯が一体となっているのが通例であり、口唇部に刻目を施した土器はみられない。長原式^{RE18}に相当すると考えられる。

土器棺に用いられていた深鉢(103)は胴部突帯のはがれた痕跡がみられる。またこの類の土器の胴部(105)や底部と思われるもの^{RE19}(106)もある。

晩期第Ⅶ類土器 (87・88)

口頸部がほぼ直立する鉢(87)は時期を限定しにくい。後期に遡る可能性もある。(88)は晩期のものであろう。

(4) 底部

底部(16~19・108~116)には中期のものから晩期のものまでであると考えられるが、厳密には区別できない。

中期末葉の堆積層と考えている青灰色砂礫層から出土した底部(16~19)は、中期と考えて矛盾ないものである。大きな平底で、胴部があまりひろがらずに斜上方にのび、内底面がややもりあがるのを特色とする。(16)は胴部の最も下のところまで縄文を施している。

(108~116)は後期・晩期の底部であるが、厳密に区別することは困難である。形態上は、平底のもの(108~114)、凹み底のもの(115)、高台風のもの(116)などがある。(108)は内面・外面ともていねいな調整を施しており、後期中葉くらいに属するものであろうか。凹み底のもの(115)は晩期前半に多い。

以上述べてきたように、西浦橋遺跡の縄文土器には中期末から晩期終末まで広い時間幅が認められる。

中期の土器は大きく中期末と一括した。しかし細分すれば中期末古段階(星田式)と中期末新段階(北白川C式)にわけられよう。またこれらの中期末の土器と後期初頭中津式をつなぐ土器(後期第Ⅰ類A種)もみられ、連続性がうかがわれる。

その連続性は後期前葉にも認められるが、この段階になると土器の胎土に変化がみられる。縁帯文土器には、長石・石英・雲母・角閃石を含み暗褐色を呈する、河内の胎土を有する土器が多くなるのである。数字をあげるならば、中期末の土器34個体のうち河内と非河内の割合は6:28

と圧倒的に非河内が多いが、緑帯文土器では34個体のうち12:19(他に紀伊2・不明1あり)とその差がかなり小さくなっている。後期前葉に河内地方との交流が活発化したためであろうか。

後期中葉以降、土器は少なくなり、宮滝式・滋賀里Ⅰ式の確実なものは認められない。再び土器が多くなるのは晩期末の刻目突帯文土器の時期である。この段階には鉢の宮滝跡も出現し、四ツ池遺跡には弥生文化がみられるようになるなど、あらたな展開が始まるのであろう。

(大野)

註

- 1 縄文土器については、泉 拓良氏(京都大学)、中尾憲市氏(大成高校)、松尾信裕氏(大阪市文化財協会)、家根祥多氏(帝塚山大学)から多くの教示を得ることができた。それを本報告書にいかせたかどうか心もとないが、御厚情に感謝する次第である。
- 2 泉 拓良「西日本縄文土器再考」(『考古学論考 小林行雄博士古稀記念論文集』1982)
- 3 中村徹也ほか「京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要【Ⅰ】」(1974)
中村徹也「京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要【Ⅱ】」(1975)
- 4 下村晴文「馬場川遺跡発掘調査概要」Ⅱ(1976)
- 5 樋口古文「四ツ池遺跡昭和56年度発掘調査概要報告」(1981)
- 6 嶋田 暁・小島俊次「布留遺跡」(『奈良県史蹟名勝天然記念物調査抄報』第10輯 1958)
- 7 下村晴文「馬場川遺跡発掘調査概要」Ⅱ(前掲)
- 8 第2阪和国道内遺跡調査会「池上・四ツ池遺跡」16(1971)、17(1971)
- 9 藤永正明ほか「林遺跡発掘調査概要」Ⅲ(1981)
- 10 大阪府教育委員会調査 森井貞雄氏教示。
- 11 中尾憲市氏教示。溝ノ口遺跡出土土器の場合は隆帯上の刺突がない。
- 12 泉 拓良氏は北白川上層式を3期に細分しているが、新しくなるほどLRがふえる、と述べている。
泉 拓良「北白川上層式土器の細分」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和54年度 1980)
- 13 泉 拓良「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4 1981)
- 14 田辺昭三編「湖西線関係遺跡調査報告書」(1973)の滋賀里Ⅰ式碗A₁類に相当する。
- 15 家根祥多「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4 1981)
- 16 滋賀里遺跡出土土器中にもみられる。田辺昭三編「湖西線関係遺跡調査報告書」(前掲)第24図A 177参照
- 17 家根祥多「近畿地方の土器」(前掲)
- 18 家根祥多「縄文土器」(『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ 1982)
- 19 船橋式・長原式の深鉢底部は平底が一般的であるが、本例のような竜形でやや丸味をおびた尖底のものも若干みられる。家根祥多「縄文土器」(前掲)では底部A類に分類している。
- 20 泉 拓良「西日本縄文土器再考」(前掲)

第2表 縄文土器一覽表

番号 図版番号	器種	出土地点	法量		特 徴		備 考	
			口径	底径	器高	胎 土		焼成 色 調
1 P L .21	深鉢	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	良 淡褐色	スス付着 電動フルイ
2	"	B区 青灰色砂礫上層				長石・石英・角閃石	" 暗褐色	電動フルイ
3	"	(青灰色シルト層)				石英・その他	" 黄灰褐色	外面赤褐色化 電動フルイ 出土層位不明産
4	"	B区 青灰色砂礫上層				長石・石英・チャート	" 暗灰褐色	電動フルイ
5	"	B区 S68-d 灰褐色砂礫下層				長石・石英・チャート	" 淡褐色	上層砂礫
6	深鉢?	青灰色砂礫層・同上層				長石・石英・その他	" 暗灰褐色	電動フルイ
7	深鉢	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 黒褐色	"
8	"	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・角閃石(?) その他	" 灰褐色	切目土器に転用 電動フルイ
9	"	S67-b-3 淡褐色砂礫層				長石・石英・雲母・ 角閃石	" 淡褐色	シュートパーカ ?
10	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート・ その他	" 褐色	電動フルイ
11	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	" 灰褐色	スス付着
12	"	D区 S67-c-1 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	" 淡灰褐色	
13	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 淡灰褐色	スス若干付着 電動フルイ
14	深鉢?	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・角閃石・ 花崗岩	" 暗褐色	スス付着著しい 電動フルイ
15	深鉢?	B区 S68-d 灰褐色砂礫下層				長石・石英・チャート	" 暗褐色	スス付着 シュートパー 又は上層砂礫
16 P L .27	底部	B区 S68・T68南半 青灰色砂礫層			7.4	長石・石英・角閃石	" 暗褐色	
17 P L .20	"	B区 S68・T68南半 青灰色砂礫層			9.8	長石・石英・雲母・ 角閃石	" 暗灰褐色	スス付着 電動フルイ
18	"	B区 S68・T68南半 青灰色砂礫層			10.1	長石・石英・雲母・ 角閃石	" 灰褐色	
19	"	B区 青灰色砂礫層			10.5	長石・石英・その他	" 暗褐色	電動フルイ
20 P L .22	深鉢	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 灰褐色	スス若干付着

番号 図版番号	器種	出土地点	法量		特	微		備考
			口	底径器高		胎	土	
21 P L. 22	深鉢	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・雲母・ その他	良 黒褐色	スス付着 電動フルイ
22 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	" 暗褐色	スス付着 電動フルイ
23 "	"	Sc ラインアゼ東端部興文河川灰 白色砂礫層				長石・石英・チャート・ その他	" 灰褐色	表面磨滅著しい
24 "	"	不明				長石(多)・石英	" 暗灰褐色	表面磨滅著しい 電動フルイ
25 "	"	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 暗灰褐色	電動フルイ
26 "	"	B区 S 68・T 68南半 青灰色砂礫 層				長石・石英・その他	" 暗褐色	
27 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 暗灰褐色	スス付着 電動フルイ
28 "	"	A区 S 68-b-2 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート・ その他	" 淡褐色	表面磨滅著しい
29 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層				石英(多)・長石・雲母・ チャート	" 黒褐色	スス付着 電動フルイ
30 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層				石英(多)・長石・チャ ート	" 黒褐色	スス付着
31 "	"	B区 灰褐色砂礫下層				石英(多)・長石・チャ ート・その他	" 黒褐色	スス付着・電動 フルイ 上層砂礫か?
32 "	"	B区 S 68・T 68南半 青灰色砂礫 層				長石・石英・その他	" 褐色	
33 "	"	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 灰褐色	電動フルイ
34 —	"	B区 青灰色砂礫上層				長石・石英・その他	" 淡灰褐色	電動フルイ
35 P L. 22	"	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・その他	" 淡黄褐色	スス付着 電動フルイ
36 P L. 23	"	B区 S 68・T 68南半 青灰色砂礫 層				長石・石英・雲母・ 角閃石	" 淡灰褐色	
37 "	"	C グリッド 青灰色砂礫層				長石・石英	" 褐色	B区に設けたテ ストビット内出 土
38 "	"	Sc ラインアゼ西端部 青灰色砂 性シルト層				長石・石英・その他	" 黒灰色	間層シルト
39 "	"	A区 S 68-b-2 青灰色砂礫層				長石・石英・雲母・ チャート	" 暗灰褐色	
40 "	深鉢又は 鉢	B区 青灰色砂礫上層				長石・石英・角閃石	" 暗灰褐色	電動フルイ

番号 図版番号	器種	出土地点	法量		特		徴		備考
			□	底	器	胎	土	焼成	
41 P L . 23	深鉢	C グリッド 青灰色砂礫層					長石・石英・角閃石	良 灰褐色	B区に設けたテストヒット内出土
42 #	#	T67-a-2 シュートパー灰茶色砂礫層					長石・石英・その他	# 灰褐色	
43 #	深鉢?	B区アゼ下部 青灰色砂礫層					長石・石英・チャート	# 淡灰褐色	
44 —	深鉢?	C区 縄文河川層部					長石・石英・角閃石	# 暗褐色	電動フルイ 出土層位不明確
45 P L . 23	深鉢又は鉢	青灰色砂礫上層					長石・石英・雲母・角閃石	# 灰褐色	スス付着 電動フルイ
46 #	深鉢	B区 黄灰色シルト層	20.6	*			長石・石英・雲母(多)・角閃石	# 黄橙色	河川のベース
47 #	#	S67-d-3 シュートパー灰茶色砂礫層					長石・石英・角閃石・雲母	# 黒色	
48 #	#	B区中央部 青灰色砂礫層	30.5	*			長石・石英・角閃石	# 暗褐色	スス付着 電動フルイ
49 #	深鉢?	不明					長石・石英・黒色粒	# 褐色	スス付着 電動フルイ
50 P L . 20	浅鉢	A区 S67-d-3 青灰色砂礫層	32.1	*			長石・石英・雲母・角閃石	# 暗褐色	
51 #	深鉢	S67-d-4・T67-b・T68-C-1 シュートパー T68-a-3 青灰色砂礫層	38.0	*			長石・石英・角閃石	# 黒褐色	スス付着著しい
52 P L . 24	#	B区 T67-b-3 青灰色砂礫層					長石・石英・チャート	# 黒褐色	スス付着
53 #	#	B区 黄灰色シルト層					長石・石英・雲母・角閃石	# 黄褐色	第12・13層
54 #	#	T67-b-1 シュートパー灰茶色砂礫層					長石・石英・角閃石	# 暗褐色	スス付着
55 #	#	T67-b-1 シュートパー灰茶色砂礫層					長石・石英・角閃石・その他	# 灰褐色	スス付着
56 #	鉢	B区 シュートパー					長石・石英・角閃石	# 灰黄褐色	
57 #	#	B区 シュートパー					石英・長石・チャート	# 黄橙色	
58 #	深鉢?	S68-c-2 シュートパー灰茶色砂礫層					長石・石英・その他	# 黒褐色	スス付着
59 —	鉢?	B区中央部 青灰色砂礫層					長石・石英・雲母・角閃石	# 暗灰褐色	電動フルイ
60 P L . 24	深鉢?	B区 S68-d 灰褐色砂礫下層					長石・石英・雲母・チャート	# 暗褐色	スス付着・表面磨滅 上層砂礫

番号 図版番号	器種	出土地点	洗量			特	徴	備考
			口	底	器高			
61 P L. 24	深鉢?	B区 S68-d 灰褐色砂礫下層				長石・石英・雲母・ チャート	良 暗褐色	上層砂礫
62 "	鉢	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	// 灰褐色	電動フルイ
63 "	深鉢	A区 S68-b-1・3 青灰色砂礫層				結晶片岩(多)・長石・ 石英・黒色粒	// 暗褐色	
64 "	"	B区 灰褐色砂礫下層				長石・石英・雲母・ 角閃石	// 淡灰褐色	上層砂礫 電動フルイ
65 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	// 暗褐色	スス付着
66 "	深鉢?	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート	// 暗褐色	電動フルイ
67 "	深鉢?	B区 S68-d 灰褐色砂礫下層				長石・石英・チャート	// 暗褐色	スス付着 上層砂礫
68 -	深鉢	S67-b-4 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・角閃石 (少)・その他	// 灰褐色	
69 P L. 24	鉢?	B区 灰褐色砂礫下層				長石・石英・雲母・ 黒色粒	// 黒褐色	スス付着 電動フルイ・上 層砂礫
70 "	深鉢?	B区 S67-d-4 青灰色砂礫層				長石・石英・雲母・ 角閃石	// 灰褐色	
71 "	深鉢?	S67-b-2 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・角閃石	// 黒褐色	スス付着
72 "	深鉢	A区 S67-d-3 青灰色砂礫層				長石・石英・チャート・ クワリ礫	// 暗褐色	スス付着
73 P L. 25	"	B区中央部 青灰色砂礫層				長石・石英・雲母・ 角閃石	// 黒褐色	スス付着・磨滅 著しい
74 "	"	B区 青灰色砂礫層				長石・石英・雲母・ 角閃石	// 暗褐色	スス付着
75 -	"	S67-d-3 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・その他	// 灰褐色	
76 P L. 25	"	T67-b-2 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・チャート	// 黒褐色	スス付着
77 -	深鉢?	T67-a-2 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・チャート	// 暗褐色	スス付着
78 -	深鉢?	S68-c-2 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・その他	// 淡褐色	
79 P L. 25	深鉢	R67-d-3 (暗青灰色シルト 層)				長石・石英・その他	// 黒褐色	スス付着 出土層位不明確
80 "	"	T68-b-1 シュートバー灰茶 色砂礫層	27.1			長石・石英・その他	// 暗褐色	スス付着

番号 図版番号	器種	出土地点	法量		特	徴		備考	
			口	底		胎	土		焼成
81 —	深鉢	T67-a-2 シュートバー灰茶 色砂礫層				石英(多)・長石・雲母・ 角閃石	良	褐色	
82 P L.25	"	S67-b-1 シュートバー灰茶 色砂礫層	33.4	*		長石・石英・その他	"	暗褐色	スス付着
83 "	浅鉢?	S67-d-1 シュートバー灰茶 色砂礫層				長石・石英・角閃石	"	淡赤褐色	
84 "	深鉢	S68-c-2 シュートバー				長石・石英・角閃石	"	暗褐色	スス付着
85 "	鉢	R68-d-1 縄文河川層部 黄 灰色シルト層	24.0	*		長石・石英・雲母・ 黒色粒(少)	"	暗褐色	河川のベース
86 P L.20	浅鉢	D区 黄色粘土下層	24.0	*	11.8	長石・石英・その他	"	暗褐色	河川のベースの 上面
87 "	鉢	S67-a-2 縄文河川層部 黄 灰色シルト層 S66-d-1 黄灰色シルト層	17.7	*	12.0	長石・石英・角閃石	"	暗褐色	河川のベース
88 P L.25	"	D区 灰色シルト層	21.6	*		長石・石英・角閃石	"	褐色	河川のベース又 は黄色粘土の下 部
89 "	深鉢	D区 T67-c-4 黄色粘土下層	32.4	*		長石・石英・雲母・ 角閃石・結晶片岩	"	暗褐色	スス付着 河 川のベース又は 黄色粘土の下 部
90 P L.26	"	A区 表採	20.8	*		石英・長石・雲母	"	灰褐色	
91 "	"	C区 縄文河川ベース 黄灰色シ ルト層	22.4	*		長石・石英・チャート	"	暗褐色	スス付着 河川のベース
92 "	深鉢?	C区 縄文河川内 灰白色砂礫層				長石・石英・角閃石	"	黒褐色	スス付着 電動フルイ
93 "	浅鉢?	C区 S66-b-2 縄文河川内 灰白色砂礫層				長石・石英	"	黒褐色	スス付着
94 "	深鉢	A区 灰色シルト層				長石・石英・チャート	"	灰黄褐色	河川のベース又 は黄色粘土の下 部
95 "	"	C区 (灰褐色砂礫層)				長石・石英・チャート	"	暗褐色	スス付着 電動フルイ・出 土層位不明確
96 "	"	C区 (灰褐色砂礫層)				長石・石英・チャート	"	灰褐色	スス付着 電動フルイ・出 土層位不明確
97 P L.20	"	S67-a-2 } 縄文河川層部 S66-c-2 } 黄灰色シルト層	5.1			長石・石英・チャート	"	淡黄褐色	スス付着 河川のベース
98 P L.26	"	C区 縄文河川内 灰白色砂礫層				長石・石英・角閃石	"	暗褐色	スス付着 電動フルイ
99 "	"	不明				長石・石英・角閃石・ 雲母(少)	"	黄褐色	
100 "	"	C区 (灰褐色砂礫層)				長石・石英・角閃石	"	黒褐色	スス付着 電動フルイ・出 土層位不明確

番号 図版番号	器種	出土地点	法量		特 徴			備 考
			口径	底径	器高	胎 土	焼成 色調	
101 P L .26	深鉢?	C区 弥生河川内 灰色砂礫層				長石・石英・角閃石	良 黒褐色	鉢縁の可能性あり 電動フルイ
102 P L .27	深鉢	D区 SK15	25.0	*		長石・石英・その他	// 淡黄褐色	土器館
103 "	"	D区 SK15	24.6	*		長石(多)・石英・その他	// 黄褐色	土器館
104 P L .26	"	T65-b-2 弥生河川肩部 灰色シルト層				長石・石英・チャート	// 淡灰褐色	黄色粘土の下部
105 "	"	D区 黄色粘土下層				石英(多)・長石・角閃石・雲母(少)	// 黄褐色	黄色粘土の下部
106 P L .20	"	S66-b-2 縄文河川内 黄灰色シルト層				石英(多)・長石・その他	// 暗褐色	スス付着
107 P L .26	"	D区T66-b-1 青灰色砂礫上層				長石・石英・チャート	// 黒褐色	スス付着
108 P L .27	底部	T67-b-1 シュートパー	5.6	*		長石・石英・その他	// 灰褐色	
109 "	"	A区 灰色シルト層			9.6	長石・石英・角閃石(多)	// 黄褐色	河川のベース又は黄色粘土の下部
110 "	"	B区 青灰色砂礫上層	10.2	*		長石・その他	// 淡褐色	
111 "	"	A区 灰色シルト層			3.4	長石・石英・雲母・角閃石	// 灰白色	河川のベース又は黄色粘土の下部
112 "	"	R68-d-3 (青灰色粘質土層)	8.4	*		長石・石英・角閃石	// 暗褐色	スス付着 出土層位不明確
113 "	"	B区 青灰色砂礫層	7.9	*		長石・石英・その他	// 淡灰褐色	電動フルイ
114 "	"	A区 灰色シルト層			5.6	長石・石英・チャート・タナリ礫	// 黄褐色	河川のベース又は黄色粘土の下部
115 "	"	D区T66-d-3 (暗青灰色粘土層)	4.7	*		長石・石英・角閃石・花崗岩	// 褐色	出土層位不明確
116 "	"	C区 縄文河川内 灰白色砂礫層	6.0	*		長石・石英・チャート・その他	// 灰褐色	電動フルイ

*印は推定復元値を示す。

電動フルイは砂礫層を電動フルイにかけて得た土器であることを示す。

(大野)

3 石器〔第30～40図；図版29～40；第3表〕

石器は（その2）の調査では主として中近世水田層から、（その3）の調査では主として縄文時代の自然堆積層から出土している。出土する石器は、中近世水田層からは主としてナスカイト製の打製石器が、縄文時代自然堆積層からは台石や磨石が、というようにわかれている。中近世水田層から出土する石器は、もちろん、プライマリーな状態ではなく二次的に包含されたものである。

なお、ここでは縄文時代の石器だけでなく、弥生時代の石器や歴史時代に属すると考えられる砥石もあわせてとりあげていることをおことわりしておきたい。

石鏃（1～23）

石鏃には凹基無茎式・平基無茎式・円基無茎式・突基無茎式・有茎式の各形式のものがみられるほか、石鏃未製品がある。

凹基無茎式石鏃（1～9）には基部のわたくりの大きいものと小さいものがある。（1～4）のようにわたくりの大きいものは縄文時代の石鏃と考えてよからう。また五角形鏃（5）も縄文時代晩期に多くみられるタイプである。

平基無茎式石鏃（10～12）には基部両端が鋭利で整った二等辺三角形を呈するもの（10）と、基部両端がややまるくなり、縦長になったもの（11・12）がみられる。

円基無茎式石鏃（13）としたものは全体の細部調整が粗雑で、石鏃未製品の可能性がある。

突基無茎式石鏃（14）は薄く細長いタイプ。また（15）は基部を欠失しているが、突基無茎式石鏃の可能性がある。

有茎式石鏃（16・17）はいずれも大型品である。（16）は縦長の身に茎を細長くつくりだしている。（17）は上半部を欠失している。基部のつくりもやや粗雑で、有茎式とすべきか、あるいはまた突基無茎式に分類すべきか、決しがたいところである。

石鏃未製品（18～23）はいずれも小型の凹基無茎式または平基無茎式であろう。

石槍（24～26）

いわゆる“石槍”である。（24・26）は先端部のみの破損品または未製品と考えられる。（25）は全体を残すが、片面には大きく風化面を残し、しかもその左側縁には細部調整がみられないことから、未製品と考えよからう。

尖頭器（27）

大型の石鏃ともできるが、ここでは尖頭器とした。片面の下方に風化面を残す。

石鏃（28～37）

比較的小きな円形もしくは不整形のつまみをもつもの（28～30）は、つまみ部の幅がおおよそ2cm前後と共通した大きさになっている。いずれも先端部を欠失している。

つまみ部が横に長くなったもの（31・32）には小さいもの（31）とやや大きなもの（32）があ

る。(32)は先端部を欠失している。

全体が柳葉形を呈し、つまみ部を明確にはつくりださないもの(33~35)は、幅が1cm前後、長さが3cm~5cmと、似かよった大きさになっている。石錐未製品と考えられるもの(36・37)はいずれもこのつまみ部を明確にはつくりださないタイプに属するであろう。

石匙(38)

楕型の定型化した石匙である。体部はやや扁平な三角形を呈し、刃部はやや凸刃となっている。つまみは体部のほぼ中心に長方形をしたものがつくりだされている。

不定形スクレイパー(39~74)

不定形ではあるが、いくつかのタイプにわけることができる。

両側縁に細部調整のあるもの(39~48)のなかには、尖頭器のような形を呈するもの(39)がみられる。これはそりが強く、両側縁に両面からの連続した細部調整がある。下端には茎のような突起をつくりだしている。(40・41)は両側縁に両面から連続した細部調整を施している。(42・43)は縦に細長い形を呈し、幅に比較して厚さの大きいもので、細部調整はやや粗雑である。(44~48)は両側縁に細部調整がみられるが、片面には細部調整がないもの(46)や、あっても粗雑なものである。

(49~55)は一方の側縁にのみ細部調整を施して刃部をつくりだし、他の側縁には風化面などを残すものである。刃部の長さは6cm~10cmと若干の幅があるが、あまり小さなものはみられない。刃部が直刃のもの(49・50・52)と、凸刃のもの(51・53~55)がある。また両面から連続した細部調整を施すもの(49・52・55)、片面にのみ細部調整を施すもの(50・51・53)、片面の細部調整が粗雑なもの(54)などがみられる。

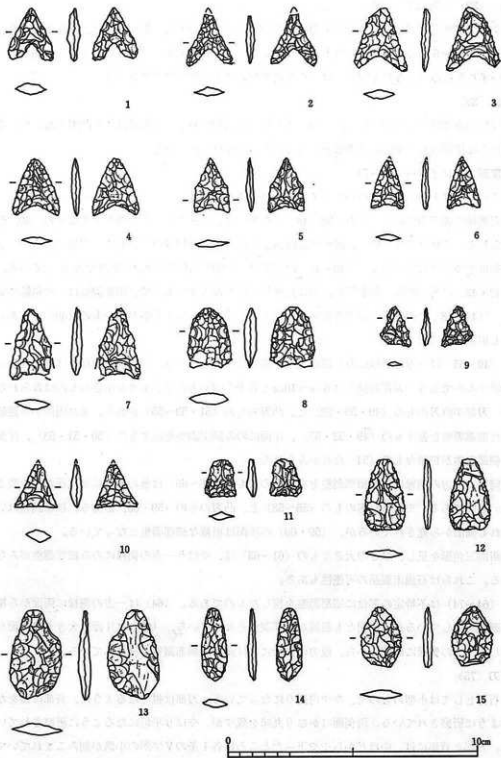
同じく一方の側縁にのみ細部調整を施すものでも、(56~60)は他の側縁に風化面などを残さないものである。やはり直刃のもの(56~58)と、凸刃のもの(59・60)がある。細部調整はいずれも両面から施されているが、(59・60)の片面は粗雑な細部調整となっている。

断面三角形を呈し、厚さの大きなもの(61~63)は、やはり一方の側縁にのみ細部調整がみられる。これらは石錐未製品の可能性もある。

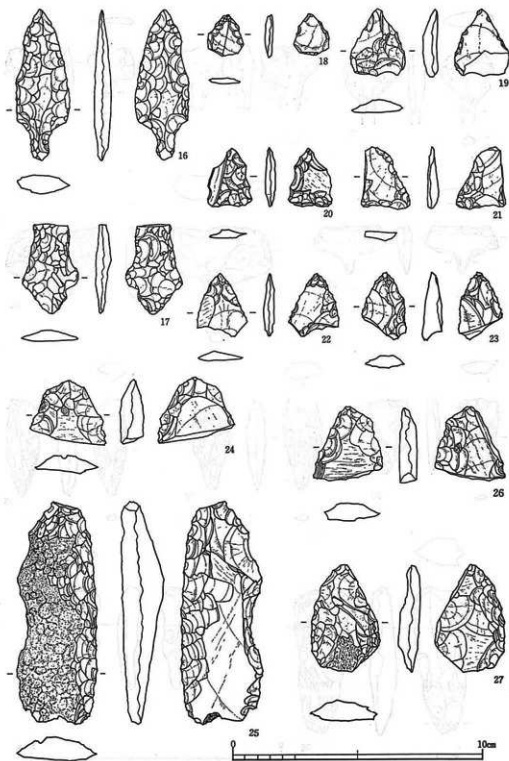
(64~74)は不特定の部位に細部調整を施したものである。(64)は一方の側縁に両面から細部調整を施しているが、両面とも粗雑な細部調整となっている。(68)は片面に大きく風化面を残し、一方の側縁には両面から、他方の側縁には片面から細部調整が施されている。

石刀(75)

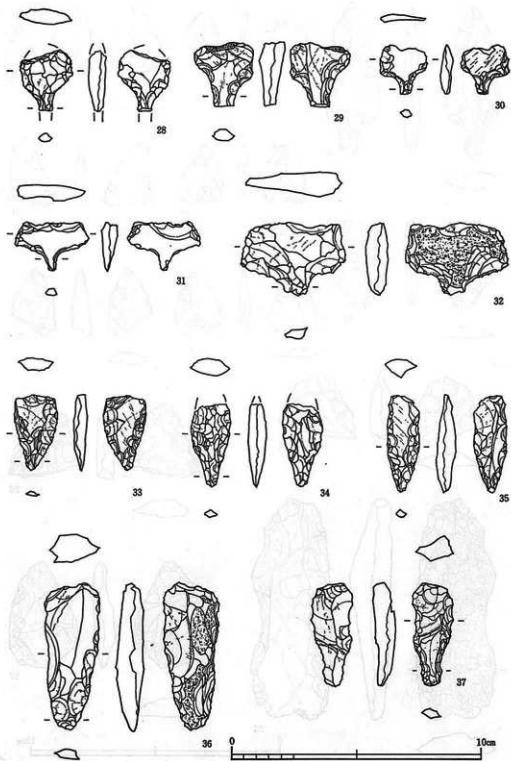
石刀としては小型のもので、やや内反りになっている。刃部は鋭くなるように、背部は面をなすように研磨されている。両側面はかなり丸味を残すが、やはり平坦になるように研磨されている。刃部と背部には、中ほどからやや下ったところに各1条のV字形の小溝が刻みこまれていて、柄部と身部の境界を表現していると考えられる。石材は輝石安山岩。縄文時代中期末葉にあたる、B区東方青灰色砂礫層から出土している。



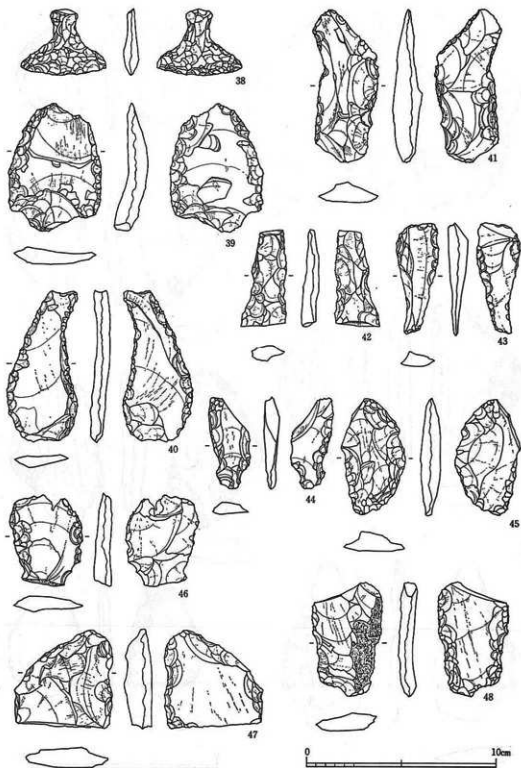
第30图 石 徽



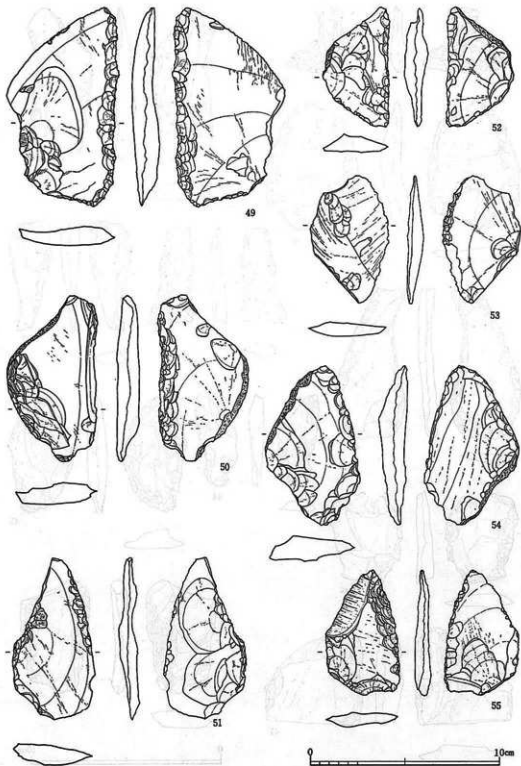
第31図 石鏃・石鏃未製品・石槍・石槍未製品・尖頭器



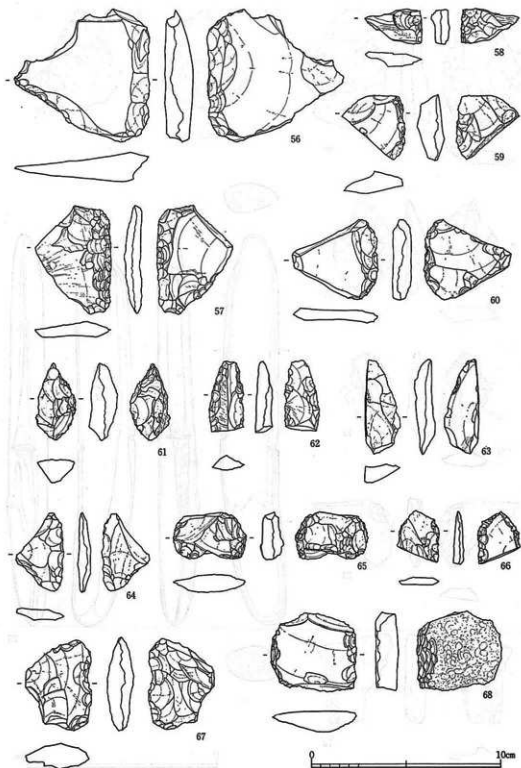
第32图 石錐・石錐未製品



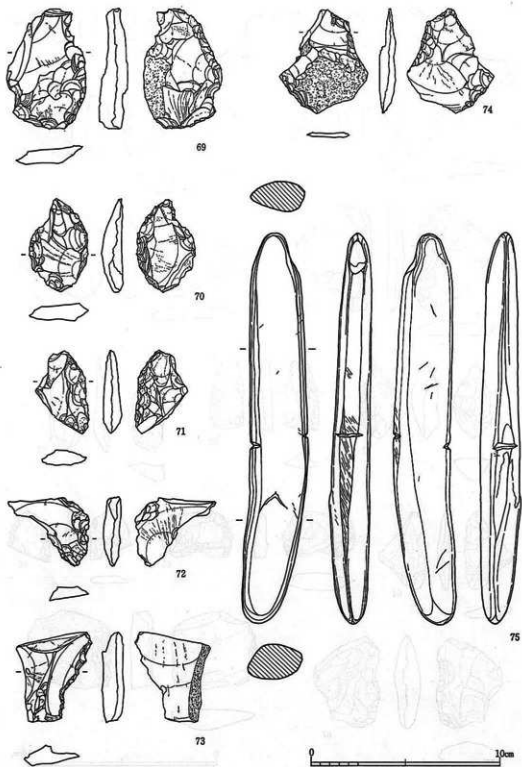
第33図 石匙・不定形スクレイパー(1)



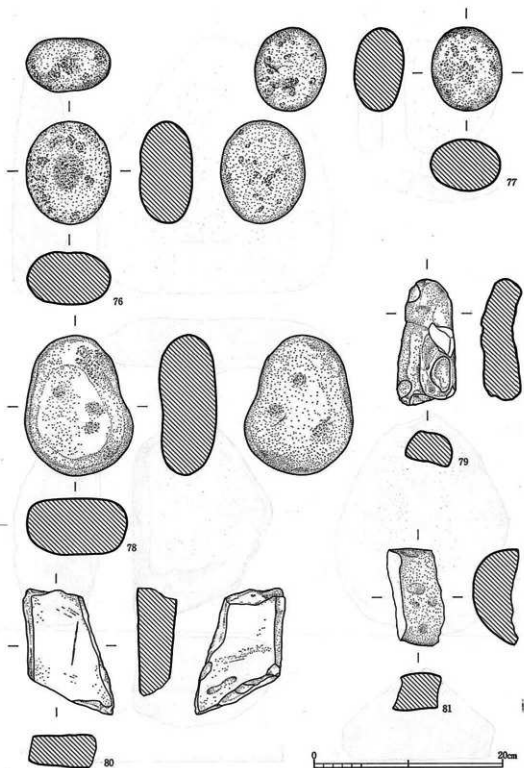
第34図 不定形スクレイパー(2)



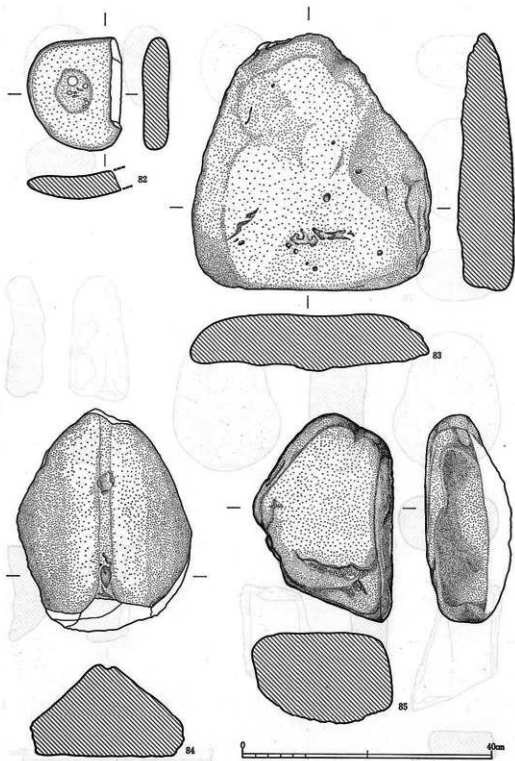
第35図 不定形スクレイパー(3)



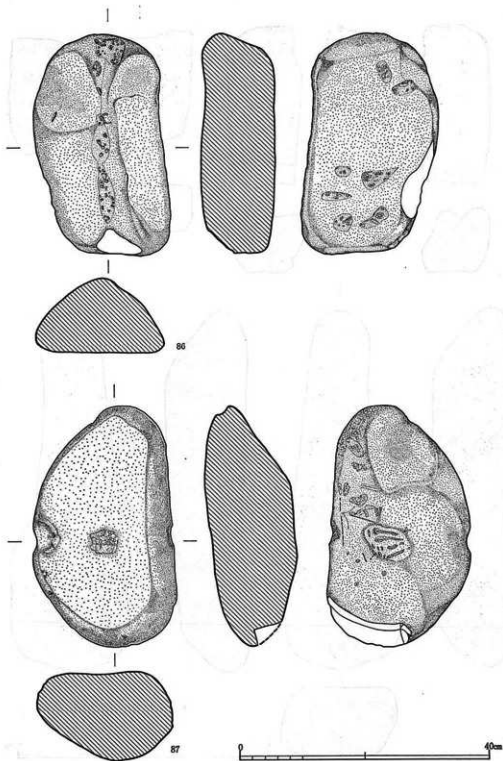
第36図 不定形スクレイパー(4)・石刀



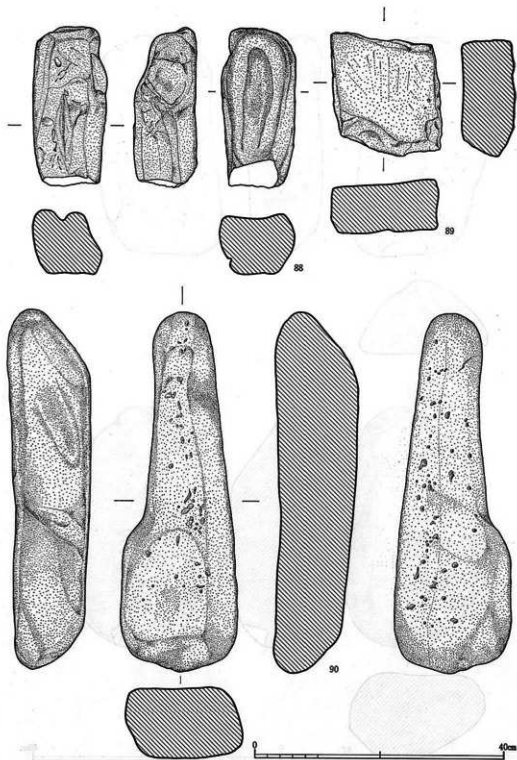
第37図 磨石・砥石・台石(I)



第38图 台石 (2)



第39図 台 石 (3)



第40图 台 石 (4)

磨石 (76~79)

楕円形もしくは卵形を呈するもの (76~78) と、やや縦長のもの (79) がある。(76~78) はいずれも敲打痕・磨研痕の両者が認められる。(76) では敲打と磨研によって中央部がやや凹んでいる。(79) は二次焼成をうけていて表面のいたみがはげしく、先端部に敲打痕がわずかに認められるにすぎない。

台石 (81~90)

小型のものから大型のものまでである。小型のもの (81・82) はいずれも扁平な石材を利用して、大型の台石では扁平な石材を利用したもの (83) は少なく、厚さが10cm以上あるものがほとんどである。(84) は断面が不整三角形を呈し、その頂部が若干凹むまで使用されている。(86・87) も明瞭な敲打痕を残している。(88・89) は断面が方形を呈するが、その各面がかなり使用されている。なお、(83~87・90) は持ち運びに一苦労するほどの重量を有している。(89) は軟質の安山岩製で表面がフラットな「磚」状を呈している。台石とは考えがたいが黄色粘土下層から出土しており、ここに掲げておきたい。

砥石 (80)

縄文時代のものではないがここでとりあげておく。この砥石は安山岩製で、両面とも使用しており、端部はいずれも破損している。

搬入石材 (91~93)

これらは細部調整を施した石器ではないが、他地域から遺跡に運び込まれた石材である。(91) は流紋岩、(92) は蛇紋岩である。(93) は結晶片岩で、かなり大きな母岩から角柱状にうちわられたものであろう。紀の川流域からもたらされたと考えられる。(大野)

第3表 石器一覽表

番号 図版番号	器種	出土地点	法量 (mm, g)				石材	備考
			長	幅	厚	重		
1	P.L.29 石鎌(凹基無茎式)	S68-c-4 黄灰色土	21.3	18.1	4.4	1.0	サヌカイト	わたくり大
2	"	D区 SK15	20.9*	18.3	3.3	0.7*	"	"
3	"	D区 第21層黄灰色粘質土層	25.3*	21.1*	3.8	1.4*	"	"
4	"	B区 第21層黄灰色粘質土層	22.7	18.8	3.6	1.9	"	"
5	"	T68-a-2 茶灰色土	21.5	14.3	3.1	0.7	"	五角形鎌
6	"	T67-d-1 灰色粘土	19.7*	13.0	2.9	0.5*	"	"
7	"	S65-d-4 茶灰色土上面	28.6	16.9*	4.1	1.8*	"	"
8	"	T67-a-1 灰色粘土	24.2*	18.1*	4.4	2.0*	"	"
9	"	T66-a-2 焼土遺構	15.9	12.2*	1.8	0.6*	"	"
10	"	(平基無茎式) S67-a-2 茶灰色土	17.4*	17.1	4.9	1.0*	"	"
11	"	T66-a-2 焼土遺構	15.0*	12.2	2.8	0.5*	"	"
12	"	B区 黄色粘土下層	28.7*	16.1	2.9	1.5*	"	"
13	"	(凹基無茎式) T68-c-2 茶灰色土下層	35.4	20.3	5.4	3.6	"	未製品か

番号 図版番号	器 種	出 土 地 点	法 量 (mm, g)				石 材	備 考
			長	幅	厚	重		
14 P.L.29	石鏃(突基無茎式)	S67-b-4 灰色粘土	29.0	10.1	3.6	1.0	ナスカイト	
15 "	"	S67-b-3 茶灰色土	24.0*	16.1	3.4	1.6*	"	基部欠失
16 P.L.30	"(有茎式)	S67-a-4 茶灰色土	60.0	21.6	6.4	7.0	"	
17 "	" "	T68-c-2 北アゼ	35.8*	23.0	6.2	4.0*	"	上半欠失
18	石鏃未製品	S67-a-2 灰色粘土上面 SD1006	16.6	14.3	2.6	0.6	"	
19 P.L.30	"	S67-c-3 黄灰色土	26.7	21.9	5.4	2.5	"	
20	"	B区 黄色粘土	23.0	12.7	4.0	1.2	"	
21	"	S67-c-1 茶灰色土下層	25.1	19.6	4.2	1.9	"	
22	"	D区 黄灰色粘質土層上面 SD1017	25.0	20.0	4.0	1.6	"	
23	"	S68-b-3 茶灰色土下層	26.5	17.6	7.0	2.8	"	
24 P.L.30	石 槍	T66-a-1 東アゼ	25.7*	30.4*	8.0*	6.8*	"	先端部のみ
25 "	石 槍 未 製 品	不明	89.0	32.3	9.3	45.9	"	
26 "	石 槍	S65-b-4 茶灰色土下層	29.6*	27.9*	7.3*	6.8*	"	先端部のみ
27 "	尖 頭 器	C区 灰色粘土下層	42.3	27.8	8.4	9.7	"	石鏃未製品か
28 P.L.31	石 鏃	S66-a-3 黄灰色土	24.5*	20.7	6.6	2.8*	"	先端部欠失
29 "	"	S67-c-4 茶灰色土	25.9*	23.4	8.8	4.7*	"	"
30 "	"	R68-c-3 茶灰色土	19.8*	19.0	3.8	1.3*	"	"
31 "	"	T67-c-2 茶灰色土下層	19.0	29.2	6.1	2.7	"	
32 "	"	灰色粘土	29.4*	41.2	9.0	10.0*	"	先端部欠失
33 "	"	T66-a-2 焼土遺構	30.0	17.0	4.6	2.7	"	
34 "	"	S68-d-1 茶灰色土	32.8*	15.9	6.3	3.3*	"	
35 "	"	灰色粘土下層	38.8	13.2	7.3	3.5	"	
36 "	石 鏃 未 製 品	S65-d-2 黄灰色土	59.1	22.6	11.5	15.4	"	
37 "	"	T66-a-2 焼土遺構	40.9	15.7	10.0	5.3	"	
38 P.L.32	石 匙(楕型)	R66-d-3 黄灰色土	34.9	44.5	9.1	9.3	"	
39 "	不定形スクレイパー	B区 黄色粘土下層	66.7	48.9	11.8	37.0	"	
40 "	"	T66-a-2 焼土遺構	79.5	37.0	7.8	19.7	"	
41 "	"	S67-d-1 灰色粘土	79.9	34.6	14.3	31.2	"	
42 "	"	C区 灰色粘土下層	50.2*	23.7*	8.3*	8.9*	"	
43 "	"	R68-d-4 トレンチ 黄灰色土	57.9	22.3	9.5	9.9	"	
44	"	T66-a-2 茶灰色土下層	48.2*	22.3*	7.7*	7.5*	"	
45 P.L.32	"	S67-d-4 灰色粘土	59.3	34.5	10.7	21.5	"	
46	"	R67-c-4 トレンチ 黄灰色土	48.2*	38.9	8.6	17.5*	"	
47 P.L.32	"	T68-d-3 茶灰色土	52.9*	51.6*	12.8*	37.5*	"	
48 "	"	S66-b-1 茶灰色土下層	60.5*	37.2*	9.4*	26.3*	"	
49 P.L.33	"	B区中央部 青灰色砂礫層	104.5	58.3	13.0	75.5	"	電動フルイ
50 "	"	B区中央部 青灰色砂礫層	87.5	48.0	11.3	53.6	"	"
51 "	"	D区 黄色粘土下層 西方	85.1	43.4	10.2	31.0	"	
52 "	"	D区 黄色粘土	62.6	35.2	10.8	19.5	"	
53 "	"	T66-a-2 焼土遺構周辺	67.5	41.2	7.9	18.9	"	

番号 図版番号	器種	出土地点	法量 (mm, g)			石材	備考
			長	幅	厚 重		
54 P L. 33	不定形スクレイパー	R68-d-3 黄灰色土	84.1	50.0	13.1	49.4	ナスカイト
55 "	"	S67-c-1 第18層灰色シルト層	65.8	39.0	7.2	17.9	"
56 P L. 34	"	S66-c-3 茶灰色土	68.8	71.9	15.3	68.3	"
57 "	"	S67-b-1	57.4	40.6	8.0	18.9	"
58 "	"	D区 灰色粘土下層	18.3*	29.9*	8.2*	5.0*	"
59 "	"	S66-d-4 西アゼ	33.3	33.2	11.0	7.2	"
60 "	"	S68-b-3 黄灰色土	42.0	45.6	9.1	19.1	"
61 "	"	T67-b-2 茶灰色土下層	40.8	21.1	13.7	9.2	"
62 "	"	R67-d-3 茶灰色土下層	37.4*	18.5	8.7	6.3*	"
63 P L. 34	"	S67-a-1 茶灰色土下層	50.2*	19.8	10.0	9.2*	"
64 "	"	T68-d-1 黄灰色土	41.4	25.7	6.3	5.9	"
65 "	"	T68-c-1 茶灰色土下層	24.5	38.1	10.0	11.7	"
66 "	"	T68-b-2 茶灰色土下層	27.0*	22.3*	4.2*	2.8*	"
67 "	"	S68-d-4 茶灰色土	48.0	35.1	14.0	22.7	"
68 "	"	S67-a-4 黄灰色土	41.0	45.5	12.0	26.4	"
69 P L. 34	"	T68-b-1 トレンチ黄灰色土	62.8	41.8	10.0	30.6	"
70 "	"	T67-c-1 灰色粘土	49.6	30.5	10.0	19.4	"
71 "	"	R68-b-4 茶灰色土	43.7*	28.0*	9.8*	9.4*	"
72 "	"	R66-d-2 茶灰色土下層	36.2*	42.5*	7.9*	8.9*	"
73 "	"	T68-a-1 茶灰色土下層	47.1	39.9	10.9	19.0	"
74 "	"	T66-a-2 焼土遺構	54.4	46.0	4.3	14.0	"
75 P L. 35	石 刀	B区東方 青灰色砂礫層	205.8	29.2	19.9	193.3	輝石安山岩
76 P L. 36	磨 石	T66-b-3 青灰色シルト	108.0	88.5	56.0	830	斑礫岩
77 "	"	表採	88.0	74.5	54.0	48.5	砂 岩
78 "	"	S65-d-4 弥生河川副部	148.0	114.0	59.0	1510	"
79 "	"	R68-c-4 灰色粘土	132.5	62.0	42.5	445	礫質砂岩
80 P L. 40	砥 石	D区 灰色シルト層	132.0*	94.5*	41.0*	605*	角閃石安山岩
81 P L. 37	台 石	T67-b-1 灰色粘土	101.5*	60.5*	38.5*	335*	砂 岩
82 "	"	B区 黄色粘土下層	180.5	151.0	43.5	1.6kg	"
83 "	"	D区 青灰色砂礫層	410.5*	380.0	90.5*	18.2kg	"
84 "	"	S65-d-4 弥生河川副部	356.0*	287.0*	145.0*	15.5kg	黒雲母花崗岩
85 P L. 38	"	D区 黄灰色土下層	332.5	222.5	144.5	13.6kg	礫質砂岩
86 "	"	C区 黄色粘土下層	354.0	219.0	118.5	12.0kg	"
87 "	"	C区 観文河川内 灰白色砂礫層	335.5	229.5	142.5	15.4kg	砂 岩
88 P L. 39	"	I工区 杭列群内	254.0*	117.5	100.0	4.5kg	礫質砂岩
89 P L. 40	"	D区 黄色粘土下層	196.0*	177.5*	85.5	5.4kg	安山岩
90 P L. 39	"	T66-b-3 青灰色シルト	576.0	187.0	114.0	18.1kg	砂 岩
91 P L. 40	搬入石材	D区 黄色粘土下層	79.6	69.1	23.8	155	流紋岩
92 "	"	Scラインアゼ内 暗灰色粘質土層	97.8	71.8	69.1	715	蛇紋岩
93 "	"	A区 青灰色砂礫上層	249.0	74.1	55.0	1575	結晶片岩

*印は現状計測値

4 小結

縄文時代に属する遺構としては、第20層黄色粘土層上面で検出した土墳墓群があるのみで、あとは自然河川やそれにかかわる堆積層ばかりであった。ここでは以上に述べてきた調査結果をごく簡単にまとめておく。

縄文土器は中期末から晩期末に至るほぼ全時期のものを少量づつながらも出土した。大部分が自然堆積層からの出土であり、人為的な遺構と直接結びついて出土したのは長原式土器だけであるが、ごく付近に縄文時代中期以降継続する集落があるとみてよからう。これは縄文土器が河川堆積層からの出土であるにもかかわらず、ほとんどローリングをうけていない点によっても補強される。

また、西浦橋遺跡の調査や、太平寺遺跡・平井遺跡・上遺跡・鈴の宮遺跡の調査によって、樺丘段先端部の石津川・和田川合流点付近に縄文時代早期末以降一つの集団が居住したことを推定することも可能になってきたのである。

出土遺物から西浦橋遺跡の集団の姿を推測するのは、現状では困難である。しかし、石器をとりあげても石錘がまったくなく、また骨角器の刺突具もまったくみられないことから、すくなくとも漁撈を生業とした集団でないことは言えよう。これは西浦橋遺跡が海岸から直線でも3km以上離れたところに位置していることから背首できる点である。

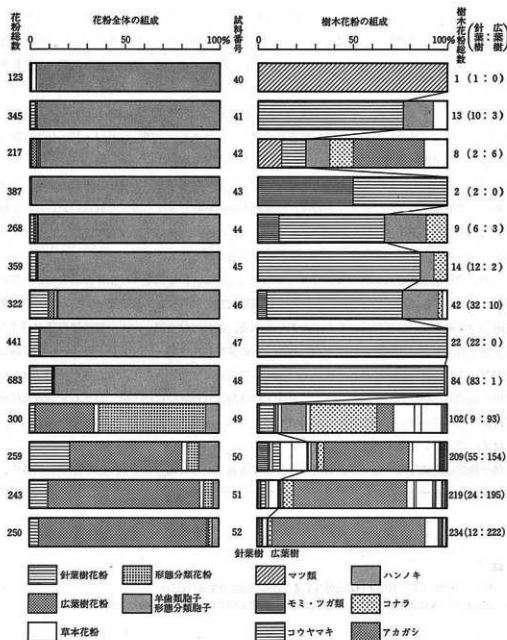
次に、土墳墓群は第20層黄色粘土層上面において計15基を検出した。このうちSK15からは長原式土器の深鉢が出土しており、土器棺であったことが知られる。他の土墳墓からも土器片は出土しているが、小片であるため土器棺であったかどうか断断はできない。

縄文時代晩期終末長原式の時期の土器棺墓や土墳墓は大阪市平野区長原遺跡^{註1}や柏原市本郷遺跡^{註2}に類例がある。長原遺跡の場合、土墳墓群は東群と西群の2群にわかれ、ともに円形に近い求心の平面配置をとっており、縄文時代晩期終末の基地として興味ある形態を示している。西浦橋遺跡の場合はそのようなまとまった配置をとっておらず、その特質をとらえるのは容易ではない。しかしながら、東州地域における縄文時代晩期終末の基地としての重要性は特筆されねばならないだろう。今後、周辺地域の縄文時代晩期終末の諸遺跡の資料を蓄積してゆくなかで検討してゆく必要があろう。

次に、花粉分析・珪藻分析・樹種鑑定などの結果に触れておきたい。これらの分析・鑑定結果の一部は第5節に掲載するとおりである。

花粉分析報告では「当地域は、河川の影響を強く受ける比較的河道に近い氾濫原に位置しているものと考えられる。今回得られた花粉組成は、周囲の植生を反映しているとはいいがたく、河川の影響を強く受け選択的堆積した可能性が考えられる。」としているし、珪藻分析報告でも、「珪藻群集が比較的単調であること、珪藻も破損を受けたものが多かった（とくに海水～汽水種）こと、東京湾標準海面レベルも17.0m以上に相当し、当時の海進レベルとは合わないこと等から

海生種、海水〜汽水生種及び汽水生種は近くの海成層から二次的に混入した二次化石」としており、「堆積環境は下から上まで不安定であり、しかも堆積速度もかなり急激であったと考えられる。」と述べている。さらに現地調査における分層が不十分であった点も考慮しなければならない。このような諸条件をふまえたうえで、Sc ライン西半の試料40〜52の分析結果を検討してみたい。これらの試料を層序から時期的に位置づけると、試料40は黄色粘土（縄文時代晩期終末）、試



第41図 花 粉 組 成

料41～44は河川のベース（縄文時代後期後半～晩期中葉）、試料45～48は間層シルト（縄文時代後期初頭）、試料49～52は下層砂礫（縄文時代中期末）ということになる。

花粉組成が大きく変化するのは試料48と49の間である。試料48より上層では孢子類の花粉が圧倒的（ほぼ90%）で、樹木花粉はごく少数である。これが試料49より下層では逆転して孢子類は10%前後になり、かわって樹木花粉が増えることになる。試料49では草本花粉が優占だが、試料50～52では樹木花粉が80～90%を占めている。

樹木花粉の中での組成も変化している。試料40～48では針葉樹花粉が圧倒的に多いのに対し、試料49～52では広葉樹花粉が圧倒的である。ただし、試料40～48では樹木花粉数がもともと少なく、その数字をそのまま用いることはできないが、試料41・45～48のように比較的樹木花粉数の多い試料では針葉樹花粉が卓越することがはっきりしており、この傾向は認めてよいであろう。

広葉樹花粉の中ではアカガシが優占種であり、最下層の試料52では80.8%と最も多く、上層にゆくにしたがって減少している。針葉樹花粉の優占種はコウヤマキで、試料41・45～48では70～100%の高率で出現している。

このように試料49と48の間に、花粉全体では樹木花粉から孢子類へ、樹木花粉の中ではアカガシ優占の広葉樹花粉からコウヤマキ優占の針葉樹花粉へという変化がみてとれるのである。これらが気候や植生の変化に伴うものであるかどうかは、今回の分析結果が最初に述べたような限界のあるデータであるので、結論を出すのはさしひかえたいと思う。

一方、樹種鑑定の結果は若干ちがったものになっている。樹種鑑定では全体を通じてカシ類が卓越しており、広葉樹が優占である。ただし、樹種鑑定の試料は、下層砂礫・シュートパー・縄文河川など砂礫層から採取したものが大部分である。これは粘土層・シルト層には自然木がほとんど含まれていないためである。一方、花粉分析の試料は粘土層・シルト層から主として採取しており、これは砂礫層では花粉が流失してしまって分析できないためである。さらに花粉はかなり広い範囲から運ばれてくるのに対し、自然木は花粉よりは狭い範囲、いいかえると調査地に近い上流域と関係が深いと想像することができる。このような条件のちがいがあるので、いちがいに比較できないであろう。

種子鑑定は実施していないが、各層から出土する種子としては「ドングリ」が圧倒的に多く、樹種鑑定と一致する結果となっている。（大野）

註

- 1 松尾信裕ほか「長原遺跡発掘調査報告」Ⅲ（1983 大阪市文化財協会）
- 2 田中和弘「本郷遺跡」（『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報』1981年度 1982 柏原市教育委員会）

第 3 節 弥生時代の遺構と遺物

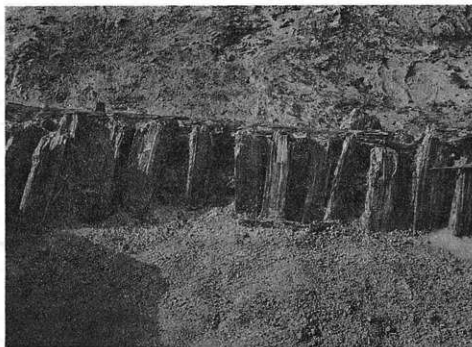
1 遺構〔第42図・付図；図版8・13〕

今回の調査で検出した遺構は、自然河川とそれに付随する杭列群である。これらの遺構は、前年度の当センターによる調査で確認されたものの継続部分にあたる。

自然河川 今回の調査区の東部に検出されたもので、前回の調査区にまたがって見られる。今回の調査では、自然河川の西岸を確認した。河川は、調査区中央付近で大きく「く」の字状に蛇行しているが、基本的には南から北に向かって流れている。川幅は、屈曲している地点（杭列群の打設されている所）で最も広く約25m、その他部分では10～15mである。河川内の堆積は、大きく4層に分けることができる。下層から、灰色砂礫層・灰褐色砂層・灰色シルト層（微砂・細砂・有機質を含む）・黄褐色粘土層である。遺物は、灰色砂礫層・灰褐色砂層から少量ではあるが出土している。上層の灰色シルト層・黄褐色粘土層からは遺物は確認されていない。

杭列群 先にも述べたように、自然河川が屈曲する地点に、河川に直交して川幅いっぱい杭を密に並べている。杭列群は、自然河川の堆積層の最下層にあたる灰色砂礫層の上面から打ち込まれている。今回の調査の検出部分は、河川の西岸の肩部に打設されており、約3mである。

なお、この杭列群は、取り上げ等の調査を残しており、詳しい報告は、その際に行いたい。



第42図 杭 列 群（部分）

2 遺物〔第43～45図；図版41～43；第4表〕

この時期の遺物としては、土器・石器がある。なお石器については、第Ⅲ章第2節縄文時代で縄文時代の石器と一括して報告しており、土器に限って述べることにする。

今回の調査で出土した弥生土器の総量は、約200個体を数える。このうち大半は、河川内の堆積層である灰色砂礫層・灰褐色砂層・茶褐色砂層から出土したもので、約150個体を数える。その他の土器は、上層の中・近世の水田耕作土層から混入品として検出されたものである。すべての出土土器のうち図化可能なものは57個体である。

器形別に見ると、壺形土器・甕形土器・甔形土器に限られるようである。ただ、底部片の中に鉢形土器が含まれる可能性はある。数量的には、壺形土器が圧倒的に多く、図化した57個体のうち底部片を別として30個体と過半数を占める。次いで甕形土器が8個体、甔形土器が1個体である。蓋形土器・高杯形土器・器台形土器等は見られない。

以下、個々の土器について器形別に述べる。なお、出土地点・法量・胎土等は第4表に記したとおりである。

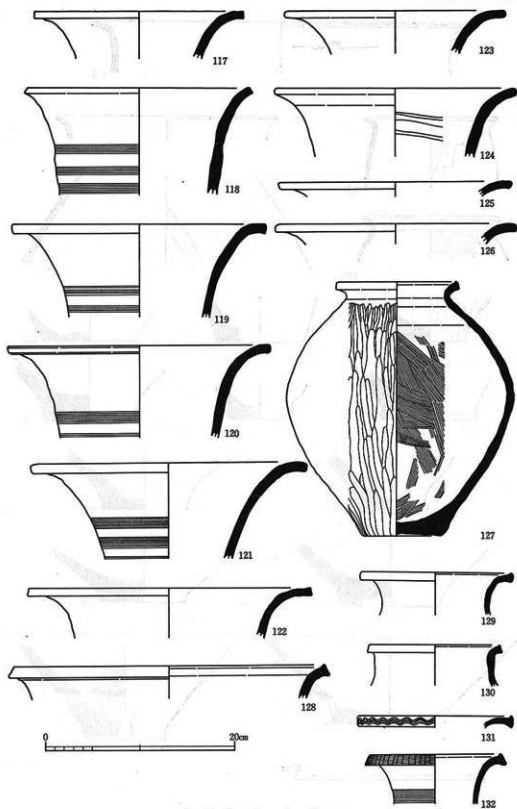
壺形土器 広口壺と無頸壺がある。広口壺の数量が圧倒的に多く、壺形土器30個体中27個体90%を占める。時期的には、137が前期に属すると思われるが他は中期のものである。137は、広口壺の頸部片であるが、外面に斜行する3条のヘラ描沈線が見られ、器壁にススが付着している。自然河川の灰色砂礫層から出土したものである。中期に属する広口壺は、口縁部の形態によって7類(A～G)に分類することができる。

A類(123～126) ラッパ状に大きく開く口縁部を持ち、口縁端部を丸くおさめている。123・124・126は口縁部片であるが、調整は内外面共にヨコナデ、125は風化がはげしくよくわからない。ただ頸部内面にヘラケズリのような痕跡が見られる。

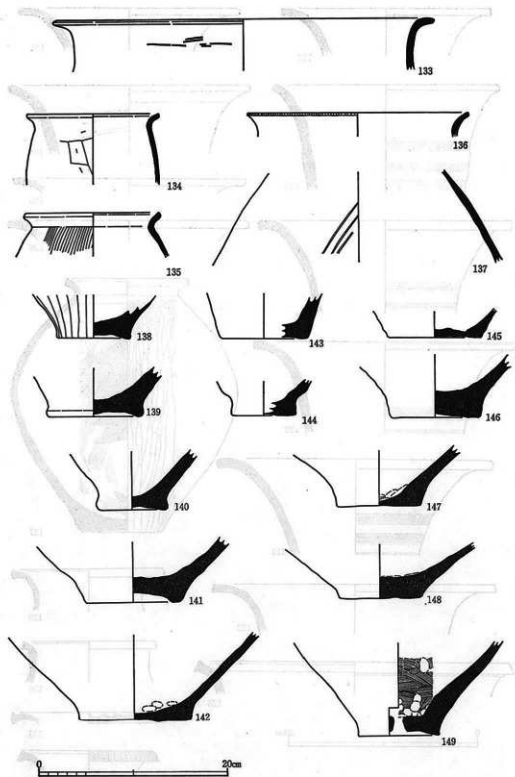
B類(117～122) 口縁部の形態は、A類と同様外方にラッパ状に開く。しかし、A類では口縁端部を丸くおさめていたのに対し、ヨコナデによって面を作っている。117は口縁部片である。調整は外面はヨコナデ、内面はハケ調整の後ナデを施している。122は内外面共にヨコナデ調整である。118～121は調整は内外面共にヨコナデであるが、頸部外面に梯描直線文が見られる。

C類(128、130、152～154) 外方に開く口縁部を持ち、口縁端部を上下に若干拡張させている。頸部の特徴がA・B類のように外反気味に立ち上がらず、垂直もしくはやや内彎気味に立ち上がる。口縁部は、頸部から屈曲して短く外へ開く。128、130、153共に内外面の調整は、ヨコナデである。152、154の調整は風化がはげしく不明である。

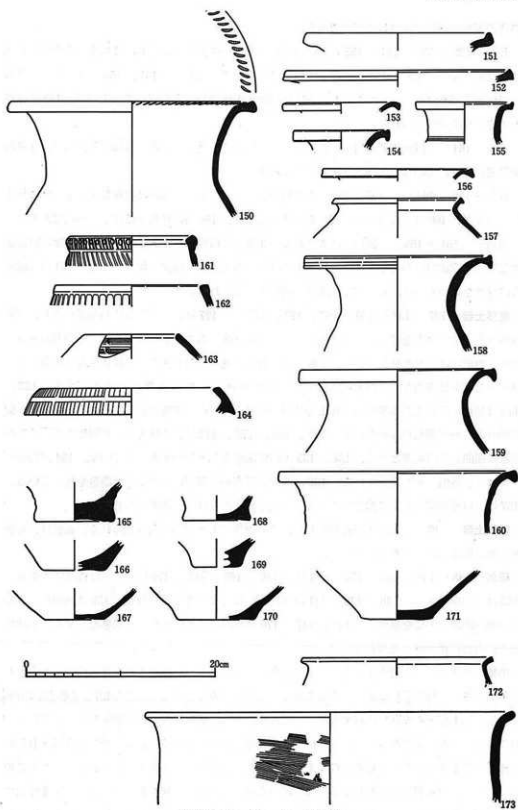
D類(131、132、158) C類で若干拡張していた口縁端部を更に大きく拡張し面を作っている。131は面上に波状文を施している。132は、面上に簾状文を施し、頸部外面には梯描直線文が見られる。内面の調整は板状工具によるナデである。158は、面上に凹線文が見られる。そ



第43図 弥生土器(1)



第44图 弥生土器(2)



第45図 弥生土器(3)

の他の調整は風化がはげしく不明である。

E類(129、150、151、155) 口縁端部を上方へ拡張しているものである。若干つまみ上げた程度のもの(129、150)と上方に引っぱり出しているもの(151、155)とがある。すべて内外面の調整はヨコナデであるが、150は口縁部内面に列点文を施している。又、155には頸部下方に梯描文が見られる。

F類(164) 口縁端部を内上方に拡張し、擬口縁状を呈している。口縁部外面には、2段の縞状文が施されている。生駒西麓産の土器である。

G類(159、160) 口縁端部を下方に拡張するものである。159は口縁部をシャープに仕上げているが、160は玉縁状を呈している。調整は159、160共に風化がはげしく不明である。

無頸壺(161～163) 無頸壺は3点ある。3点とも口縁部片であるが、161、162は口縁部を肥厚させ段状口縁部を作っている。161は口縁部外面に円形浮文を付している。163は直線的な口縁部を持つものである。口縁部外面に扇形文が見られる。

壺形土器(127、133～136、157、172、173) 127は、「く」の状の頸部を持ち、口縁端部は上方につまみ上げている。底部はやや上げ底気味である。調整は、外面を縦方向のヘラミガキ、内面にはハケを施している。136は口縁端部に刻み目を有する。口縁部片のため全体のプロポジションは不明であるが前期に属するものと思われる。生駒西麓産の土器である。133、173は垂直に立ち上がる頸部から外上方に開口縁部を持つ。133は紀州産である。173は外面に部分的にハケ調整が認められる。134、135、157、172は、丸味をもった胴部から「く」の字状に屈曲して口縁部となる。134、135は口縁端部を上方につまみ上げている。134は内面ヘラミガキ、外面ナデを施している。135は外面の頸部から胴部にかけてハケ調整を行っている。157は、口縁端部を上下に拡張している。調整は風化がはげしく不明である。

甔形土器(149) 上げ底の底部をもち、底部中央に1ヶ所の穿孔が見られる。調整は、外面をナデ、内面にはハケを施している。

底部(138～148、165～171) 140、146、165、167、170はやや上げ底気味である。165は紀州産である。138、139、141は高台を付したような形態を持つ。139は紀州産である。その他の底部は平底を呈する。142、147、170は底部の中心に向かって器壁をうすく仕上げられており、内面に指圧痕が見られる。

小結 遺物について若干まとめてみると、先にも述べたように弥生土器全体の中で壺形土器が圧倒的に多い。特に広口壺がほとんどである。時期別にみると、壺形土器の137と甔形土器の136は前期(第Ⅰ様式新段階)に属すると考えられる。共に自然河川内の灰色砂礫層から出土したものである。中期の土器をみると、第Ⅱ様式と第Ⅲ様式のものがある。広口壺では、A類・B類の土器群を第Ⅱ様式、その他C類～G類までを第Ⅲ様式としてとらえることができよう。ただC類についても、口縁端部が拡張し面を作っているが、その面に文様を施しておらず、第Ⅱ様式に属する可能性はある。しかし、A・B類よりは後出的なものと考えられる。又、広口壺の出土地

点別にみると、A・B・C類では130、152、154以外は自然河川内の灰色砂礫層から出土している。C類130、152、154、D～F類の土器群は自然河川内の杭列群廃絶時の堆積層である灰褐色砂層・茶褐色砂層もしくは、中・近世の水田層から出土している。(橋本)

第4表 弥生土器観察表

番号 図版番号	器形	出土地点	法量		特 徴			備考	
			口径	底径	高さ	胎土	焼成		色調
117	壺	D区 灰色砂礫層	21.8	—	4.9	石英・長石	良好	にぶい黄橙、 黄褐色	
118 P L .41	"	Ⅱ工区 弥生河川 灰色砂礫層	23.3	—	11.2	石英・長石	"	浅黄橙、にぶい 黄橙黄褐色	
119 P L .43	"	弥生河川 灰色砂礫層	26.6	—	9.8	石英・長石	普通	灰白	一部炭をか ぶって黒
120 P L .41	"	D区 T66 a - 3 灰色砂礫層	27.4	—	9.7	石英・長石	良好	黒褐色	
121 "	"	D区 T66 a - 3 灰色砂礫層	29.0	—	10.0	石英・長石	"	にぶい橙 黒褐色	
122 "	"	D区 灰色砂礫層	29.5	—	5.3	石英・長石	"	にぶい黄褐 黒褐、黒色	
123	"	D区 弥生河川 灰色砂礫層	23.2	—	4.5	石英・長石・くさり礫	"	淡黄色	
124 P L .41	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	24.8	—	7.2	石英・長石・くさり礫	"	浅黄色と 灰褐色	
125	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	24.2	—	1.5	石英・長石	"	黒褐色	
126	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	24.8	—	2.1	石英・長石	"	明褐色と にぶい黄褐色	
127 P L .41	甕	弥生河川 灰色砂礫層	12.3	8.7	26.9	石英・長石・くさり礫	"	黒色及び 淡黄色	体部外面に スス付着
128	壺	D区 弥生河川 灰色砂礫層	32.4	—	3.5	長石・石英・くさり礫・ チャート	"	灰黄色	
129	"	D区 弥生河川 灰褐色砂層	15.6	—	4.5	長石・石英・くさり礫	"	明褐色	
130	"	C区 弥生河川 灰褐色砂層	13.4	—	4.3	石英・長石	"	明褐灰色	
131	"	C区 弥生河川 灰褐色砂層	15.8	—	1.3	石英・長石・くさり礫	"	明黄褐色	
132 P L .41	"	C区 弥生河川 灰褐色砂層	13.6	—	5.2	石英・長石	"	赤黒色	
133 P L .43	甕	D区 T66 a - 3 弥生河川 灰色 砂礫層	39.4	—	5.5	石英・長石・結晶片岩	"	にぶい褐色	

番号 図版番号	器形	出土地点	法量		特		微	備考
			口径	底径	胎	土	焼成 色調	
134 P L. 43	甕	弥生河川 灰色砂礫層	13.6	—	7.4	石英・長石	良好 黒色	
135 "	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	13.6	—	4.7	石英・長石	" にぶい黄 橙色	
136 "	"	弥生河川 灰色砂礫層	22.8	—	2.4	石英・長石	" にぶい橙色	
137	壺	R66c-2 弥生河川 灰色砂礫層	—	—	9.5	石英・長石	" 褐色黒色	
138 P L. 42	甕or甕 (底部)	A区 弥生河川 灰色砂礫層	—	7.6	4.5	石英・長石	" 黄褐色	
139 "	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	—	9.8	5.2	石英・長石・結晶片岩	" 褐色及び 黒褐色	
140 "	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	—	7.0	6.0	石英・長石	" 橙色	部分的に ぶい赤褐色
141 "	壺 (底部)	D区 S66a-1 弥生河川 灰色砂 礫層	—	9.8	6.3	石英・長石	" にぶい黄橙	
142 "	"	弥生河川 灰色砂礫層	—	11.8	8.9	石英・長石	" 灰白	
143		R67c-1 弥生河川 灰色砂礫層	—	9.0	4.7	石英・長石	" 灰黄褐、にぶ い黄橙、黄褐 色	
144	壺 (底部)	C区 弥生河川 灰色砂礫層	—	6.8	3.6	石英・長石	" 褐、暗褐、黒 褐色	
145 P L. 42	甕or甕 (底部)	C区 弥生河川 灰色砂礫層	—	9.9	2.8	石英・長石	" 明黄褐色	
146 "	"	C区 弥生河川 灰色砂礫層	—	9.6	6.6	石英・長石	" 橙色	
147 "	"	D区 T66a-1 弥生河川 灰色 砂礫層	—	8.8	5.7	石英・長石	" 黒褐色	
148 "	壺 (底部)	D区 T66a-3 弥生河川 灰色 砂礫層	—	8.6	5.6	石英・長石	" にぶい黄橙色 に黒褐色	
149 P L. 43	甕	R66b-3 弥生河川 灰色砂礫層	—	8.6	9.7	石英・長石	" 暗褐色 黒褐色	
150 P L. 41	壺	C区 灰色粘土下層	25.2	—	12.0	石英・長石	" にぶい橙色	
151	"	S68b-3 SF1003 茶灰色土	19.2	—	1.9	石英・長石	" にぶい橙色	
152	"	S66c-1 SF1001 茶灰色土	23.4	—	1.2	石英・長石	" にぶい橙色	
153	"	D区 弥生河川 灰色砂礫層	12.4	—	1.0	石英・長石・くさり礫	" 浅黄橙色	

番号 図版番号	器形	出土地点	法量		特		徴		備考
			口径	底径	胎	土	焼成	色調	
154	壺	S66c-1 SF1001 茶灰色土	10.0	—	2.0	石英・長石	良好	灰白色	
155	"	C区 弥生河川 灰褐色砂層	10.0	—	4.4	石英・長石	"	灰白色	
156	"	茶灰色土下層	15.6	—	1.0	石英・長石	"	淡赤灰色	
157	甕	C区 弥生河川 灰色砂礫層	13.2	—	4.2	石英・長石	"	灰白色	
158 P L.43	壺	T67b-1 SF1001 茶灰色土	19.6	—	10.0	石英・長石・くさり礫	"	にぶい黄橙・ 灰黄褐・橙色	
159 P L.41	"	弥生河川 灰褐色砂層	20.2	—	8.9	石英・長石	"	橙色	口縁部一黒 と灰白色
160	"	D区 弥生河川(上部) 茶褐色砂層	24.7	—	6.5	石英・長石・くさり礫	"	黄橙・にぶい 黄橙	
161 P L.43	無頸壺	T66a 弥生河川 灰色砂礫層	12.8	—	3.1	石英・長石・くさり礫・ チャート	"	褐橙色	
162	"	S66d-2 茶灰色土下層	15.8	—	2.3	石英・長石・雲母・ 角閃石	"	にぶい褐色	
163 P L.43	"	NUB I 弥生河川 灰色砂礫層	9.8	—	2.6	石英・長石・くさり礫	"	暗褐色	
164	壺	灰色粘土	18.8	—	2.6	石英・長石・くさり礫・ 角閃石	"	暗褐色	
165 P L.42	壺or甕 (底部)	D区 灰色粘土下層	—	8.0	4.1	石英・長石・結晶片岩	"	褐橙色	
166	壺 (底部)	T68a-1 灰色粘土	—	6.4	3.1	石英・長石・角閃石	"	黒色とにぶい 橙色	
167 P L.43	壺or甕 (底部)	D区 弥生河川(上部) 茶褐色砂層	—	6.2	3.3	石英・長石	"	黄橙及び黒色	
168	壺 (底部)	弥生河川(上部) 茶褐色砂層	—	7.0	2.5	石英・長石・くさり礫・ 結晶片岩	"	淡橙色	
169	"	D区 弥生河川 灰色砂礫層	—	5.0	3.0	石英・長石・くさり礫	"	橙色	
170 P L.43	壺or甕 (底部)	T67a-1 弥生河川 灰色砂礫層	—	8.2	3.5	石英・長石	"	浅黄橙・黒色	
171	壺 (底部)	弥生河川 灰色砂礫層	—	7.4	5.1	石英・長石	"	褐灰色	
172 P L.43	甕	D区 弥生河川(上部) 茶褐色砂層	19.8	—	1.8	石英・長石・角閃石	"	褐色	
173 "	"	D区 弥生河川 灰色砂礫層	38.2	—	9.6	石英・長石	"	にぶい橙色	

第4節 古墳時代～江戸時代の遺構と遺物

1 平安時代～江戸時代の遺構（水田跡）

（1）水田遺構と層位

本調査区で検出した遺構は、弥生時代の「杭列群」以後のものとしては、平安時代後期ないし鎌倉時代から江戸時代の水田跡である。水田跡は、現水田の耕作土と床土を取り除いた面を第五次水田遺構面として、その下層に4面の水田面が検出されて全部で5面を数えるが、最下面の第一次水田遺構面には2時期の水田跡が重複して検出されたから、水田跡は6時期に及ぶ。

水田遺構面と層序との関係を、上層から順に述べると、現水田耕作土と床土を除いた黄灰色土層上面が第五次水田遺構面。黄灰色土層を剥ぎ取った茶灰色土層上面が第四次水田遺構面。茶灰色土層を剥ぎ取った茶灰色土層下面が第三次水田遺構面。茶灰色土層を剥ぎ取った灰色粘土層上面が第二次水田遺構面。そして灰色粘土層および灰色粘土下層を剥ぎ取った黄色粘土層上面が第一次水田遺構面である。第一次水田遺構面では、2時期の水田が重複して検出された。水田面は、第一次水田遺構面で終わるが、そのベースである黄色粘土層からは少量の縄文土器が出土している。

（2）現在の水田と条里（第68図参照）

本調査区内で発掘された水田跡は、平安時代後期ないし鎌倉時代から江戸時代にかけてのもので、後述するように、最初の水田造成以来、途中水田の再造成はあっても、現在に至るまで連続と経営が行われてきたと考えられるものである。したがって、発掘した各水田跡と現在の水田とは、歴史的に連続した一連のものと言える。それでここでは、現在の水田を一連の水田跡の最終形態としてとらえて、その形状を記述し、また現在の水田環境についても概略を述べ、部分的な水田の調査とならざるを得ない発掘調査データの資料的限界を補うことにしたい。

本調査区は、日下部郷の条里内にあって、その中の二つの坪にまたがっている（130頁第68図参照）。この二つの坪の字名は、北側が「四ノ坪」、南側が「三ノ坪」である。この字名から推測すると、本調査区は、日下部郷の条里の南端付近にあたる。

本調査区がまたがる二つの坪内の地割りは、いずれも長地型だが、三ノ坪は南北方向の長地型、四ノ坪は東西方向の長地型となっている。この地割りの方向の違いは、それぞれの坪の地形と関係している。三ノ坪では地形は東西方向に傾斜しているから、ここでは南北方向に地割りをすれば、長地型の水田の傾斜は最も少なくなる。また、四ノ坪では南北方向に傾斜しているから、ここでは東西方向の長地型が一枚の水田の傾斜が最も少ない。

水利は、両坪とも、東側の段丘縁辺に沿った水路から取水し、そして西側の水路へ排水する仕組みになっている。

(3) 水田跡

西浦橋遺跡の水田跡は、溝、畦畔、段差、水田床土、耕作土などの水田そのものを形づくっている遺構と、井戸、杭跡、牛足跡あるいは土壌学でいう水田「下層土」など、水田経営過程において形成された遺構などから構成されている。

水田跡の検出は、水田上層の覆土を除くと、まず褐色の帯状の遺構が現れてくる。畦畔である。この畦畔の褐色の色調は、乾田の場合において、耕作土から溶脱し、水田床面に集積した酸化鉄の色である。だから耕作土をめくりつつ、褐色面を追っていくと水田床面が検出される。各水田遺構とも、上層の水田によって削平されており、そのため耕作土が極めて薄く、水田遺構の検出状態は、耕作土を取り除いた床面の状態である。この床面に溝、杭跡、井戸等の遺構が検出された。また、畦畔も上層の水田によって削平されているため、消失しているかあるいは検出されてもその上半部を失い、かろうじてその基底部が残存したものである。とくに段差の場合は、段差上位側の畦畔は殆ど削平され消失していた。

以下に各水田遺構面について、上層から順に記述していく。

第五次水田遺構面〔第46図；図版15〕

黄灰色土層上面に形成された水田遺構である。現在の水田によって畦畔は削平され、僅かに溝を一本検出したに留まった。この溝は、現在の畦畔に沿っている。

この水田遺構が形成されているベース面の黄灰色土層は、実は、数枚の薄い水田層が重層したもので、層の色調である黄灰色は、これら水田の下層土の酸化鉄集積層の色である。しかし、これら薄い水田層を一枚ずつめくり、各水田面を検出するのは殆ど不可能なことであったので、その最上面と最下面の水田遺構を検出した。最上面の水田遺構がこの第五次水田遺構面であり、最下面の水田が次の第四次水田遺構面である。

第四次水田遺構面〔第47図；図版15〕

黄灰色土層をめくると、茶灰色土層をベースとした第四次水田遺構面がある。その耕地形態は、現在の水田地割りと殆ど同一で、段差で面された三ノ坪と四ノ坪が認められ、それぞれの坪内は長地型に地割りされている。

四ノ坪では、東西ないし南北方向に平行して走る浅い細溝が数条検出されたが、これらは取溝と思われる。

水田床面は酸化鉄の集積によって全面褐色を呈し、さらにその下層にはマンガン斑が形成されている。また杭跡が、第一次水田遺構面から第三次遺構面にかけて多数認められたが、この第四次水田遺構面でも検出した杭跡については、その総てを図化した。

第三次水田遺構面〔第48図；図版16〕

上層の第四次水田遺構面と殆ど同一の地割りである。水田下層土には、第四次水田遺構面ほどではないが、酸化鉄の集積層も認められ、またマンガン斑も形成されている。

第二次水田遺構面〔第49図；図版17〕

この水田面は削平が著しく、検出した遺構は数本の溝と段差状の畦畔そして井戸と牛足跡などである。溝の殆どは、現在の畦畔に沿ったものであるが、S D1009だけが長地型の一枚の水田のほぼ中央を東西に走っている。この溝は、暗渠かもしれない。

水田面は、上層の各水田がシルト層の上に造成されているとは異なり、粘土層（灰色粘土層）をベースにしている。そのためか、水田下層土には酸化鉄の集積層は認められず、またマンガン斑の形成もない。ベース層の灰色の色調は、この層が弱くグライ化していることを示し、また湿田特有の最管状斑紋などが形成されている。

井戸は、直径0.9m、深さ1.0m程度の浅いものである。しかし、井戸の下には弥生時代の自然流路に埋積した砂層があり、井戸底はこの砂層に達しているから、この深さで十分井戸の機能を果たしたと考えられる。

第一次水田遺構面〔第50図；図版18・19〕

この遺構面では、水田跡と同一面で、弥生時代の自然流路（S D1018など）が調査区の北縁と南東隅に検出されているが、もちろん水田跡と共存するものではない。

この遺構面の四ノ坪に当る部分で、重複する二つの水田跡が検出されている。上位の水田跡は、残りは悪いが、現水田の地割りとほぼ同一の長地型の地割りである。しかし、完全に一枚の長地型ではなく、長い水田を細分割する畦畔が検出されている。下位の水田跡も、残存は一部に限られるが、上位の水田地割りとほぼ約5.5m北へ平行にずれた地割りである。この地割りでも長地型水田を細分する畦畔が検出されている。

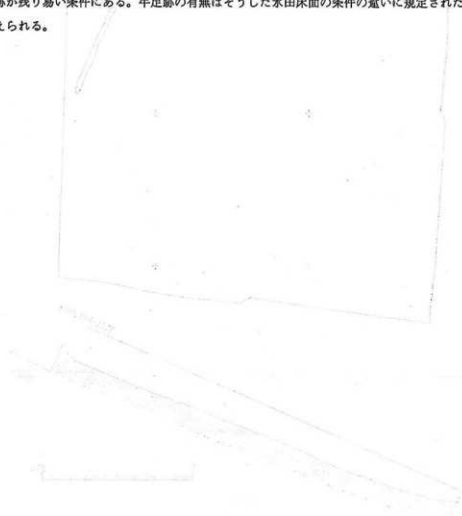
四ノ坪側では、長地型水田が細分割された小区画水田の形態を取っている。三ノ坪側でも、その畦畔と溝は断片的ではあるが、南北方向の溝（S D1019）は、四ノ坪の長地型水田を分割する南北方向の畦畔の延長方向にある。したがって、この溝に沿って四ノ坪側から続く畦畔があったと考えられるが、この畦畔の位置は、現在の四ノ坪の南北方向の畦畔の位置とはほぼ一致している。また、この溝の東に十字に残っている畦畔は、南北方向の溝（S D1019）から約11mの位置にあり、さらに、その東西方向の畦畔も、四ノ坪側の東西方向の畦畔から約13mの位置にある。以上のように、下位水田跡の地割りは現在の地割りと北に約5mないし6m程平行にずれているのであり、しかも東西、南北方向に畦畔が走る小区画水田として復元される。このように復元される小区画水田の面積は、132㎡と63㎡である（124頁第66図参照）。

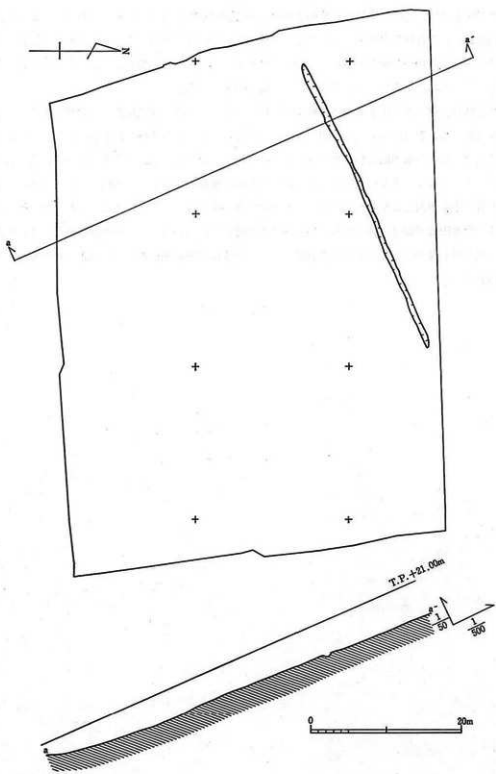
第一次水田遺構面では、上位、下位の水田とも第二次水田遺構面と同様に粘土層をベースとしており、その下層土には最管状斑紋が認められた。

水田床面には、無数の牛足跡が検出された。牛足跡の検出面での形態はいろいろであったが（図版18）、これは牛足跡をどのレヴェルで検出したかによる違いである。すなわち、足跡上面で検出すれば径10cm前後の円形となるが、これを削り込むとハート型となり、さらに削るとハ字型となる。これは爪先が二つに分れている牛足の特徴である。

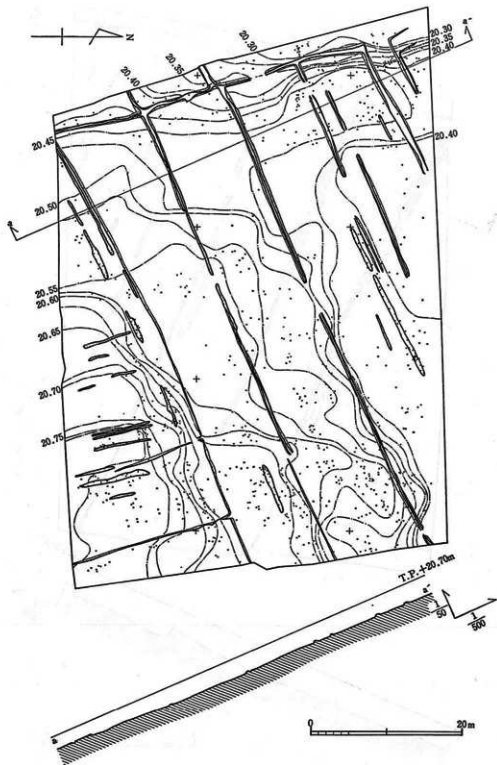
牛足跡は、第二次水田遺構面から検出され始めたが、第一次水田遺構面でその総てを実測し、図面に落した。第三次～第五次水田遺構面にかけては、牛足跡が検出されなかった。しかし、このことはこれらの水田面における牛耕の有無の反映ではなく、水田床面の土質の状態に関係していると考えられる。すなわち、第一次～第三次水田遺構面は、酸化鉄が集積してよくなったシルト質の土を床面としており、牛の爪先が床面に食い込みにくい状態である。これに対し第一次～第二次水田遺構面は、粘土質の土壌の上に水田造成されているからその床面は軟らかく、牛足跡が残り易い条件にある。牛足跡の有無はそうした水田床面の条件の違いに規定されたものと考えられる。

（安里）

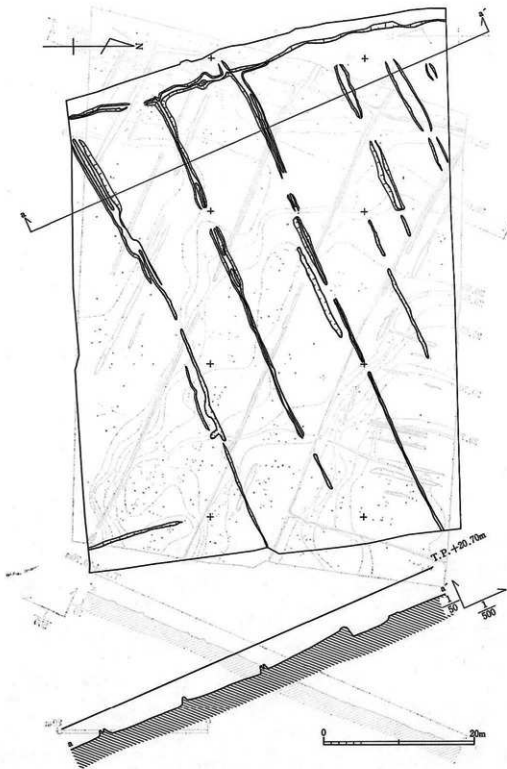




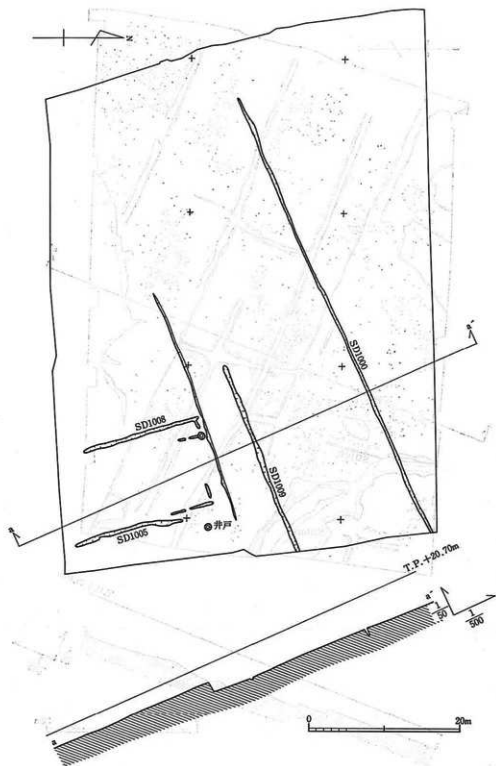
第46図 第五次水田遊構面実測図



第47図 第四次水田遺構面実測図（点は杭穴）



第48圖 第三次水田遊構面実測図



第49図 第二次水田遺構面夾測図



第50図 第一次水田造構面実測図（微凹は牛足跡）

2 古墳時代～平安時代前期の遺物

本調査区内には、古墳時代～平安時代前期の遺構は存在しないが、この時期の遺物が平安時代後期～江戸時代の水田層から多量出土した。その遺物の殆どが須恵器（31,807点）であり、他に埴輪（59点）、滑石製の子持勾玉（1点）がある。実際には古墳時代の土師器も少量存在していたと考えられるが、これは小破片になると中・近世の土師器との区別が困難であるから、それらの中に含まれて集計されていると思う。水田層は、後で述べるように10世紀以降の水田経営によって形成された層であり、したがってこれらの遺物は二次的堆積物である（安里）

(1) 須恵器〔第51～55図；図版44～51〕

出土した須恵器は3万点余にも及ぶが、水田耕作によって細かく破砕されており、器種、型式などがうかがい知れたものは僅かであった。須恵器の時期は、田辺昭三氏の須恵器新編年^{註2}に照らすと、Ⅰ期～Ⅳ期の全期間にわたっているが、Ⅰ期とⅣ期後半の須恵器は少量でⅡ期～Ⅲ期前半が主体を占めている。器種はⅡ期～Ⅲ期前半の殆どの器種が出土したが、量的主体を占めたものは、破片点数でいえば杯と甕である。この他に器台、台付壺などがあり、子持勾玉、埴輪などとともに古墳祭祀に由来する遺物の存在が注目される。













水田層から出土した須恵器群は、破片点数では大量であるが、次の点によってその資料価値は低いとせざるを得ない。その第一点は二次的堆積物であること、第二点は、須恵器群の時期幅がⅠ期～Ⅳ期と須恵器の全期間にわたり、しかも水田耕作によって細片化されていることである。そのため、出土量の割には器種・型式を特定できる個体は限られ、須恵器群の内容を時期別の器種構成でとらえることはおよそ不可能なことである。

こうした資料的限界性の中で、しかし、杯だけは例外的な存在である。これは、小破片になっても器種と型式の特定が比較的容易であり、しかも出土量も多く、時期別の割合構成が比較的正確に把握できると考えられた。そこで、水田層出土の須恵器群の個々についての記載は実測図（第51～55図）と写真、そして観察表（第8表）にゆずり、ここでは水田層に二次的に堆積した須恵器群のうち、杯について型式分類し、その数量的構成について調べた。

杯の型式分類（第5表）

杯の殆どが小破片で、その全形を復元できる個体に限られていたため、杯の型式分類は口縁部を中心にして行いことにした。したがって分類の基準は、蓋についてはイ：口縁端部の作り、ロ：天井部と口縁部境界の稜の形態、あるいはその有無、ハ：とくにⅢ期以後の蓋については、Ⅱ期末の身との区別点として、かえりの有無と、ニ：蓋全体の扁平化の程度、そしてホ：Ⅲ期とⅣ期の区別点として、口縁部の屈曲の有無などとした。身については、イ：口縁端部の作り、ロ：

第5表 水田層出土須恵器杯の分類

分類	主な形態	口縁部の特徴(蓋)	陶色 編年	分類	主な形態	口縁部の特徴(身)	陶色 編年
A		口縁端部は凹面ないし平坦。 天井部と口縁部境の稜はしっかりしている。	TK 216 ↓ TK 47	H		立ち上がり端部は内傾する段、 ないし凹面。 立ち上がりは高く、やや外反し つつ直立する。	TK 216 ↓ MT 15
B		口縁端部は凹面ないし内傾する。 天井部と口縁部境の稜は丸みを おびてよい。	MT 15	I		立ち上がり端部は丸くおさめる。 立ち上がりは短く、内傾する。	TK 10 ↓ TK 43
C		口縁端部は大きく内傾する。 天井部と口縁部境の稜は凹線に 代るか、消失する。	TK 10	J		立ち上がり端部は丸くおさめる。 立ち上がりは著しく短く、受部 端部よりわずかに突出。 口径は小さい。	TK 209
D		口縁端部は丸くおさめる。 天井部と体部の境には稜も凹線 もない。	TK 43 ↓ TK 209	K		口径は小さい。 口縁部は直立する。 底部と口縁部の境は丸い。	TK 217
E		口縁端部ちかくの内面にかえり をもつ。 器高が低く扁平で蓋として定形 化している。	TK 217 ↓ TK 48	L		口径は大きい。 口縁部はやや外開きにまっすぐ のびる。 底部は平底ないしは高台。	TK 46 ↓ TK 7
F		内面のかえりは消失。 口縁端部は下方へ短く屈曲し、 先端はよい稜をなす。 天井部はややふくらみがある。	MT 21				
G		天井部と口縁部境は段をなし、 端部は下方へ短く屈曲する。 天井部は扁平化する。	TK 7				

たちあがりの形態あるいはその有無、ハ：特にⅡ期の身とⅢ期の蓋については上記した区別点、ニ：Ⅱ期の蓋とⅢ期の身との区別点として口径の大小などを分類の基準においた。

以上の分類基準によって、蓋はA～Gの7型式、身はH～Lの5型式に分類できた。各型式の特徴は第5表に示したとおりである。蓋の型式は口縁部の形態で比較的細分できたが、身は口縁部の作りの変化が乏しく、大まかな分類しかできなかった。また、西浦橋遺跡の須恵器分類の編年的位置の目安として、田辺氏の須恵器新編年と対照した。

上記の分類による、水田各層の須恵器各型式の集計を第7表に示した。

ヘラ記号

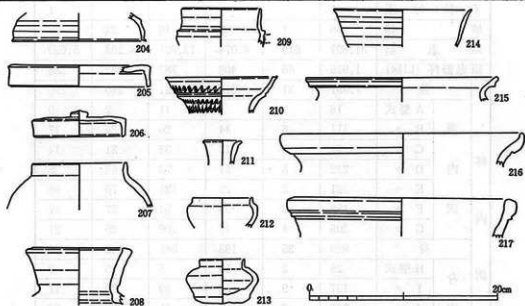
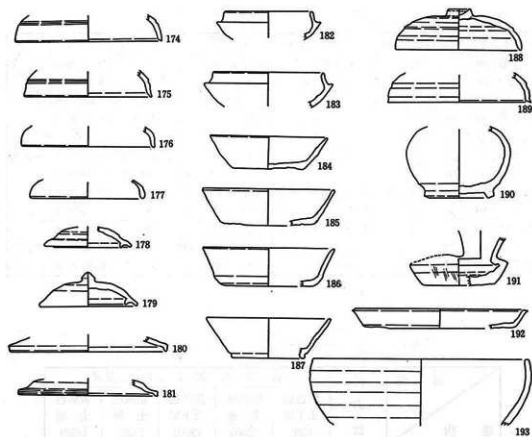
本調査区から出土した須恵器31,807点のうち、96点にヘラ記号が認められた。そのうち、ヘラ記号の形態がほぼ判明したものは24点であるが、その時期、器種も明らかなものは更に少ないので、ここでは、この24点について写真(図版51)と観察表(第6表)を掲げるにとどめた。なお、写真と観察表では、ヘラ記号の筆順の正確な表現に努めた。(安里)

第6表 ヘラ記号須惠器(図版51) 観察表

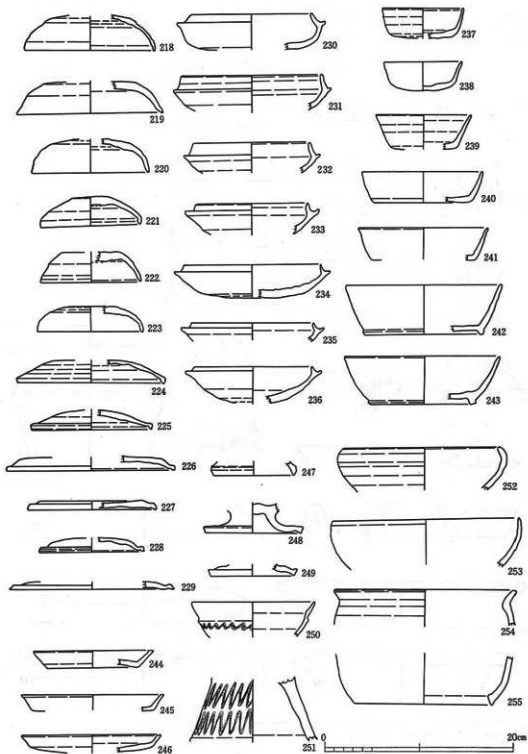
出土層位	遺物No.	ヘラ記号	器種	型式	記号位置	その他	出土層位	遺物No.	ヘラ記号	器種	型式	記号位置	その他
茶灰下色層	779	—	杯		体部外面	一部欠	黄灰色土層	791	卍	甕		口縁部外面	完全
黄灰色土層	780	—	*		*	完全	*	792	卍	杯		体部外面	一部欠
*	781	—	*		*	*	茶灰下色層	793	卍	杯蓋	F-G	蓋外面天井部	完全
茶灰下色層	782		*		*	一部欠	黄灰色土層	794	卍	杯		体部外面	一部欠
*	783		*		*	*	茶灰色土層	795	卍	*		*	完全
黄灰色土層	784		*		*	*	*	796	卍	杯身	K	底部外面	一部欠
茶灰色土層	785		*		底部	*	*	797	卍	杯蓋	E	天井部外面	完全
*	786	×	杯蓋	D	天井部外面	*	*	798	卍	杯		体部外面	*
*	787	×	蓋類		体部外面	完全	灰色粘土層	799	○	高杯		脚部外面	一部欠
黄灰色土層	788	×	杯		*	一部欠	灰土下粘層	800	○	甕		口縁内面	*
*	789	×	*		*	*	灰色粘土層	801	○○	不明		体部外面	竹管挿入一部ヘラ記号的でない
茶灰下色層	790	卍	*		*	*	*	802		*		底部内面	

第7表 古墳時代—平安時代前期出土遺物集計表(破片点数)

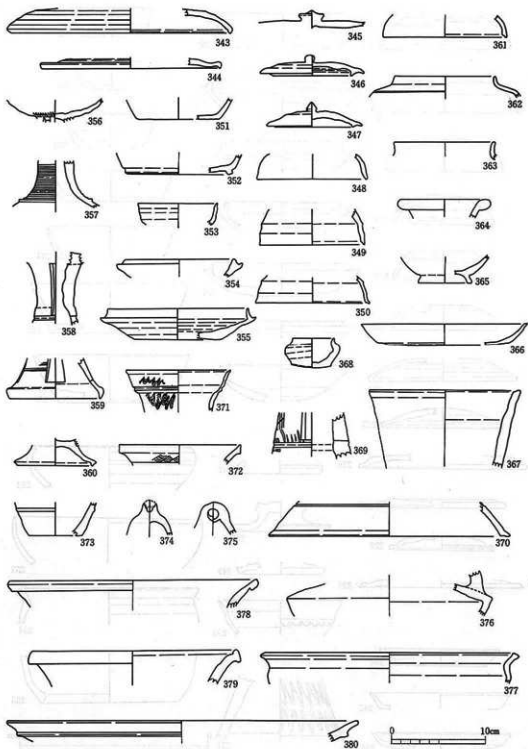
遺物	層位	總点数	各層内訳()内は土量㎡				
			灰色粘土下層(50)	灰色粘土層(260)	茶灰色土下層(200)	茶灰色土層(330)	黄灰色土層(450)
子持勾玉		1					1
埴輪		59	1	3	16	22	17
須惠器		31,807	619	4,074	13,821	8,203	5,090
須惠器杯(口縁)		1,926	66	408	782	382	288
	蓋	1,097	31	215	421	240	190
杯内訳	A型式	16	2	1	11	2	0
	B*	111	6	44	20	24	17
	C*	91	5	18	33	21	14
	D*	222	8	51	73	65	25
	E*	321	3	25	121	76	96
	F*	130	3	29	54	27	17
	G*	206	4	47	109	25	21
身		829	35	193	361	142	98
身内訳	H型式	25	2	10	8	5	0
	I*	137	9	58	39	20	11
	J*	147	2	15	71	27	32
	K*	40	4	7	14	7	8
	L*	480	18	103	229	83	47



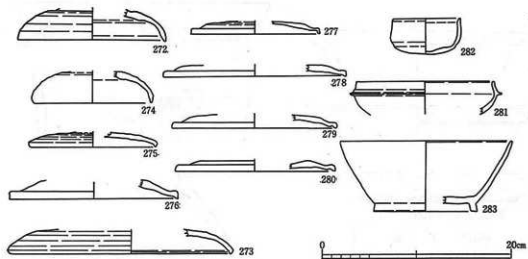
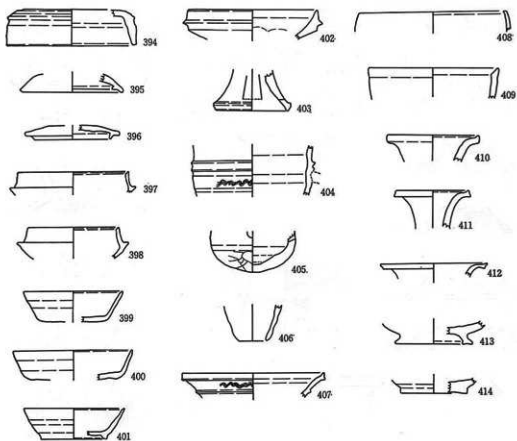
第51图 灰色粘土下層(上)、灰色粘土層(下)出土須臾器



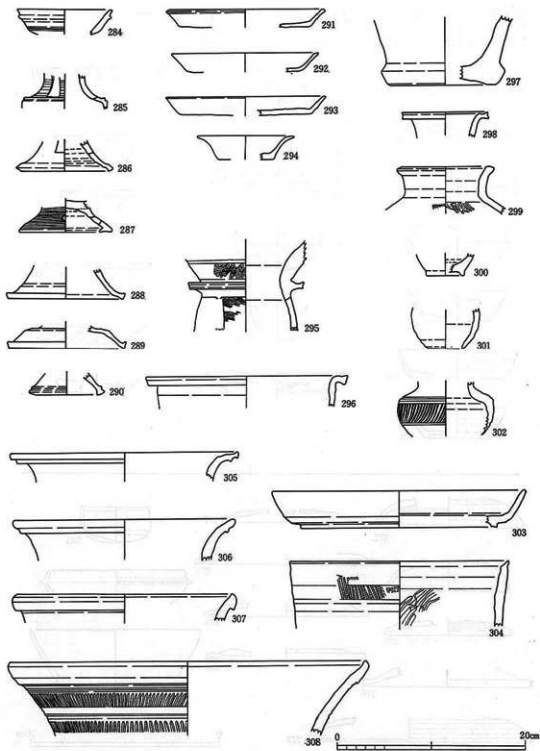
第52図 灰色粘土層出土須恵器



第53图 茶灰色土層出土須惠器



第54図 黄灰色土層（上）、茶灰色土層（下）出土須恵器



第55图 茶灰色土下層出土須惠器

第8-1表 水田層出土須恵器観察表

図番号	遺物番号	器種	型式	時期	口径 cm	底径 cm	断面 の層	焼成	胎土	図番号	遺物番号	器種	型式	時期	口径 cm	底径 cm	断面 の層	焼成	胎土
灰色粘土層										第51 図	211	長頸壺			3.8			良好	長石・クヤリ磁含む
第51 図	174	杯蓋	Ⅱ・C		15.3		Ⅱ	良好	長石・クヤリ磁少量		212	壺			6.2		Ⅲ	*	クヤリ磁多量
	175	*	*		13.2		Ⅲ	*	長石・クヤリ磁多量		213	*			4.1			*	長石・クヤリ磁含む
	176	*	Ⅱ・D		13.8		*	*	長石・クヤリ磁含む		214	杯身	Ⅲ・Ⅳ L		14.4		Ⅲ	*	クヤリ磁・白砂含む
	177	*	*		11.7		*	*	長石少量		215	甕			20.2		0	不良	白砂含む
	178	*	Ⅲ・E		9.2		I	*	長石・赤クヤリ磁含む		216	*			25.2		Ⅱ	良好	長石含む
	179	*	*		10.2		Ⅲ	不良	長石含む		217	*			22.4		*	*	*
	180	*	Ⅲ・F		16.3		*	良好	長石少量・クヤリ磁多量		218	杯蓋	Ⅱ・C		13.7			*	*
	181	*	Ⅳ・E		14.6		*	*	クヤリ磁少量		219	*	Ⅱ・D		15.4			*	*
	182	杯身	Ⅰ・H		8.9		Ⅱ	*	夾雑物なし		220	*	*		12.4			*	クヤリ磁多量
	183	*	Ⅱ・I		11.4		*	*	*	221	*	*		10.4			*	長石含む	
184	*	Ⅲ・Ⅳ L		12.2			*	長石含む	222	*	*		10.8		Ⅲ	*	長石・クヤリ磁含む		
185	*	*		13.6		Ⅲ	*	クヤリ磁多量	223	*	*		11.1		*	*	長石・石英含む		
186	*	*		13.6		*	*	*	224	*	Ⅲ・F		15.4		*	*	クヤリ磁・白砂含む		
187	*	*		12.8	7.4	*	*	長石・クヤリ磁含む	225	*	*		12.8		Ⅲ	*	白砂含む		
188	杯蓋			14.0			*	*	226	*	Ⅳ・G		11.4		*	*	クヤリ磁多量		
189	蓋			15.0		Ⅲ	*	長石含む	227	*	*		13.6		*	*	長石・クヤリ磁含む		
190	壺			6.2	*	*	*	長石・クヤリ磁多量	228	*	*		18.3		*	*	白砂含む		
191	平瓶				*	*	*	長石含む	229	*	*		17.2		*	*	クヤリ磁含む		
192	皿	Ⅳ		17.8			*	*	230	杯身	Ⅰ・H		14.8		Ⅲ	*	長石含む		
193	鉄鉢			22.8			*	長石・クヤリ磁多量	231	*	Ⅱ・I		12.1		0	不良	白砂含む		
第51 図	194	高杯蓋				Ⅲ	*	長石・チャート・クヤリ磁含む	232	*	*		11.6		Ⅰ	良好	石粒少量		
	195	*				*	不良	長石・クヤリ磁含む	233	*	*		14.4		Ⅲ	*	クヤリ磁多量		
	196	加蓋 高杯				*	良好	長石含む	234	*	*		12.8		*	*	白砂含む		
	197	*				*	*	クヤリ磁含む	235	*	Ⅱ・J		14.3		Ⅱ	*	長石含む		
	198	短頸壺				*	*	石粒含む	236	*	*		8.5		*	*	白砂含む		
	199	直口壺				Ⅱ	*	クヤリ磁含む	237	*	Ⅲ・K		8.0		*	*	長石・クヤリ磁含む		
	200	*					I	*	夾雑物なし	238	*	*		10.0		Ⅲ	*	白砂多量	
	201	器台					Ⅱ	*	長石・石粒含む	239	*	Ⅲ・Ⅳ L		12.8		*	*	クヤリ磁・長石多量	
	202	*					I	*	クヤリ磁含む	240	*	*		13.6		Ⅲ	*	白砂含む	
	203	壺底部					Ⅱ	*	石粒含む	241	*	*		16.4	12.6	*	*	白砂粒・クヤリ磁含む	
灰色粘土層										242	*	*		16.2	10.6	*	*	長石含む	
第51 図	204	蓋			14.0		Ⅲ	良好	長石・クヤリ磁含む	243	*	*		12.5		Ⅲ	*	白砂含む	
	205	*				*	*	クヤリ磁含む	244	皿	Ⅳ		12.8		*	*	クヤリ磁多量		
	206	*			9.0		*	*	長石少量	245	*	*		15.0		*	*	白砂・クヤリ磁含む	
	207	短頸壺			9.8		Ⅲ	*	砂粒少量	246	*	*		14.6		*	*	白砂含む	
	208	壺			9.6		*	*	長石・クヤリ磁含む	247	高杯蓋			8.4		Ⅱ	*	長石・石英含む	
	209	柳手 浮筒			8.4		Ⅲ	*	白砂含む	248	*			10.0		Ⅲ	*	白砂含む	
	210	甕			11.8		*	*	クヤリ磁含む	249	*			8.7		*	*	長石・クヤリ磁含む	

第8-2表 水田層出土須恵器観察表

図番号	遺物番号	器種	型式	口径 cm	底径 cm	断面 形状	焼成	胎土	図番号	遺物番号	器種	型式	口径 cm	底径 cm	断面 形状	焼成	胎土	
第52図	250	無蓋高杯		12.8		I	良好	石英・長石含む	第55図	290	高脚			6.4	II	良好	長石含む	
	251	高台				II	+	長石含む		291	+		16.0			+	石粒少量	
	252	鉢		16.8		III	+	クサリ礫含む		292	+		15.4			+	長石含む	
	253	+		19.6		II	+	+		293	+		16.4			+	白砂含む	
	254	鉢		18.8		III	+	白砂含む		294	+		10.0			+	長石含む	
第46図	255	瓶			11.4	II	+	長石・クサリ礫含む	295	器台					I	+	+	
	256	無蓋高杯				0	不良	白石粒含む	296	壺		10.4			III	+	+	
	257	+				II	良好	+	297	壺			11.1			+	+	
	258	高脚				III	+	長石含む	298	広造		9.0			III	+	夾雑物なし	
	259	皿				II	+	クサリ礫含む	299	壺		10.2				+	白色粒・クサリ礫含む	
	260	壺	V			III	+	白石粒含む	300	+			4.0		III	+	長石含む	
	261	高脚				II	+	+	301	納蓋		3.4			+	+	+	
	262	壺				III	+	長石含む	302	皿							+	
	263	+				+	+	白石粒含む	303	皿		26.4	20.6		II	不良	長石含む	
	264	+				+	+	クサリ礫含む	304	瓶		23.0			III	+	長石・石英含む	
	265	+				0	不良	夾雑物なし	305	壺		23.8				良好	長石多量	
	266	高台				III	+	+	306	壺		23.0			II	+	長石含む	
第54図	267	+				II	良好	+	307	又注 壺		22.5				+	白砂含む	
	268	器台				+	+	白石粒含む	308	壺		37.3				+	白砂多量	
	269	高台				III	+	+	309	+					I	+	白砂含む	
	270	+				+	+	白石粒・クサリ礫含む	310	広造					II	+	+	
	茶 灰 色 土 下 層																	
	272	杯蓋		15.5			良好	長石含む	311	壺					+	+	長石含む	
	274	+		12.3			II	+	+	312	広造				I	不良	長石・チャート含む	
	275	+		13.2			+	白砂少量	313	高台					III	良好	長石含む	
	276	+		17.6			III	+		314	器台				I	+	夾雑物なし	
	277	+		13.5			+	長石・石英含む	315	高台					+	+	白石粒含む	
278	+		19.2			+	夾雑物なし	316	器台					III	+	クサリ礫含む		
279	+		17.4			+	白砂含む	317	+					II	+	白石粒含む		
280	+		16.8			+	+	318	+					III	不良	クサリ礫含む		
281	杯身		14.5			II	+	白砂多量	319	台付 蓋脚			12.0		+	良好	夾雑物なし	
282	+		6.8			+	クサリ礫・長石含む	320	器台					+	+	白石粒含む		
283	+		18.0	10.8		+	長石・石英含む	321	+					+	+	クサリ礫含む		
第55図	284	無蓋高杯		10.0			+	長石含む	322	+					+	+	白砂・クサリ礫含む	
	285	高脚				I	不良	長石・クサリ礫含む	323	+					+	+	白石粒含む	
	286	+			9.2	III	良好	夾雑物なし	324	壺					II	+	夾雑物なし	
	287	+			11.6	+	+	クサリ礫・長石少量	325	+					I	+	クサリ礫含む	
	288	+			11.8	0	+	長石含む	326	長脚					III	+	クサリ礫・白石粒含む	
	289	+			12.2	III	+	長石・石英含む	327	+					II	+	クサリ礫含む	
								328	壺						+	+	長石含む	

第8-3表 水田層出土須恵器観察表

図番号	遺物番号	器種	型時式期	口径cm	底径cm	断面形状	焼成	胎土	図番号	遺物番号	器種	型時式期	口径cm	底径cm	断面形状	焼成	胎土		
47	329	杯				Ⅲ	良好	夾雑物なし	53	367	摺鉢		15.8		I	良好	白色粒含む		
	330	摺鉢				0	*	クサリ礫含む		368	短腹壺		8.8	8.0		*	長石含む		
	331	甕				I	*	長石・クサリ礫含む		369	器台脚					I	*	長石・クサリ礫含む	
	332	短腹壺				I	*	クサリ礫含む		370	*				12.6		I	*	白色粒・クサリ礫含む
	333	無蓋高杯				Ⅲ	*	長石・クサリ礫・白砂含む		371	甕			11.0		I	*	クサリ礫含む	
	334	*				Ⅱ	*	クサリ礫含む		372	直口壺			12.8		Ⅱ	*	クサリ礫・長石含む	
	335	蛸壺				Ⅲ	*	夾雑物なし		373	把手付甕				5.6		Ⅱ	*	長石含む
	336	甕				Ⅲ	*	白石粒含む		374	蛸壺				0		0	*	白石粒・クサリ礫・小石少量
	337	*				Ⅱ	*	夾雑物なし		375	*							*	白色粒含む
	338	広口壺				Ⅲ	*	*		376	提瓶						I	*	長石含む
	339	*				Ⅲ	*	クサリ礫含む		377	鉢			26.1		0	*	白色粒含む	
	340	甕				Ⅱ	*	白砂含む		378	壺又は甕			26.0		Ⅲ	*	長石・石英含む	
	341	*				Ⅱ	*	長石・クサリ礫含む		379	*			38.4		I	堅緻	夾雑物なし	
	342	甕				Ⅲ	*	クサリ礫多量		380	大甕			36.8		I	良好	長石含む	
茶 灰 色 土 層																			
53	343	杯身		21.4			不良	夾雑物なし	49	381	把手付甕				Ⅲ	*	石粒含む		
	344	杯蓋		18.8			良好	*		382	無蓋高杯				I	*	夾雑物なし		
	345	*				Ⅱ	*	長石含む		383	高杯脚				Ⅱ	*	*		
	346	*		7.3			*	長石・クサリ礫含む		385	*				Ⅲ	*	長石含む		
	347	*		9.3			I	*		白色粒・クサリ礫含む	386	器台脚				Ⅱ	*	夾雑物なし	
	348	*		11.4			*	長石含む		387	甕				Ⅲ	*	白石粒・クサリ礫含む		
	349	*		11.0			I	*		*	388	*				Ⅲ	不良	*	
	350	*		12.0			*	*		389	器台				Ⅱ	良好	長石・クサリ礫含む		
	351	杯身			8.9	0	不良	チャート・長石含む		390	白付壺				Ⅲ	*	長石・白石粒含む		
	352	*			11.0		I	良好		夾雑物なし	392	器台脚				Ⅲ	*	長石多量	
	353	*		8.4			*	チャート・長石・クサリ礫含む		393	*				Ⅲ	*	白石粒・クサリ礫含む		
	354	*		13.4			不良	長石・クサリ礫含む		黄 灰 色 土 層									
	355	*		12.0			I	良好		長石含む	394	杯蓋		13.4		Ⅲ	良好	石英粒少量	
	356	無蓋高杯						*		*	395	*		10.4		Ⅲ	不良	長石含む	
357	高杯脚						不良	チャート・長石含む	396	*		8.0		Ⅲ	良好	長石・石英含む			
358	*					Ⅲ	良好	白色粒・小石少量	397	杯身		11.6		Ⅱ	*	夾雑物なし			
359	*		9.6			I	*	白色粒・クサリ礫含む	398	*		9.6		Ⅲ	*	クサリ礫多量			
360	*		7.8			I	*	クサリ礫含む	399	*		10.4		Ⅲ	*	クサリ礫含む			
361	*		12.9			0	*	白色粒含む	400	*		12.6		Ⅲ	*	クサリ礫・石英・長石含む			
362	短腹壺		10.7			*	*	長石・チャート・クサリ礫含む	401	*		10.6	6.8	Ⅲ	*	白石粒・クサリ礫含む			
363	*		10.6			0	*	長石含む	402	無蓋高杯		13.4		Ⅱ	*	石英粒少量			
364	壺又は甕		9.0			I	*	長石・クサリ礫含む	403	高杯脚			7.4	Ⅲ	不良	灰色石粒少量			
365	壺		5.6			*	*	チャート・長石含む	404	把手付甕				Ⅱ	良好	夾雑物なし			
366	杯身		17.4			*	*	長石含む	405	甕				Ⅱ	*	長石・クサリ礫含む			
									406	蛸壺		2.8		Ⅲ	不良	長石含む			

第8-4表 水田層出土須恵器観察表

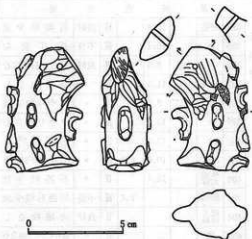
図番号	遺物番号	器種	型式期	口径 cm	底径 cm	胴高層	焼成	胎土	図番号	遺物番号	器種	型式期	口径 cm	底径 cm	胴高層	焼成	胎土	
54 図	407	甕		14.6		Ⅲ	良好	夾雑物なし	44 図版	425	甕				Ⅲ	良好	夾雑物なし	
	408	鉄鉢		13.6		+	+	*		426	*				Ⅱ	+	*	
	409	高杯			11.8		+	長石含む		427	*				+	+	白石粒・長石含む	
	410	長甕		9.6		Ⅱ	+	*		428	高杯				+	+	夾雑物なし	
	411	*		7.6		+	+	*		429	*				Ⅰ	+	クサリ礫含む	
	412	*		11.2		Ⅰ	+	*		430	器台					+	+	*
	413	甕			8.0	Ⅱ	+	長石・クサリ礫含む		431	*					Ⅲ	+	長石含む
	414	*				Ⅲ	+	長石・石実含む		432	子持勾玉					Ⅱ	+	クサリ礫含む
44 図版	415	高杯				Ⅰ	+	夾雑物なし	433	器台				+	+	クサリ礫・白石粒含む		
	416	甕				Ⅲ	+	クサリ礫含む	434	*				Ⅲ	+	クサリ礫含む		
	417	*				+	+	白石粒多量	435	*				+	+	夾雑物なし		
	418	*				Ⅱ	+	クサリ礫・白石粒含む	436	*					Ⅱ	+	*	
	420	甕又は 長甕		11.4		Ⅲ	+	夾雑物なし	437	*					Ⅲ	+	長石含む	
	421	甕		15.6		+	不良	白砂粒含む	438	*					+	+	チャート含む	
	422	*				Ⅰ	良好	長石含む	439	*					Ⅱ	+	クサリ礫含む	
	423	*				Ⅲ	+	クサリ礫含む	その他の層									
	424	*				+	+	白石粒含む	440	繪蓋						良好	クサリ礫含む	

(2) 子持勾玉〔第56図；図版35〕

T68-b-2 茶灰色土層出土。滑石製で頭部・尾部ともに端部を失っている。現存長6.5cm。

頭部は両側部から先端部にむかって削りとられ、頭端部は切り落としたように平坦な面をなしている。その頭端面にはこまかい幾筋もの条線が認められる。尾部も大きく切り落とされており広い平坦面を有し、かつ面どりを施している。尾部の切り落とした面を下にすると、頭部を上にして自立することができる。

側部は頭部より削りとられていて元の面を失っている。削りとした痕跡は幅2~4mmの細長いもので、ていねいに何回も削りとなっている。削りとしたあとにはかるく磨いており、表面は平滑である。胴部で2.2cmある厚さが削りとられた頭部（孔のところ）では1.1cmに減じている。



第56図 子持勾玉実測図

子勾玉は背部に4個、腹部に1個、側部に各3個、計11個が認められる。

背部の4個の子勾玉はいずれも一部を破損している。最上部の子勾玉は側部を削りとった時に片方を削られている。腹部の子勾玉は下の突起を失っているが、残存状況は良い方である。両側部では最上部の子勾玉がほとんど削りとられていて、わずかに痕跡を残すのみである。他の各2個の子勾玉も一部破損していて、完全なものは一つとしてみられない。

このように本例には明らかな再加工が認められる。破損したため再加工したのか、あるいは再加工そのものに意味があるのかは不明だが、再加工された子持勾玉はかなり認められるようである。後考を待ちたい。(大野)

(3) 埴輪〔第57図；図版65・66；第9表〕

全て中近世の水田層から出土したものである。円筒埴輪片56点、朝顔形埴輪片とわかるもの3点の合計59点で全体量としては極めて少なく、又、形象埴輪は見られず、全て小片である。包含層別の出土状況を見ると、灰色粘土下層1点、灰色粘土層3点、茶灰色土下層16点、茶灰色土層22点、黄灰色土層17点と相対的に見れば、茶灰色土下層（15世紀以降の水田層）に集中していると言える。これらの埴輪のほとんどがタガ部分の一部を残しているに過ぎない小片であること、当調査区の東に隣接する段丘上には、埴輪を伴う古墳等の遺構が検出されていないため、段丘上から流れ込んだとは考えられないことから、15世紀以降の水田造成が客土によってなされ、その客土が古墳ないしは古墳の近辺の埴輪を含む包含層を削平することによって集められた土であったと考えられる。なお、出土した埴輪の形態等の特徴については第9表のとおりである。(橋本)

第9表 埴輪 観察表

番号	器形	層位	調整・成形・技法	形態の特徴	備考
1	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面ヨコハケ。体部内面断続的なヨコハケ。	小片のため不明。	土師質 長石・石英・雲母含む
2	円筒埴輪	茶灰色土下層	体部外面タテハケの後ヨコハケ、タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。体部内面一部粗いヨコハケ、他はナデ。	タガは断面台形。	硬質 長石・石英含む
3	朝顔形埴輪	茶灰色土下層	タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。内面は、粗いナデ。	タガは断面三角形。	土師質 長石・石英含む
4	円筒埴輪	茶灰色土	タガ及びタガ接合部分ヨコナデ、部分的に指頭度。体部内面は、粗いナデ。	タガは断面低い台形。	土師質 長石・石英含む
5	円筒埴輪	茶灰色土下層	体部外面タテハケ、内面はナデ。	小片のため不明	土師質 長石・石英含む
6	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面タテハケ。体部内面ヨコナデの後約1cm間隔でヨコハケ。	小片のため不明。	土師質 長石・雲母含む

番号	器形	層位	調整・成形・技法	形態の特徴	備考
7	朝顔形埴輪	茶灰色土下層	体部外面タテハケ、タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。体部内面粗いヨコハケ及びナデ。	タガは断面低い台形。タガ端部はナデによる凹み。	硬質 長石・石英含む
8	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面ヨコハケ、内面ナデ。タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。	タガは断面台形。	土師質 長石・石英含む
9	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面タテハケ。体部内面指押えの後ナデ。	小片のため不明。	土師質 長石・石英含む
10	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面ヨコハケ、一部タテハケ。内面はナデ。	小片のため不明。	硬質 長石・石英・雲母含む
11	円筒埴輪	黄灰色土	体部外面はタテハケ。体部内面は、基底端部より3.5cm程上方に粘土の縦目痕があり、その上方はヨコハケ、下方はナデ。基底端部はナデ。	基底部は、外面やや厚みさげる。体部は、やや外反しながら上方へ立ち上がる。	土師質 長石・石英多量含む
12	円筒埴輪	黄灰色土	磨減はげしく不明。	タガは断面低い台形。	土師質 長石・石英含む
13	円筒埴輪	茶灰色土	磨減はげしく不明。	タガは断面低い台形、端部に凹み。	土師質 長石・石英・くさり礫含む
14	円筒埴輪	茶灰色土	タガ及びタガ接合部分はヨコナデ。その他は磨減はげしく不明。	タガは幅広く断面低い台形。	土師質 長石・石英・雲母・くさり礫含む。黒斑あり
15	円筒埴輪	黄灰色土	磨減はげしく不明。	タガは断面台形	土師質 長石・石英含む
16	円筒埴輪	茶灰色土	磨減はげしく不明。	タガは小さく、断面三角形。	土師質 長石・石英含む
17	円筒埴輪	茶灰色土	磨減はげしく不明。	タガは断面低い台形。	土師質 長石・石英・雲母・くさり礫含む
18	円筒埴輪	茶灰色土	タガ接合部分ヨコナデ。その他は磨減はげしく不明。	タガは比較的高い台形。	土師質 長石・石英・くさり礫含む
19	円筒埴輪	灰色粘土下層	磨減はげしく不明。	タガは断面低い台形。	土師質
20	円筒埴輪	黄灰色土	体部内面ヨコハケ、その他は磨減はげしく不明。	タガは断面台形。	土師質 長石・石英・くさり礫含む
21	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面タテハケ。タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。体部内面ナデ。	タガは断面台形。	硬質 長石・石英含む
22	円筒埴輪	茶灰色土	タガ及びタガ接合部分ヨコナデ。その他磨減はげしく不明。	タガは断面台形。タガ端部は、ナデによる凹み。	土師質 長石・石英・雲母・くさり礫含む
23	円筒埴輪	黄灰色土	磨減はげしく不明。	タガは断面比較的高い台形。	土師質 石英・くさり礫含む
24	円筒埴輪	茶灰色土	体部外面ヨコナデの後ヨコハケ、タガ及びタガ接合部分ヨコナデ、体部内面ナデ。	タガは断面台形。	土師質 長石・石英含む
25	円筒埴輪	茶灰色土下層	体部外面ヨコハケ、内面はナデ。	タガは断面低い台形	土師質 長石・石英含む

3 平安時代中期～江戸時代の遺物

先にも述べたように今回の調査で6時期5層にわたる水田遺構が検出された。下層から灰色粘土下層、灰色粘土層、茶灰色土下層、茶灰色土層、黄灰色土層であり、それぞれ遺物を含んでいる。

これらの包含層から出土した遺物は、器形別に見ると、土師器、瓦器、黒色土器、須恵質土器、陶器、磁器、瓦類、土製品、鉄製品等である。更に、若干の弥生土器と大量の須恵器が含まれていたが、これらの土器についてはそれぞれの時代の項で説明している。

従って、この項では弥生土器、須恵器以外の遺物について述べることにする。

以下、各包含層毎に出土土器の様相を下層から順に見ることとし、その他の遺物については、各層まとめて述べたい。

灰色粘土下層〔図版52〕

5層の包含層中、遺物の出土量は、最も少なく約100個体程度であり、すべて小片のため図化できるものは少ない。器種別に見ると、土師器、黒色土器、瓦器、須恵質土器、磁器がある。

土師器 皿、椀、土釜、甕がある。皿が最も多く34個体で土師器全体の約60%以上を占めている。椀は、3点あってすべて高台付の底部片である。土釜は胴部分・口縁部あわせて2点、甕は体部片・口縁部片あわせて4点ある。

黒色土器 椀が2個体ある。共に内面黒色、外面赤褐色の、いわゆる“内黒”のものである。

瓦器 皿と椀がある。皿が23個体、椀が25個体である。椀は大半が底部片で若干時期差はあるものの高台の形態から13世紀中頃のものと思われる。

須恵質土器 鉢の口縁部片が2点ある。共に玉縁状に肥厚した口縁部を持つものである。1点には、片口の一部が見られる。東播系のものと考えられる。

磁器 青磁椀が1点ある。やや丸味を持つ体部で、口縁部は外反させている。釉色は淡黄緑色を呈し、小型の椀であろう。

以上のことから灰色粘土下層の時期を決定するには、やや不安が残るが、瓦器椀から見れば、13世紀中葉以前と言ってさしつかえないと思われる。ただ黒色土器だけは、10世紀後半に上るものであり、灰色粘土下層を耕土とする水田は2面重複して検出されていることから、古い水田は10世紀代にさかのぼる可能性はある。

灰色粘土層〔第58図；図版52～54〕

この包含層は、灰色粘土下層に比べると急激に土器の包含量を増している。土器総量約1600点以上ある。器種別に見ると、土師器、瓦器、黒色土器、須恵質土器、磁器がある。このうち土師器と瓦器によって土器量全体の約94%を占めている。次いで、須恵質土器、黒色土器、磁器の順である。

土師器 約 800 点で土器量全体の約50%を占める。器形としては、皿（466～468）、椀、甕、土釜がある。土師器中では皿の量が圧倒的に多く、約80%以上を占める。その他の器形については、椀が8%程度、甕が約4%、土釜が1%である。

瓦器 皿（441～448）、椀（449～463）がある。数量的には、共に約半分程度である。椀には小型のものが数点見られる。瓦器全体として若干時期差は認められるが、概ね14世紀中葉以

第10表 平安時代中期～江戸時代の遺物集計表

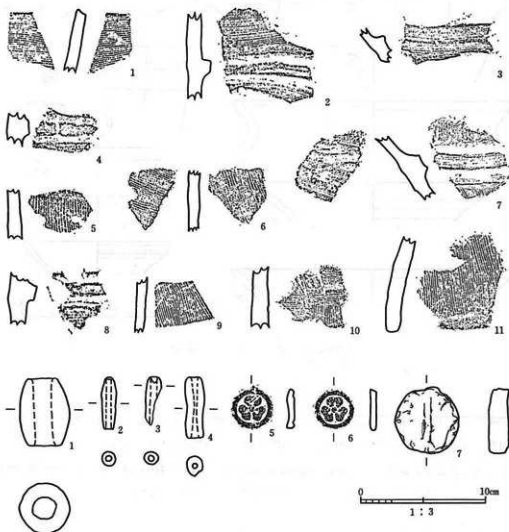
器形	層位	灰色粘土下層		灰色粘土層		茶灰色土下層		茶灰色土層		黄灰色土層	
		個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%	個体数	%
土 師 器	甕(口縁部)	2	3.4	32	4.0	135	5.1	61	3.3	39	3.8
	土釜(口縁部)	1	1.7	8	1.0	23	0.9	16	0.9	13	1.3
	杯	14	23.7	35	4.4	103	3.9	47	2.5	31	3.0
	高 杯	1	1.7	2	0.2	8	0.3	17	0.9	2	0.2
	皿	34	57.6	646	80.6	2,043	77.4	1,478	79.1	840	81.6
	椀	3	5.1	64	8.0	187	7.1	127	6.8	42	4.1
	製塩土器	0	—	1	0.1	6	0.2	0	—	2	0.2
その 他	4	6.8	14	1.7	133	5.0	123	6.6	60	5.8	
小 計(B)	59	52.7	802	48.4	2,638	34.1	1,869	35.6	1,029	54.0	
瓦 器	甕(口縁部)	0	—	0	—	14	0.3	21	0.7	33	5.3
	土釜(口縁部)	0	—	5	0.7	5	0.1	34	1.1	35	5.6
	皿	23	47.9	396	52.3	2,296	48.3	1,436	45.6	237	38.1
	椀	25	52.1	353	46.6	2,365	49.7	1,566	49.7	240	38.6
	鉢	0	—	0	—	4	0.1	4	0.1	0	—
	その 他	0	—	3	0.4	72	1.5	90	2.9	77	12.4
小 計(B)	48	42.9	757	45.7	4,756	61.4	3,151	60.0	622	32.6	
黒土 色器	椀	2	100.0	50	98.0	193	100.0	59	100.0	16	100.0
	その 他	0	—	1	2.0	0	—	0	—	0	—
	小 計(B)	2	1.8	51	3.1	193	2.5	59	1.1	16	0.8
須恵 器	鉢	2	100.0	30	88.2	94	100.0	114	100.0	74	100.0
	その 他(B)	0	—	4	11.8	0	—	0	—	0	—
	小 計(B)	2	1.8	34	2.1	94	1.2	114	2.2	74	3.9
陶 器	甕(口縁部)	0	—	0	—	23	67.6	17	47.2	60	69.0
	壺(口縁部)	0	—	0	—	1	2.9	0	—	1	1.1
	鉢	0	—	0	—	3	8.8	6	16.7	9	10.3
	椀	0	—	0	—	0	—	0	—	6	6.9
	皿	0	—	0	—	0	—	0	—	3	3.4
	その 他	0	—	0	—	7	20.6	13	36.1	8	9.2
	小 計(B)	0	—	0	—	34	0.4	36	0.7	87	4.6
磁 器	椀	1	100.0	13	92.9	25	96.2	23	95.8	77	97.5
	皿	0	—	0	—	1	3.8	1	4.2	0	—
	その 他	0	—	1	7.1	0	—	0	—	2	2.5
	小 計(B)	1	0.8	14	0.8	26	0.3	24	0.5	79	4.1
総 計		112		1,658		7,741		5,253		1,907	

小計(B)の%は各層の総計に対する割合

前のもと考えられる。他に土釜が5点みられるが、混入品の可能性がある。

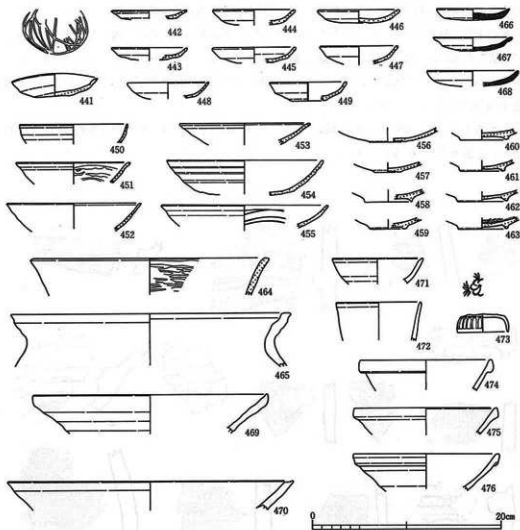
黒色土器 51点出土したが、そのうち50点は椀である。椀は内面のみが黒色を呈するいわゆる“内黒”のものばかりである。他に鉢(464)が1点ある。口縁部片のため全体のプロポーシヨンは、不明である。内面には密にヘラミガキが施されている。内外面とも黒色を呈している。黒色土器の出土量は、土器総量の3%程度である。

須恵質土器 鉢(469)と甕(465)がある。鉢が30点、甕が4点全て東播系の製品と考えられる。土器量全体の約2%である。



上段 1~11 埴輪
下段 1~4 土釜 5・6 どろめんこ 7 円板状土製品

第57図 埴輪・土製品



第58図 灰色粘土層出土遺物

磁器 椀（471、472、474～476）と香炉の蓋（473）がある。椀は、13点あるが青磁は（471）1点である。他は白磁である。（472）は、直線的に立ち上がるもので釉色はあまりに
 ごりのない白色を呈している。あまり類例を知らない。（474～476）は玉縁状の口縁部を持つ
 ものである。（473）は、淡青緑色を呈し天井部外面に花文が見られる。

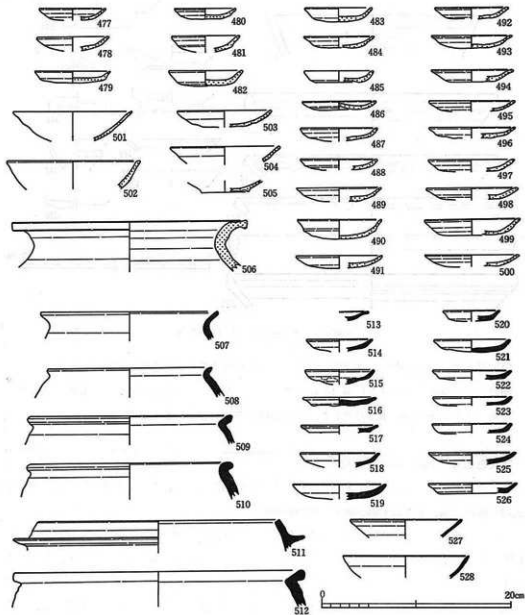
茶灰色土下層〔第59・60図；図版55～58〕

最も土器量の多い水田耕作土層である。約7700点を数える。器種としては、土師器、瓦器、黒
 色土器、須恵質土器、陶器、磁器がある。

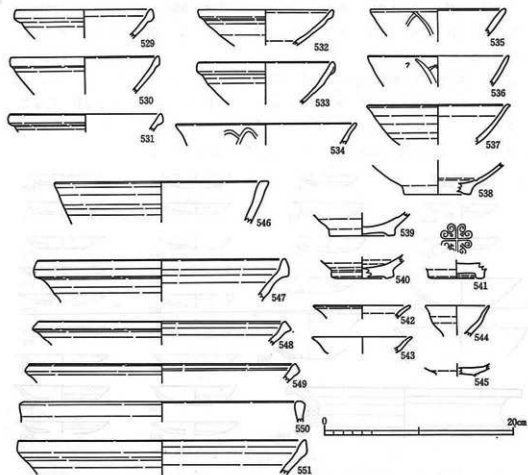
土器 土器量全体の約34%を占める。そのうち皿（513～526）が圧倒的に多く約2000点、土器量全体の70%を超えている。次いで、椀（527、528）、甕（507）、土釜（508～512）の順にある。

瓦器 土器量全体の約61%を占める。皿と椀があるが、互いの比率はほぼ同一と言える。今まで見られなかった器種として甕（506）、鉢が出現する。量的には少なく、瓦器全体の約0.5%程度である。

黒色土器 土器量全体の2.5%にあたる。“内黒”の椀のみである。



第59図 茶灰色土下層出土遺物



第60図 茶灰色土下層出土遺物

須恵質土器 土器量全体の 1.2%、94点ある。全て東播系の鉢（547～551）である。

陶器 土器量全体から見ると 0.4%程度であるが、器形としては甕・壺、鉢（546）がある。

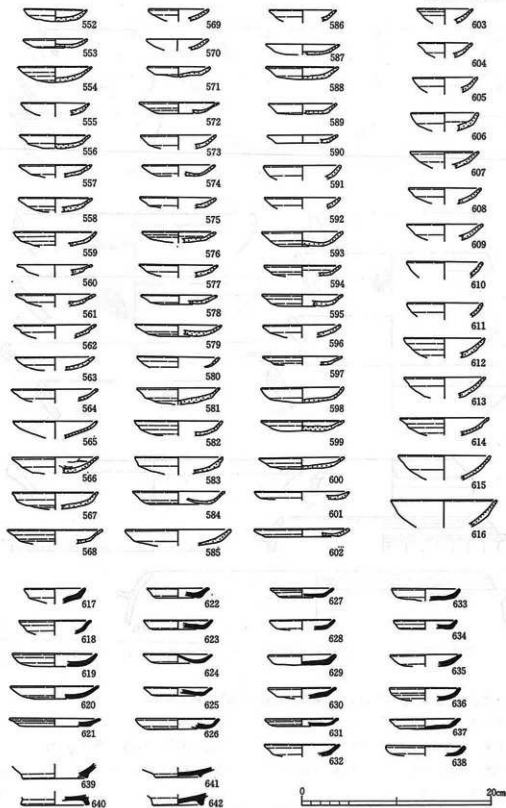
磁器 土器量全体の約 0.3%である。白磁の碗、青磁の碗・皿がある。

茶灰色土層〔第61～63図；図版58～61〕

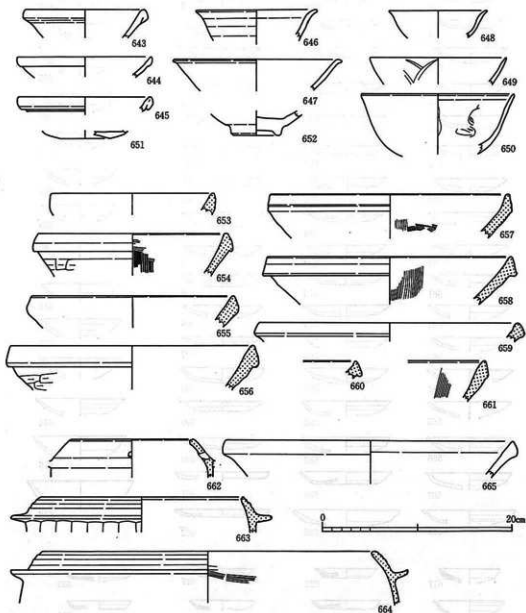
茶灰色土下層に次いで土器を多く含んでいる。約5200点以上を数える。器種としては、土師器、瓦器、黒色土器、須恵質土器、陶器、磁器がある。

土師器 土器量全体の約35%を占める。器形としては、皿、碗、壺、土釜等がある。皿は、約1500点あり、土師器全体の約80%以上を占めている。次いで碗が約7%、壺が3%強、土釜が1%未満である。

瓦器 土器量全体の60%を占める。瓦器全体として皿、碗の比率はほぼ同一である。壺、土釜、鉢が瓦器全体の 1.9%と茶灰色土下層に比して増加の傾向をみせている。



第61図 茶灰色土層出土遺物



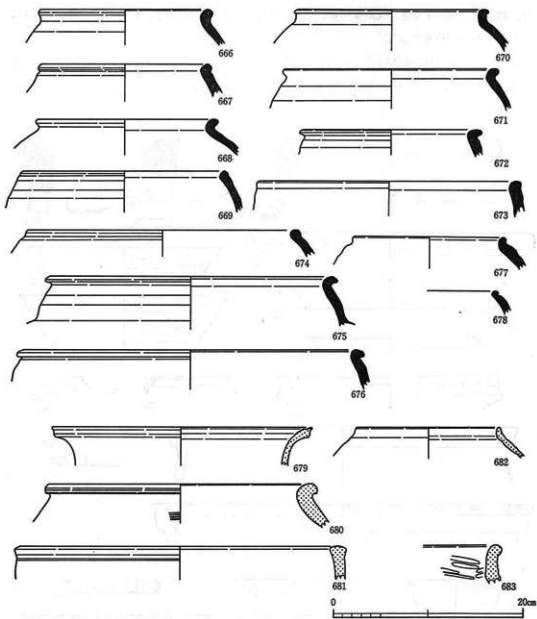
第62図 茶灰色土層出土遺物

黒色土器 土器量全体の約1%である。全て“内黒”の碗である。

須恵質土器 土器量全体の約2%強である。全て東播系の鉢である。

陶器 土器量全体としては1%にも満たないが、鉢と甕があり、鉢は備前系のものである。

磁器 土器量全体としては1%にも満たない、碗と皿があり、碗は、青磁、白磁がある。皿は、青磁で1点である。



第63図 茶灰色土層出土遺物

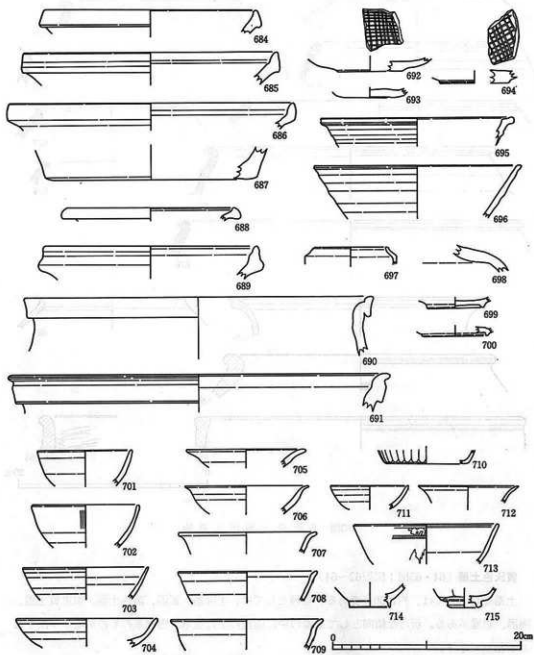
黄灰色土層〔64・65図；図版62～64〕

土器総量としては、約1900点である。器種としては、土師器、瓦器、黒色土器、須恵質土器、陶器、磁器がある。新たな傾向として磁器の中に国産の伊万里系、唐津系のものが混じり出すことが指摘できる。

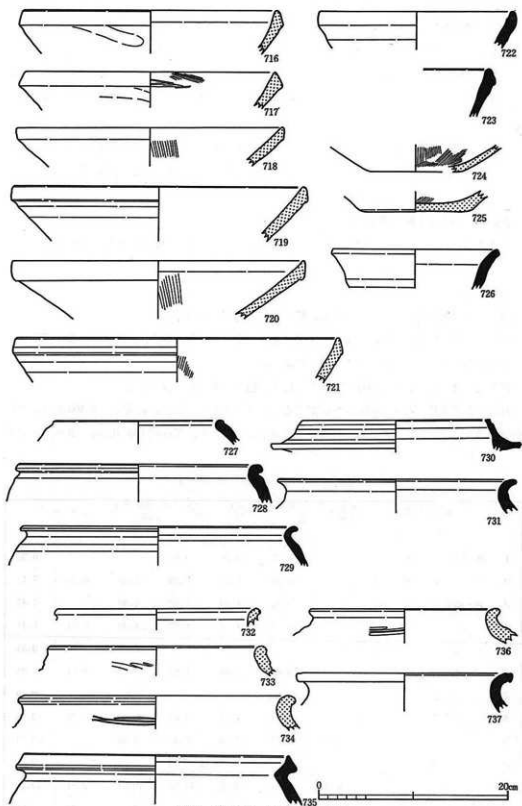
土師器 土器量全体の約54%を占める。器形的にはやはり皿が圧倒的に多く約82%を占めてい

る。次いで、椀が4名強、甕が4名弱、土釜が1名強である。又、銅、鉢等の器形が新たに追加され、これらが約6%ある。

瓦器 土器量全体の約33%を占める。椀と皿の比率は約38%ずつである。甕、土釜の比率は瓦器全体の10%をこえている。



第64図 黄灰色土層出土遺物



第65図 黄灰色土層出土遺物

黒色土器 土器量全体の1%に満たない。すべて“内黒”の椀である。

須恵質土器 土器量全体の3.9%である。すべて東播系の鉢と思われる。

陶器 土器量全体の約5%である。甕、壺、鉢、椀、皿がある。甕は常滑系のもが多く、壺、椀、皿は瀬戸系のものである。特に皿は瀬戸特有のおろし皿である。鉢は備前系と瀬戸系のものである。

磁器 土器量全体の4%強である。他の包含層は全て1%未満であったのに対し、非常に増加しているといえる。これは、伊万里系、唐津系の国産磁器が見られるためであろう。

土製品〔第57図；図版66；第11表〕

ここで土製品としてとりあげるものとして瓦類、土鍾、どろめんこ、円板状土製品がある。

瓦類

出土した瓦類を大別すると、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦がある。

軒丸瓦 4点ある。文様は、全て三巴文である。そのうち8、9は、三巴文の周囲に連珠がめぐっているのがわかる。共に外縁は平坦で幅広い。

軒平瓦 2点ある。共に連珠文である。12は、連珠文を囲む界線がある。

丸瓦 全て小片のために個体数を確認することはできない。丸瓦総重量は、9.9kgあり、これを包含層別で下層から見ると、灰色粘土下層出土しておらず、灰色粘土層 0.9kg（9%）、茶灰

第11表 層別平瓦重量表

類	平瓦成形技法		灰色粘土 下層	灰色粘土 層	茶灰色土 下層	茶灰色土 層	黄灰色土 層	その他	合計
	凸	凹							kg
1	格子叩き	布目	—	0.11	0.10	0.10	—	—	0.31
2	縄叩き	布目		0.70	1.40	0.76	2.08	0.20	5.14
3	砂・縄叩き	布目		0.32	1.19	1.62	1.30		4.43
4	砂	布目		0.12	1.20	1.87	1.98	0.24	5.41
5	布目	布目					0.34		0.34
6	叩きすり消	布目		0.03	1.53	2.07	0.27	0.14	4.04
7	縄叩き	砂		0.20					0.20
8	砂・縄叩き	砂		0.05	1.56	1.03	0.33	0.26	3.23
9	砂	砂	0.02	1.68	7.00	9.40	4.34		22.44
10	叩きすり消	砂				0.15			0.15
合計 (kg)			0.02	3.21	13.98	17.00	10.64	0.84	45.69
各層重量/ 総重量×100 (%)			0.04	7.03	30.60	37.21	23.29	1.84	100

色土下層1.65kg (17%)、茶灰色土層2.57kg (26%)、黄灰色土層4.78kg (48%)と上層ほど増加する傾向にある。

平瓦 瓦類の中で圧倒的多数を占めているが、丸瓦と同様全て小片であるために個体数を確認することは不可能なために、重量を計算した結果総重量45.69kgある。出土した平瓦を見ると凹・凸面の成形技法にバラエティーがあり、10類に分類することができる。包含層別の出土量を下層から順に見ると灰色粘土下層0.02kg (0.04%)、灰色粘土層3.21kg (7.03%)、茶灰色土下層13.98kg (30.60%)、茶灰色土層17.00kg (37.21%)、黄灰色土層10.64kg (23.29%)、その他0.84kg (1.84%)となり、茶灰色土下層以降急増し茶灰色土層が最も多く黄灰色土層で減少している。すなわち15世紀以降の水田層に圧倒的に多く含まれていることになるが、前回の調査においても段丘上に15世紀以降の建物に關係する遺構は検出されておらず、検出遺構から「畑地」化したと想定されており、これらの瓦が段丘上から流入したのではないことを表わしている。おそらく植翰の出土状況と同様茶灰色土下層以降の水田が客土により造成されたもので、その客土となる土が瓦を含む包含層であったと考えられる。

土鍾・どろめんこ・円板状土製品

土鍾1は、長さ5.4cm、最大径4.0cmと瓦質の大型品である。土鍾2、3、4は長さはさほど1とかわらないが最大径が1.2~1.4cmと細く土師質である。

どろめんこは2個出土したが共に直径3.2cm、厚さ4mm、表面に柄の紋が見られる。

円板状土製品は、2点出土した。平面を円形に成形したもので直径約5cmで側面には擦ったような跡がある。

これらの土製品はすべて黄灰色土層から出土したものである。

鉄製品〔図版67〕

釘、スプーン状鉄製品、鉄滓がある。釘は黄灰色土層から出土したものばかりで4本あり、1、2、4は角釘である。3に長さは他のものとあまりかわらないが厚みはあまりなく扁平である。スプーン状鉄製品は、長さ3.7cm、前部の円形部分は直径2cmである。用途は不明である。釘、スプーン状鉄製品は黄灰色土層から出土したものである。

鉄滓は、すべて5cm~10cm程度の大きさであるが、茶灰色土下層から16,150g、茶灰色土層から19,380g、黄灰色土層から4,045g合計39,575gとかなり出土している。出土状況は、全くまとりなく散乱している。前回の調査の際、当調査の東部の近接地で小鍛冶状の遺構(SX3、SX4)が検出されていることから、今回の調査で出土した大量の鉄滓もこれらの遺構と関係していると思われる。(橋本)

4 古墳時代～江戸時代の遺構と遺物の吟味

(1) 水田跡の変遷と三つの画期

以上、水田跡と遺物について個別的に記述してきたが、次にこれらの水田跡と遺物を、水田跡の変遷という観点から整理し吟味してみよう。

水田跡の年代

各水田跡の年代は、水田の耕土ないし覆土内の遺物からおさえられる。それから導かれる各層のおよその年代は、次のとおりである。黄灰色土層：17～18世紀、茶灰色土層：16世紀前後、茶灰色土下層：15世紀前後、灰色粘土層：14世紀中葉以前、灰色粘土下層：13世紀中葉以前・10世紀後半以後。

水田各層と水田遺構面との層位的関係については、本節3で述べたが、それから各水田遺構面の時代を推定すると、おおづかみには、黄灰色土層上面の第五次水田遺構面＝江戸時代、茶灰色土層上面の第四次水田遺構面＝安土桃山時代、茶灰色土下層上面の第三次水田遺構面＝室町時代後半（戦国時代）、灰色粘土層上面の第二次水田遺構面＝室町時代前半（南北朝時代）となる。そして灰色粘土層と部分的には灰色粘土下層に覆われた第一次水田遺構面は、平安時代後期～鎌倉時代ということになるが、この遺構面は、二時期の水田の重複であるから、上位の水田を鎌倉時代、下位水田を平安時代後期と考えたい。

以上のように、西浦橋遺跡の水田は、年代的に10世紀後半から18世紀前後に至るまで、中断されることなく継続して経営されていったと見られる。

水田土壌の変遷

水田は、その土壌の生成要因の違いによって、表面水型グライ性水稲土（乾田）、地下水型グライ性水稲土（湛水田、湿田）および両者の中間の中間型グライ性水稲土（半湿田、半乾田）に分類されている。それぞれの水田は、その耕作土に特有の下層土を持ち、したがって下層土によって水田の分類が可能である。本遺跡の各水田についてもその下層土を観察したので、その状態から各水田の水田土壌を分類し、その変遷について検討しよう。

まず、埋没した水田の下層土からでもその水田土壌の分類が可能であることの根拠から述べよう。

水田土壌中には酸化第二鉄やマンガンが存在しているが、これらが湛水によって、酸化第一鉄や二価マンガンに変わり、水に溶解し易くなる。これらの物質は、水の下降運動によって溶脱し、長年の間に水田下層に集積して集積層を形成する。この集積層の鉄分、マンガン分が、水田の地下水の作用との関係において、いろいろな存在形態を取る。

地下水位が高い湛水田や湿田では、水田下層土の鉄分は還元状態に置かれて酸化第一鉄となり、土は青灰色を呈する。すなわちグライ層である。しかし、イネなどの根のまわりでは、根の呼吸作用によって鉄分が酸化され、暈管状斑紋が形成される。この暈管状斑紋とは、低湿地での発掘の際、青灰色の粘土面でイネなどの根の跡である微孔のまわりが褐色に変色した微斑点である。この暈管状斑紋が群在すると、土壌が全体に褐色を呈する。

地下水位が低くなり乾田化するにつれ、下層土に集積した鉄分は、落水期に土壌中に入った空気によって酸化されて、点状斑鉄、管状斑鉄、結核状斑鉄、マンガン斑などが形成される。これらの斑紋は、半湿田あるいは乾田において認められ、水田経営の継続とともに発達していく。だから水田土壌は、その下層土の状態、特に斑紋の形態によって分類することができる。

さて、考古学的には、埋没し長年月を経た水田遺構が、果たして経営当時の水田土壌状態を保っているかという問題がある。確かに水田土壌を規定する地下水位は時と共に変動し、かならずしも水田経営時の状態を留めない。しかし、いったん水田下層に斑鉄などの化合物が形成されると、それは水田の埋没や地下水位の変動にもかかわらず、当時の状態で化石的に保存される。そこで、斑鉄などの存在形態によって、埋没時の水田土壌の判断が可能になるのである。

例えば、下層土に暈管状斑紋が認められる水田は湿田と考えられる。また、下層土にマンガン斑や斑鉄などが存在した場合は、乾田化した水田であり、さらに斑紋が発達し、下層土全体が褐色の酸化鉄集積層となって硬くなった場合が典型的な乾田と考えられる。

以上の観点から、各水田遺構の水田土壌について観察し、その水田土壌を判断すると、第一次～第二次水田遺構は粘土層をベースとして、その下層土は斑鉄やマンガン斑を欠いて暈管状斑紋が形成されているから、その水田土壌は半湿田ないし湿田と判断される。これに対し、第三次～第五次水田遺構の下層土は、いずれも酸化鉄の集積層とマンガン斑が発達しており、乾田と判断される。かくして、本調査区の水田跡の水田土壌は、第二次水田遺構面と第三次水田遺構面とを境に湿田から乾田に大きく変化したことが指摘できる。

地割りの変遷〔第66図〕

5面6時期の水田跡を地割り形態から分類すると、大きく2類に分けられる。第一次水田遺構面下位水田の小区画地割りと、第一次水田遺構面上位水田から現水田に至る長地型地割りである。この二つの水田地割りは、一枚の水田が小区画と長地型という点で異なり、また東西方向の畦畔がずれているという点でも違いがある。しかし、両者は全く断絶した地割りではない。小区画水田は、基本的に長地型を細分した形態であり、その東西方向の畦畔も上層の長地型水田の東西方向の畦畔と方位が一致し、しかも長地型水田一枚の一辺(約11m)のおよそ半分の距離を以て平行にずれている。また、南北畦畔にもほぼ踏襲されているものがある。

このように長地型水田は、小区画水田地割りを一部で踏襲しつつ成立したものであるが、その形成は一挙にはなく、徐々に行われたようである。たとえば、第一次水田遺構面上位水田の三

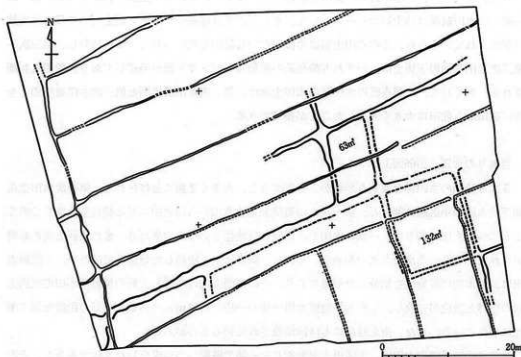
ノ坪には、一枚の長地型水田を分割する畦畔が検出されており、小区画の名残りが窺える。

水田の変遷と三つの面期

各水田遺構の年代、水田土壌、地割り形態の変遷について整理した。以上をまとめると、本調査区における平安時代後期から現在に至る水田は、水田土壌においては湿田から乾田へ、地割り形態においては小区画水田から長地型地割りへと変遷している。この変遷を類型化すれば、平安後期の小区画・湿田→鎌倉～室町前半の長地型・湿田→室町後半～現在の長地型・乾田という過程である。してみると、西浦橋遺跡の水田の歴史には、平安時代後期における小区画水田の出現、鎌倉時代における小区画から長地型への地割り形態の変化、そして室町時代後半における湿田から乾田への変化という三つの面期が存在したことになる。

(2) 地割り形態変遷の吟味

さて、発掘した一連の水田跡を整理して、西浦橋遺跡の本調査区における水田の歴史には、三つの面期が存在したことを指摘したが、次のこの三つの面期の意味について吟味したい。



第66図 小区画水田（太線）と長地型水田（細線）の比較

小区画水田の出現（日下部郷条里の起源）

西浦橋遺跡本調査区における水田の歴史を、平安後期の小区画水田の出現から説き起こしたのであるが、この遺跡の周辺の水田開発は弥生時代に遡る。先に行われた松原泉大津線の発掘調査では、西浦橋遺跡では、すでに弥生時代において、河川を全面的に堰止めた大規模な「杭列群」が構築されており、これを水源として本遺跡付近で水田開発が行われたと考えられる。また、菱木下遺跡では、弥生時代集落の存在が確認され、本遺跡でも古墳時代の集落が発掘されている。したがって、西浦橋遺跡周辺では弥生時代から古墳時代におよんで水田が存在していたことは疑えないが、それでも平安時代後期に小区画水田が出現したことは、水田史のうえで大きな画期だと考える。というのは、この小区画水田が、現地表面に残る日下部郷の条里制地割りの直接的な初源形態と考えられるからである。

平安時代後期の小区画水田が、現条里の初源形態であることは、小区画水田の地割りが一部で現条里に踏襲されていることでわかるが、同様に現条里と坪境を具にした条里水田が、東大阪市友井東遺跡でも確認されている。そこでは、鎌倉時代以後の条里畦畔は現在の条里と一致しているが、奈良～鎌倉時代の条里坪境は、東西畦畔は現在の条里と一致するものの、南北畦畔が東に17mずれている^{註4}。

また長地型水田を細分した小区画水田という点では、同様な地割りの水田が、群馬県の大八木遺跡、日高遺跡の平安末期の条里制水田でも確認されている。都出比呂志氏は、これらの水田を、B類型水田（小区画水田）の第三の型として分類し、その特徴を「条里制地割りによって大区画が規定されており、条里の一坪の内部が小区画に細分されるもの^{註5}」^{註6}ととらえている。本遺跡第一遺構面下位の小区画水田もこの類型に属する。

このように、本遺跡平安時代後期の小区画水田が、現地表面に残る条里制地割りの初源形態とすることは、他の鎌倉時代以前の水田調査例に照らしても、妥当だと考えるのである。

しからは、日下部郷条里の施行時期との関係において、小区画水田の出現時期が改めて問題となる。本調査区では、小区画水田の時期を灰色粘土下層の出土遺物から平安時代後期ととらえたが、先に調査されたⅡ工区の調査結果を見ても、奈良時代にまで遡ることはない。Ⅱ工区の調査では、沖積低地面における平安時代以降の水田跡の検出作業が省かれているが、層の堆積状況、地形からみて、本調査区で検出した平安後期から江戸時代の水田がⅡ工区にも及んでいたのは間違いない。しかし、Ⅱ工区の沖積低地面には、古墳時代～奈良時代に小区画水田などと方向を異にした溝や大きな自然凹地（SDA2）などが存在しており、小区画水田の造成も、これらの溝や自然凹地などが存在していた奈良時代に遡ることはないのである。

小区画から長地型への地割り変化

小区画水田も基本的には長地型の大耕区を細分割したものであるから、小区画と長地型との地割り上の違いは、現象的には、一枚の長地型水田を細分割する畦畔の有無であるが、しかし、こ

のことは必ずしも長地型の水田が細分されていなかったことを意味するものではない。

本調査区の水田は、現在の水田も、検出された水田も、いずれも北あるいは西に緩やかに傾斜している。このような微傾斜地でも長地型の水田地割りを行えば、一枚の水田を細分割することなく全面に水を張ることは不可能で、段差をつけた何枚かの水田に細分割せざるを得ない。ちなみに、現在の長地型水田では、一時的に横板を杭で止めるなどした仮設畦畔で以て細分割し、それぞれに灌水して水稲栽培を行っている。そして水稲収穫後は仮設畦畔を取り払い、再び一枚の長地型水田に戻して耕耘機で代掻きをしているのである。

このような長地型水田の細分割は、発掘された長地型水田の経営においても必要であって、その痕跡が杭跡だと考える。91頁第47図では、第四次水田遺構面における杭跡と水田面の傾斜との関係を示してあるが、杭跡は一枚の長地型水田の傾斜転換部分の高位側に集中しており、杭跡の多くが仮設畦畔に伴ったものと考えられる。このことから、長地型水田でも小区画水田のように、水田経営の過程においては長地型水田の細分割が行われていたが、しかし、その細分割畦畔は、小区画水田のような常設畦畔ではなく、必要に応じて取り払える仮設畦畔であったことが窺えるのである。つまり、小区画水田と長地型水田との違いは、一枚の長地型水田を細分割する畦畔の有無ではなく、常設畦畔か仮設的畦畔かの違いだと考えるのである。

そこで、長地型水田において仮設畦畔を設ける意味を、現在の水田経営の在り方から推定すれば、水稲栽培の過程で設定した畦畔を、水稲収穫後は取り払い一枚の長地型水田とする水田経営上の必要性があったのではないかと考えられる。そうであれば、小区画水田から長地型水田への変化は、小区画された水田で終始した経営から、水田経営の過程で細分割畦畔を取り払って一枚の長地型水田にする必要性のある経営への変化だと言える。こうした水田経営上の変化が、小区画水田から長地型水田への地割り形態の変化の大きな要因であろう。この経営上の変化と関係すると思われるものに、牛足跡に示される牛耕の展開がある。

牛足跡は、すでに小区画水田面において無数に検出され、しかも足跡の方向が畦畔に沿っており(図版18)、牛利用による犂耕が行われていたことを示している。しかし、犂耕は、犂の転運に難渋するものであるから、それが小区画水田に導入されると、水田が常設畦畔で小区画に細分割されていることが効率的な作業の障害となり、すくなくとも水田耕起段階においては細分畦畔を撤去する必要が生ずる。そこに、小区画水田から長地型水田への地割り形態の変化の物理的要因があったと考えられないであろうか。^{註7}

(3) 湿田から乾田への変化

湿田から乾田への変化は、水田造成面の土壌が粘土質から混礫シルト質への急激な転換と対応している。湿田である第一次および第二次水田遺構面のベース土壌は、黄色粘土層ないし灰色粘土層の粘土質土壌であるが、乾田となった第三次および第四次水田遺構面のベース土壌は茶灰色

土下層および茶灰色土層の混雑シルトである。茶灰色土下層と茶灰色土層は同質の土壌であるが、第三次水田遺構面を境に上層と下層に区分される。これらの層については、発掘時点において、埋立による整地層と看取された。つまり、湿田から乾田への変化は、茶灰色土下層、茶灰色土層などの水はけの良い混雑シルトを客土するという土壌改良の結果ではないかと思われたのである。

そこで、これらの層が客土か否か、客土とすればどこから搬入されたものであるかを、水田層出土遺物の主体を占めた須恵器を中心とした遺物の分析と、周辺遺跡との比較を通して追及し、西浦橋遺跡の水田跡の乾田化の背景について考えてみることにしよう。

水田層出土須恵器による吟味

西浦橋遺跡の水田跡は平安時代後期以降のものであるから、水田層出土の須恵器は、二次的に堆積したことが明らかであるが、その堆積が客土によるものではないとすれば、その堆積過程としては、ひとまず次の2つの経過が想定される。

1：もともとこの一帯に古墳時代～平安時代前期の遺構、あるいはそれに伴う遺物包含層があって、これが後の水田造成工事によって破壊されて水田耕土となり、耕作の継続とともに須恵器などの遺物が漸次上層へ攪乱浮上していった。

2：本調査区の各水田跡に接して、東側段丘斜面には古墳時代後期～奈良時代の西浦橋集落（西浦橋遺跡Ⅰ工区）があるから、そこから徐々に下方の水田に転落・流入し堆積していった。

上記2点のいずれの過程で須恵器群が水田層に混入するに至ったか、それともこれとは別の過程を考えるべきかについて、次の方法で杯を分析し、資料を折出することにした。まず、水田各層は5層に細分されるが、各層ごとに須恵器の包含密度を求め、特に杯についてはその時期別構成をとらえ、これを各層間で比較し、あるいは西浦橋集落の时期的盛衰と比較してみた。その理由は、水田層の須恵器群が西浦橋集落からの流入であれば、その時期別構成は西浦橋集落遺跡の时期的盛衰と対応するであろうし、また、水田層の須恵器群が、水田耕作によって下層の遺物が順次攪乱・浮上してきたものであれば、遺物包含密度は下層から上層に向かって漸減し、また、各層の時期別構成も類似すると考えられるからである。

水田層は、下から順に灰色粘土下層、灰色粘土層、茶灰色土下層、茶灰色土層、黄灰色土層の5枚に分かれる。これら各層の出土遺物点数と土量を示したものが97頁の第7表である。須恵器出土点数の多い順に列挙すると、茶灰色土下層—灰色粘土層—茶灰色土層—黄灰色土層—灰色粘土下層となる。ところがこの順位は、各層の土量の多少と対応しない。つまり各層の須恵器包含密度が異なっているのである。

そこで、出土遺物点数を

第12表 水田各層の遺物包含密度（遺物点数/土量）

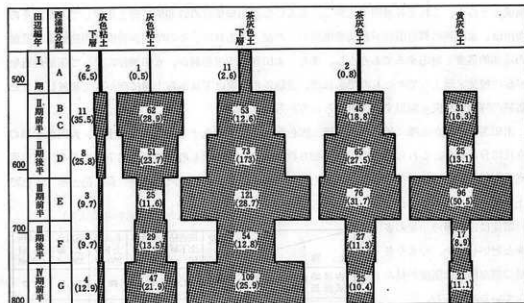
遺物	層位				
	灰色粘土下層 50 m ²	灰色粘土層 260 m ²	茶灰色土下層 200 m ²	茶灰色土層 330 m ²	黄灰色土層 450 m ²
古墳時代～平安時代前期 須恵器・埴輪・子持勾玉	13.5	15.9	68.8	24.7	11.5
平安時代後期～江戸時代 土師器・黒色土器・瓦器・陶磁器	2.5	6.5	38.5	15.8	4.3

土量で割り、水田各層の遺物包含密度を求めたのが第12表である。この表によると、須恵器包含密度は、茶灰色土下層が飛び抜けて高いが、その下層の灰色粘土層と灰色粘土下層はかなり低い。この水田層中位の茶灰色土下層の須恵器包含密度の高さは、すくなくともこの層の須恵器が、水田耕作によって下層の灰色粘土下層や灰色粘土層から攪乱・浮上してきたものではないことを示唆している。

水田各層の杯型式構成

さて、水田層の須恵器が、最初に仮定したように、もともとこの地区に存在していた遺構あるいは包含層が水田造成によって破壊され、これが水田耕作とともに攪乱・浮上してきたものであれば、水田各層の杯型式構成は類似するであろう。また、各層の須恵器が、隣接した古墳～奈良時代の西浦橋集落から転落・流入したものであれば、各層とも杯型式構成が西浦橋集落の盛衰と対応するはずである。この点について検討してみよう。

本節2で分類した杯のうち、型式が細分できた蓋について、第7表から各層の型式別出土量をグラフ化したものが第67図である。この図から次のことが指摘できる。すなわち灰色粘土下層と灰色粘土層の型式構成がよく一致しているのに対し、これら下位層グループと茶灰色土下層以上の上位層グループの型式構成は全く異なっていること、そして、上位層グループの中でも、各層それぞれ杯型式構成に差異が認められることである。



第67図 水田各層における須恵器杯蓋の時期別出土量 (数字は点数、()内は%)

これは、左に指摘した遺物包含密度の差とともに、茶灰色土下層の遺物は、灰色粘土下層あるいは灰色粘土層からの耕作に伴う攪乱・浮上ではなく、それとは別の混入過程を考える必要があることを意味している。また、茶灰色土下層と茶灰色土層、茶灰色土層と黄灰色土層との間の関係も同様である。

西浦橋集落との比較

では水田各層の須恵器の出所はどこか。そしていかなる経過で水田層に混入するに至ったのであろうか。まず位置的にみて混入源の第一候補地である西浦橋集落と比較してみよう。

本遺跡Ⅱ工区の西浦橋集落は本調査区に先だって、当大阪文化財センターが、芝野圭之助技師と橋本高明技師を担当者として発掘調査を行い、西浦橋遺跡（その1）として報告されている^{註8}。その調査結果によると、西浦橋集落遺跡は、次のような盛衰を経たとされている。

- 5世紀前半——集落出現以前。何らかの祭祀遺構が存在していた可能性がある。
- 5世紀後半～6世紀後半——竪穴住居集落が存在（途中一時的に集落中絶）。この時期の須恵器出土量が最も多い。
- 7世紀前半～同後半——集落は廃絶し遺構も殆ど存在しない。
- 7世紀後半～8世紀前半——集落はないが溝などの遺構があり、遺物も出土する。
- 8世紀後半～9世紀——掘立柱倉庫が1棟あるが、他には遺構は存在しない。

以上の西浦橋集落の盛衰と第67図の水田各層出土須恵器の消長とを対比すると、水田下位層グループの灰色粘土下層と灰色粘土層の須恵器は、6世紀前半～6世紀後半に最も多く、7世紀～8世紀前半には減少し、そして8世紀後半～9世紀前半に再び増加しており、西浦橋集落遺跡の展開とはほぼ対応しているのである。したがって、水田下位層グループの須恵器は、西浦橋集落遺跡に由来するものだと考える。

そして、これらの層の須恵器包含密度の低さから見て、これらの須恵器は、最初の水田造成の際に西浦橋集落の包含層を搬入・客土したのではなく、西浦橋集落存在時に本調査区まで分布していた遺物包含層が、その後の水田造成と耕作によって攪乱・浮上してきたものだと思う。このことは、灰色粘土下層と灰色粘土層の土質が、その下層の自然堆積の黄色粘土層と同質の粘土であり、西浦橋集落が立地している大阪層群段丘斜面の混雑シルト質の遺物包含層とは異なっている点でも確認できる。

水田下位層グループの須恵器については以上のように解釈できるが、上位層グループについては西浦橋集落との関連では説明できない。とくに茶灰色土下層と茶灰色土層については、遺物包含密度の高さや、在来の粘土と違った小礫混じりのシルト質の土質という点から見て遺跡の遺物包含層を搬入・客土した可能性が高いが、それに含まれる須恵器の時期構成は、西浦橋集落遺跡の盛衰と全く反対の消長を示しているのである。

菱木下遺跡との比較

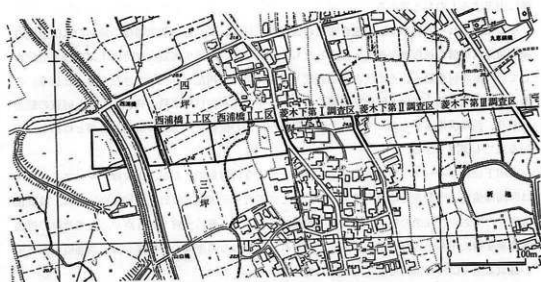
そこで、茶灰色土下層・茶灰色土層が、西浦橋集落遺跡以外の遺跡の遺物包含層を撤入・客土されたものという前提を立てて周辺遺跡と比較してみると、その候補地として菱木下遺跡（第68図参照）を挙げることができる。この遺跡については、当大阪文化センターが久米雅雄・佐久間貴士両技師を担当者として発掘調査を行っている。その調査結果は、先に引用した西浦橋遺跡（その1）地区とともに近く刊行されるが、それによると、この遺跡の第Ⅰ調査区には6世紀後半～8世紀後半の集落があり、第Ⅱ・Ⅲ調査区には同時期の墓地が形成されていた。その後、第Ⅰ調査区の集落は廃絶し、第Ⅱ・Ⅲ調査区では墓地に代って鎌倉～室町前半に釈尊寺と屋敷地が出現した、とされている^{註9}。

こうした菱木下遺跡の変遷と対応して、茶灰色土下層の須恵器杯型式構成も、7世紀と8世紀後半にピークがあって菱木下遺跡第Ⅰ調査区の集落の時期とほぼ一致し、また、茶灰色土層の須恵器杯型式構成も大方第Ⅱ・Ⅲ調査区の時期と対応している。以上のことから、茶灰色土下層・茶灰色土層の須恵器については、鎌倉から室町前半の遺物とともに菱木下遺跡の遺物包含層が撤入・客土されたと考えたい。

黄灰色土層は、数枚の薄い水田層から成り、したがって、茶灰色土下層や茶灰色土層のように客土したような厚さではない。また、遺物包含密度や杯型式構成から見ても、黄灰色土層の遺物は下層の茶灰色土層からの攪乱・浮上と考えられる。

中位段丘面の開発と西浦橋遺跡水田の乾田化

室町後半における湿田から乾田への変化は、菱木下遺跡周辺の遺物包含層の客土によるものと



第68図 西浦橋遺跡と菱木下遺跡（府道松原東大津線の調査範囲）

考えた。そうであれば、西浦橋水田跡の乾田化のいっぽうでは、菱木下遺跡周辺の中位段丘面の削平という行為が存在したことになる。

菱木下遺跡第Ⅱ・Ⅲ調査区を調査した佐久間氏は、同工区の遺構の変遷と花粉分析結果を検討し、大旨次のように結論づけている。菱木下遺跡に釈尊寺や屋敷地が造られた13～15世紀に、花粉構成では、原生林伐採後の二次林を構成するマツ属が増加していることから、この時期に周辺の樹林が伐採され、次第に開発が進んできた。そして続く16世紀には、釈尊寺や屋敷地の廃絶とともに水田・畑地などの造成が行われ、また花粉構成においてもマツ属優占に変化したことから、この時期を調査区全体が耕地化した時代と位置づけている。

このように室町時代後半は、菱木下遺跡の調査においても、その周辺の段丘面の原生林の伐採一耕地開発が展開した時代と考えられている。したがって、西浦橋水田跡の乾田化は、段丘面の耕地開発と連動しており、それによって生じた余剰土の客土によるものであるといえる。

須恵器以外の遺物

さて、水田層出土須恵器の分析を通して、茶灰色土下層および茶灰色土層の須恵器は菱木下遺跡からの客土の中に含まれていたとの結論を得た。しかれば、茶灰色土下層と茶灰色土層の須恵器以外の遺物も須恵器と共に客土の中に含まれて搬入されたことになる。実際、これらの層には鎌倉時代～室町時代の遺物も多く、その包含密度も須恵器と同様な傾向にあり、また、釈尊寺のものと思われる瓦も多量出土しており、須恵器の分析結果と矛盾しない（120～121頁参照）。

(4) 花粉分析による吟味

西浦橋遺跡の水田変遷を、遺構と遺物の分析、および近隣遺跡における調査成果に照らして吟味してきた。ところで、水田の変遷はいっぽうでは植生の変遷過程としても現れる。耕地開発のために原生林を破壊し、その跡に耕地を造成し農作物を栽培する。そして耕地化されなかったところでは草原となり、次いでアカマツなどの陽地性植物が優占する二次林へと遷移していく^{註11}。これから逆に、植生遷移過程から農耕展開の手がかりを得ることが可能となる。こうした農耕に伴う植生遷移史を明らかにしていく有力な手段が花粉分析である。

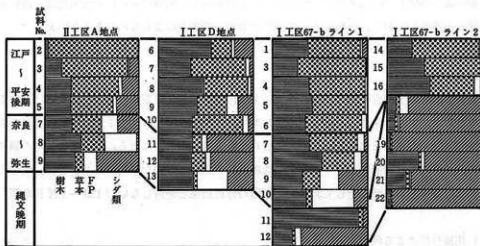
西浦橋遺跡の花粉分析については、すでに31地点148サンプルが行われ、また菱木下遺跡でも16地点38サンプルが分析されており、一定の資料が蓄積されている。ここでは、これらの花粉分析資料を解析し、遺構・遺物から見た西浦橋遺跡水田の変遷過程について吟味しよう。

樹木・草本・シダ類組成の変遷

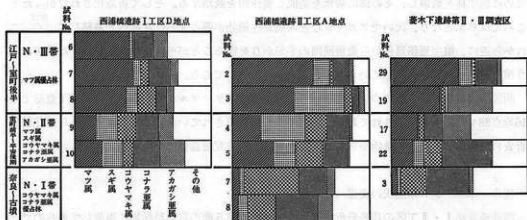
西浦橋遺跡Ⅰ・Ⅱ工区の花粉分析成績については、第5節の自然科学編に掲載してあるので、ここではその成績をもとにして作成したグラフを使って検討することにしたい。

第69図は、西浦橋遺跡Ⅰ・Ⅱ工区4地点の花粉分析について、花粉総数 100個以上の試料を選び、その樹木・草本・シダ類の花粉構成変遷を見た柱状図である。そして各柱状図を層位的に対比して3期に区分し、大づかみの年代を与えたものである。

さて、第69図の樹木と草本花粉の相対変化を見ると、弥生時代の中期頃から草本が増加に向かっている。この草本植物の大半はイネ科であるから、西浦橋遺跡周辺における農耕の展開は、弥生時代中期頃から開始したことを示映している。この花粉分析における結果は、この地域で弥生中期から集落が本格的に展開し、また水田への灌漑水確保のために河川を堰止めた大規模な「杭列群」がこの頃に構築されたことと対応している。



第69図 西浦橋遺跡における樹木・草本・シダ類花粉組成の変遷



第70図 西浦橋遺跡・菱木下遺跡における樹木花粉組成の変遷 (古墳時代～江戸時代)

樹木花粉組成の変遷

では、草本植物＝イネ科の増加に示された農耕の展開が、原生林をどのように破壊し、実質させていったか。これを花粉分析の上でとらえようとしたのが第70図である。この図の試料は、西浦橋遺跡Ⅰ・Ⅱ工区の花粉分析から、遺物によって時期が明確となった試料、あるいはそれとの層位の対比で時期がおさえられた試料などのうち、樹木花粉が100個以上の試料を抜き出し、また菱木下遺跡の同様な試料と対比したものである。

第70図から、古墳時代以降の樹木花粉構成は、マツ属の占有率の変化に対応して3期に区分できる。今、各期に西浦橋遺跡のNを付けて、下層から順にN・Ⅰ帯、N・Ⅱ帯、N・Ⅲ帯と呼ぶと、N・Ⅰ帯は古墳～奈良時代で、コウヤマキ属・コナラ亜属の優占林でマツ属は5%程度に過ぎず、このころまで原生林が広範囲に残っていたといえる。してみると、この頃までの農耕の展開は、中位段丘面の原生林は殆ど残し、河川沿いの低位段丘面の低湿な部分で水田が展開する状況が想定される。

N・Ⅱ帯は平安後期～室町前半で、マツ属が10～30%台に増加して、マツ属・コウヤマキ属・コナラ亜属・アカガシ亜属の針広混交林となる。この時期から中位段丘面の原生林が伐採され始め、その跡地にマツ林が広がっていったことがわかる。この時期は、西浦橋遺跡の低位段丘面では現地表の条里の初原形態である小区画水田の出現から長地型水田への地割り変化の時代であり、条里制地割りの再編が行われたと推測した時期にあたる。いっぽう中位段丘面の菱木下遺跡では釈尊寺や屋敷地が造成された時期である。マツ林の拡大は、特に中位段丘面における寺や屋敷地の造営の背後で、原生林が伐採され耕地が拡大しつつあったことを示唆している。

N・Ⅲ帯は室町後半～江戸時代で、マツ属が急増して優占種となった時代である。さきに、菱木下遺跡周辺では釈尊寺や屋敷地が廃絶され、耕地の造成が行われたとする菱木下遺跡の調査成果を紹介し、それに伴う余剰土を西浦橋遺跡の畝田に客土して乾田化したと考えた時代である。マツ属の優占化は、菱木下遺跡から西浦橋遺跡においても共に認められているから、この時期に中位段丘面の全面的開発が展開したと考えてよく、したがって菱木下遺跡で認められた耕地造成が、中位段丘面で広汎に展開したことを物語っている。したがってまた、耕地造成に伴う余剰土で畝田を客土して乾田化する土壌改良も、西浦橋遺跡水田に限った現象ではなく、和田川流域の低位段丘面の水田で広く行われたと考えられるのである。

かくして室町時代後半が、中位段丘面の耕地開発と、和田川流域の低位段丘面の水田土壌改良による耕地再開をセットとした開発の時代であったことが浮かび上がって来るのである。

裏作の栽培植物

ところで、土壌改良による乾田化の目的は、いうまでもなく裏作を行うことにある。花粉分析では、そうした栽培植物花粉も多数検出されている。第13表は、西浦橋遺跡低位段丘面における古墳時代以降の栽培植物花粉の出現割合を見たものである。西浦橋遺跡では、イネ科の他に、ソ

第13表 栽培植物花粉の出現率

地点	時代	樹花粉木帯	試料No	イネ科	ソバ属	アブラナ科	ワタ属
Ⅱ工区A地点	江戸～室町後半	N・Ⅲ	2	11.8	+	82.0	+
			3	13.2	0.4	51.6	+
	室町前半～平安後期	N・Ⅱ	4	29.0		19.0	
			5	18.4	+	18.8	
奈良～古墳	N・Ⅰ	7	22.8		+		
		8	12.4				
Ⅱ工区B地点	江戸～室町後半	N・Ⅲ	11	12.4	+	81.0	+
			12	16.8	0.4	73.6	+
	室町前半 } 平安後期	N・Ⅱ	15	58.8	0.4	3.6	
			17	12.4	0.4		
			18	10.8			
19	2.4						
Ⅰ工区D地点	江戸 } 室町後半	N・Ⅲ	6	15.0	10.0		
			7	36.8	12.8	+	
			8	34.0	4.8		
	室町前半～平安後期	N・Ⅱ	9	25.5			
10	41.6						
Ⅰ工区67-1b-1	江戸 } 室町後半	N・Ⅲ	1	40.9	0.9		
			2	32.0	6.0	0.1	
			3	56.8	1.2		
			4	51.7	0.4		
	室町前半～平安後期	N・Ⅱ	5	49.8			
			6	51.4			
Ⅰ工区67-1b-2	江戸 } 室町後半	N・Ⅲ	13	33.8	12.7	21.1	
			14	47.1	2.5	1.0	
			15	48.6	0.8	0.2	
	室町後半～平安後期	N・Ⅱ	16	38.7			

数値は全花粉量に占める割合 +は微量

バ属、アブラナ科、ワタ属の花
粉が検出されている。これらの
花粉の出現率を、樹木花粉帯と
の対比で見ると、イネ科は別と
して、ソバ属、アブラナ科が
N・Ⅲ帯から出現しているが、
これは、中位段丘面に近いⅡ工
区に限られている。N・Ⅲ帯に
なると、Ⅱ工区ではアブラナ科
が急増し、またワタ属も微量な
がら出現し、Ⅰ工区でもソバ属
を中心にアブラナ科が出現して
いる。つまり、N・Ⅲ帯におけ
る畑作栽培植物花粉の出現は、
中位段丘に近いⅡ工区に限られ
た現象であり、N・Ⅲ帯におい
て初めてアブラナ科を中心に各
種の花粉が各工区で広汎に出現
しているのである。

しかし、この花粉分析結果を
考えるに際しては、中位段丘上
の菱木下遺跡と比較する必要が
ある。中位段丘上の畑地から畑
作植物の花粉が飛来した可能性
が考えられるからである。

菱木下遺跡では、N・Ⅲ帯の
平安時代にソバ属が出現し、江
戸時代まで10%台ないしそれ以
下の割合で検出されている。ま
た鎌倉時代～室町前半の層から

は、アブラナ科が数%の割合で出現し、江戸時代に18～59%に達している。N・Ⅲ帯の室町時代
後半にはワタ属も出現しているが、2%台以下である。

以上の菱木下遺跡の花粉分析結果と比較すると、西浦橋遺跡のⅡ工区に限られたN・Ⅲ帯にお
けるソバ属とアブラナ科の出現は、Ⅱ工区が中位段丘に接した地点であり、また、低率で出現し

ていることからみて、中位段丘面の畑地から飛来してきた可能性が高いといえよう。いっぽう、西浦橋遺跡のN・Ⅲ帯の畑作植物花粉は、Ⅰ工区各地点で出現し、Ⅰ工区でもアブラナ科が菱木下遺跡よりもはるかに高率で出現しており、これは西浦橋遺跡水田の裏作物として栽培されていたといえよう。しかし、N・Ⅲ帯のソバ属は菱木下遺跡と大体同率であり、またワタ属も微量なので、これらは中位段丘面の畑地からの飛来の可能性が残る。

かくして裏作の栽培植物の一つにアブラナ科が挙げられるのであるが、その確実な栽培はN・Ⅲ帯すなわち室町時代後半からであり、これは水田の客土による乾田化と時期的、層位的にも対応している。

ところで、裏作といえは、文献史料の示すところではムギ作が一般的であるが、この点については現在の花粉分析ではムギとイネとの区別がまだできておらず、イネ科の中に包括されている。したがって、ムギ作については、この花粉分析資料では論ずることはできない。(安里)

5 小結

以上、古墳時代～江戸時代の遺物と遺構について記載し、それぞれについて分析と吟味を加えた。ここではその結果を要約する。

検出した遺構は、古墳時代に欠いて、平安時代後期から江戸時代に至る5面6時期の水田跡である。この水田層から出土した遺物の時期は古墳時代から江戸時代に及んだが、その量的主体を占めたものは須恵器で、次いで瓦器、土師器の順に多く、中・近世陶磁器は少量であった。これらの遺物は、その殆どが、室町時代後半に行われた客土の中に含まれていたものである。また、遺物の殆どが、水田耕作によって細片となっていたため、遺物そのものについての立ち入った分析は行えなかった。

西浦橋遺跡の本調査区は、日下部郷の条里に属し、二つの坪にまたがっている。現在の条里は、坪内が長地型に地割りされているが、それとの関係において発掘された水田跡を見ると、現在の条里の地割りと一致した水田地割り(長地型)は、鎌倉時代までしか遡りえず、平安時代後期には、それとは坪境も地割りも異なった小区画水田が存在していた。しかし、この小区画水田は、現在の条里と基本的に一致するところもあり、現条里の初源的形態と考えられるものである。

また水田土壌においては、平安時代後期～室町時代前半までは畝田、室町時代後半～江戸時代が乾田と考えられた。したがって、西浦橋遺跡の水田史においては、平安時代後期における現条里の初源形態としての小区画水田の出現、鎌倉時代における小区画水田から長地型水田への地割りと坪割りの変化、そして室町時代後半における畝田から乾田への変化という三つの画期があったことになる。

現条里の直接的な初源形態である小区画水田については、先に行われた本遺跡Ⅲ工区の調査結果に照らしても、奈良時代に遡りえないことを確認し、日下部郷の現条里の少なくとも一部は、

平安時代後期にはじめて形成されたことがわかった。しかし、この小区画水田が現地表の条里形態に整えられるまでには、坪境と坪内地割りの変化という過程が必要であった。

坪境の変化については、東大阪市の文井東遺跡でも、奈良時代～鎌倉時代の条里と室町時代～現代の条里との間で認められている。

また、坪内地割りが小区画から長地型へ変化した背景については、牛耕の導入によって、その効率的な使用上障害となる常設の細分割畦畔が撤去され、長地型が成立したのではないかと推測した。

こうして、鎌倉時代に現条里形態が成立した本調査区の水田は、次に、室町時代の後半に畝田から乾田へと変化を遂げた。この変化は、本遺跡東側の中位段丘面の削平土を客土した結果であることを、水田層出土遺物の分析と菱木下遺跡の調査成果とを対比して指摘した。すなわち、室町時代後半には、菱木下遺跡周辺の中位段丘面での耕地造成が行われたが、その際の削平土を冲積地の畝田に客土する土壌改良によって乾田化が進められたのである。

この段丘開発については、本遺跡および菱木下遺跡の古墳時代以降の花粉分析資料の解析において、原生林伐採後の二次林であるマツ林が室町時代後半に飛躍的に拡大したことが認められており、この時期に段丘開発が広汎に展開したことが裏付けられた。

また、花粉分析から、乾田化された水田にアブラナ科の植物が水田裏作として栽培されていたことも指摘できた。

(安里)

註

- 1 小栗田厚編「堺市史」(1971 162～165頁 堺市役所)
- 2 田辺昭三「須恵器大成」(1981 角川書店)
- 3 水田土壌については、菅野一郎編「日本の土壌型」(1962 農山漁村文化協会) 高井康雄・三好洋「土壌通論」(1978 朝倉書店)を参考にした。
- 4 亀島重則・飯田育功「第Ⅷ章まとめ」(「文井東(その1)」1984 大阪文化附センター)
- 5 高崎市教育委員会「大八木水田遺跡」(1979)、「日高遺跡(Ⅱ)」(1980)、「日高遺跡(Ⅳ)」(1982)
- 6 都出比呂志「古代水田二つの型」(「展望 アジアの考古学——樋口隆康教授退官記念論集——」1983 403頁 新潮社)
- 7 竹内理三氏は、ヨーロッパにおける犁耕と長型耕地との関係から、日本の長地型も犁耕との関係においてとらえようとしている。「原始社会の土地制」(「日本土地制度史1」竹内理三編 1973 47頁 山川出版社)
- 8 芝野圭之助・橋本高明「Ⅷ西浦橋遺跡」(「府道松原泉大津線開通遺跡発掘調査報告書Ⅰ」大阪文化附センター 1984)
- 9 久米雅雄・佐久間貴士「Ⅳ菱木下遺跡」(註8書)
- 10 佐久間貴士「花粉からみた植生の歴史」(註8書)
- 11 塚田松雄「花粉は語る」(1974 岩波書店)
- 12 註8書 第55表(466～467頁)

第5節 自然科学編

西浦橋遺跡に関する液体シンチレーション¹⁴C年代決定

京都産業大学 山田 治

1 はじめに

放射性炭素¹⁴C年代決定法は今や世界的に普及し、その原理の確実さを疑う人はいないが、従来の測定結果には疑問を投げかける人は多い。しかし、液体シンチレーション法の登場により、今後の測定値に対する疑問は完全に解消されることになった。10年前の常識で¹⁴C年代に不信の念を持つ人は、その後の進歩に取り残されることのないように願いたい。

液体シンチレーション法は従来の比較測定法と異なった絶対測定法であるから、その手段に疑いを入れる余地は全くない。しかも、通常の絶対測定は比較測定に比して精度が悪いのが普通であるのに、¹⁴C年代決定においては逆に絶対測定の液体シンチレーション法のほうが誤差はずっと小さい。近年世界各国で新しく生れてくる¹⁴C年代測定機関のほとんどが液体シンチレーション法を採用しているのもむべなるかなである。

しかし比較測定が必ずしも悪いということではない。計数効率またはそれに相当する諸条件（ガスの純度、電極間電圧、プラトー特性その他）がいつでも一定に保たれているという保証があればよいのである。特にガスの純度が重大であるから、高純度の得やすい炭酸ガスを使用しているところは将来もずっと存続するであろう。

三角形の面積を求めるには、底辺×高さ÷2とする。高さだけ測って面積が判ると思う人はいない。しかし底辺がいつでも一定なら面積の比較だけはできる。比較測定と絶対測定の違いはこのようなことである。

2 ¹⁴C年代決定の原理

放射性炭素¹⁴Cは宇宙線によって大気中で作られ、炭酸ガスに混って空気中ではあまねく存在する。Libbyの仮説の根拠はこの¹⁴Cの割合が現代と古代との間に差がなく、ずっと一定の比率で存在して来たであろうという点にある。植物は炭素同化作用で炭酸ガス中の炭素を取りこみ、動物もそれを食べて生きる。生きている生物の体内には、空気中の¹⁴Cの比率がほぼ同程度に保たれている。動植物が死んでしまうと¹⁴Cの取りこみは止まり、¹⁴C原子の数は自然の崩壊により

減りつづける。ある時間 t だけ経過して、はじめ N_0 個あった ^{14}C 原子が N 個になったとすると、

$$t = 8033(\text{年}) \times \log_e \frac{N_0}{N}$$

という式で時間 t が計算できるというのが ^{14}C 年代決定の原理である。

この原理はいろいろの方法で実証されたので、今ではこの式を疑うべき理由を持つ人は全くない。更に、古い大木の ^{14}C 年代と年輪年代の細密な対応値まで得られるに及んで、7000年くらい以前から現代までに至る範囲ではほとんど完全に絶対年代が得られる。即ち、 ^{14}C 年代決定法は単なる理論であるだけでなく、事実によって理論の妥当性が証明済みの申し分のない年代決定法なのである。

(絶対年代とは AD1950年というような基準がはっきりしている表現をさす。大木の年輪年代がずっと連続していることがたしかなときは絶対年代である。)

3 放射線測定法による ^{14}C 年代

^{14}C 年代を求めるには、未知試料 1 グラムの中に何個の ^{14}C 原子が存在するか数えることができればよい。現代の標準の炭素は 1 グラム当り毎分 13.46個のベータ線を出す。ベータ線の数は ^{14}C 原子の数に比例するから、ベータ線の数を完全に求めることができれば ^{14}C 原子の数も完全にわかる。液体シンチレーション法は ^{14}C 原子から出るベータ線の数を 100% 確実に捕えることができる。ただし、人間のすることであるから、必ず測定誤差が伴う。誤差 0.1% のとき ± 8年、1% のとき ± 80年である。

放射線測定器は、放射性原子核から出る放射線を数える装置であるが、出て来た放射線を 100% 数えることができるものは稀で、必ず数え落しや数えすぎがある。出て来た放射線の数に対し、何% の割合で数えているかということまで判れば、その測定器は完全に放射線をはかることができる。この割合を計数効率と呼んでいる。液体シンチレーション測定装置は、放射線の計数と、計数の効率の両方が計測できる装置であるから、最終的に未知試料中の ^{14}C 原子の数まで知ることができる。このように物理学的に明確な概念の数量を物理法測にしたがって確実に求める測定が絶対測定である。

従来の測定では放射線の計数だけを求めて年代を出していたので、時としてとんでもない結果が出ていた可能性がある。それが試料によるものか、測定によるものかはっきりさせる根拠がなかった。試料ガス中に不純物が 1% 混入したときには何年の誤差が出るかとか、どのような不純物が最も多く誤差を与えているかということも不明であった。

科学技術は必要に応じて進歩し、5年もたつと大きく変遷するので、常にその根拠と進歩の状況が検討されねばならない。

4 測定結果

K S U-704 西浦橋№1 4270±25 B.P.

木、NUB-I-3、B区、青灰色砂礫下層、831018、縄文中期末（土器伴出）
炭素使用量12.71g、測定時間2200分

K S U-705 同№2 4360±25 B.P.

木、NUB-I-3、B区、青灰色砂礫下層、831018、縄文中期末
12.71g、2100分

K S U-706 同№3 4450±40 B.P.

木、NUB-I-3、A区、青灰色砂礫下層、831018、縄文中期末
7.78g、1900分

K S U-704、705、706 の上記の3点は僅かに時間差はあるがほぼ同一時代のものと考えられる。

K S U-707 同№4 3640±25 B.P.

木、NUB-I-3、67bラインあぜ内シュートバー、縄文後期前葉、831018
11.61g、2150分

K S U-708 同№5 3970±30 B.P.

木、NUB-I-3、A区シュートバー、縄文後期前葉、831018
10.23g、2000分

K S U-709 同№6 1630±20 B.P.

木、NUB-I-3、D区縄文河川層、831018
12.46g、2000分

この試料は後世の木材が縄文河川の遺構の上に乗って来たものである。

K S U-710 同№7 2590±20 B.P.

木、NUB-I-3、C区縄文河川内、縄文晩期中葉
13.68g、2000分

K S U-711 同No.8 2400±20 B.P.

木、NUB-I-3、C区弥生河川内、弥生中期前葉、831004

12.83g、2100分

K S U-711が弥生中期の遺物であるとするは弥生時代はかなりの幅で縄文時代晩期と重なっている可能性がある。ただし木材の年輪数には十分注意せねばならない。弥生時代にはかなりの巨木をも材として使用している可能性がある。今回の試料では余り年輪数が多いとは考えにくい木材であった。

K S U-712 同No.9 2160±25 B.P.

木、NUB-I-3、縄文後期ないし弥生中期の遺構、831004

10.88g、2000分

K S U-713 同No.10 2620±20 B.P.

木、NUB-I-3、縄文中期ないし晩期

11.67g、2300分

5 測定結果の考察

西浦橋遺跡の¹⁴C年代測定試料は、大量かつ多数の木材が得られたので、測定結果については十分信頼できるものである。

また、大阪・京都を中心とした近畿地方の液体シンチレーション¹⁴C年代は、既に歴史的文献と照合してもびったりと一致する例が多数あることから測定結果の信頼性に疑うべき点はない。

さて、この結果と考古学編年との比較は殊によると重大な意味を持つものであるかもしれない。特に弥生時代の遺構から出土したと思われる木材が意外に古いことである。従来もかなりの数の弥生時代の遺物が場所によりBC 500～600まで遡ることが知られているが、今回もそのような例が存在することが判ったわけである。

出土状況と土器の判定も慎重に扱われなければならないが、ともかく弥生式土器文化は場所により非常に古い時代から始まっている可能性があることを示唆する結果である。

西浦橋遺跡の縄文土器のTL年代測定

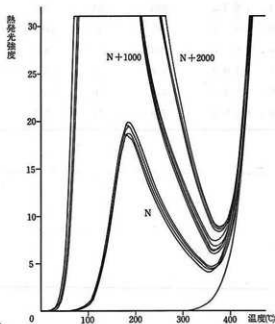
奈良教育大学 市川 米太

熱ルミネッセンス法によって測定した、西浦橋遺跡の9個の縄文土器の年代測定結果について報告する。9個の土器の採取データを第14表に示す。

第14表 採取データ

試料	採取データ	推定時期
1. 7062	青灰色砂礫上層 (B区)	中期末葉
2. 7079	青灰色砂礫下層 (A区)	中期末葉
3. 7063	青灰色砂礫下層 (B区中央部)	中期末葉
4. 7053	灰褐色砂礫 (T67-b)	後期的葉
5. 7016	淡褐色砂礫 (S67-b-3)	後期的葉
6. 7047	シュートパー (S67-b-1)	後期的葉
7. 7100	黄色粘土下層 (D区)	後期後半～晩期
8. 7140	暗青灰色シルト (D区)	晩期末
9. 6725	SK15 (D区)	晩期末

今回のTL年代測定法には、石英粗粒子法が適用された。したがって、土器が焼成されてから現在まで地中で受けてきた蓄積線量の測定には、土器中から100~200メッシュの粒度の石英粒子を抽出して試料とした。図には、この遺跡の縄文土器の代表として、7079を取り上げその熱発光曲線が示してある。図中のNの曲線は試料をそのまま加熱した時の熱発光曲線であり、N+1000は試料にコバルト-60のガンマ線を1000レントゲン照射した後の熱発光曲線であり、N+2000は2000レントゲン照射した後の熱発光曲線である。こ



第71図 西浦橋遺跡の土器 (7079) の熱発光曲線

これらの熱発光曲線を使って等価線量を算出し、これにスーパー・リニアリティ補正値を加えて蓄積線量を求めた。スーパー・リニアリティ補正は熱発光強度が受けた放射線量に正確に比例していない場合になされるものである。

TL年代は上述の蓄積線量を年間線量で割ることによって求められる。年間線量は、土器の胎土中の放射性元素による β 線量と土器が埋っていた文化層の中で受ける γ 線量とに分けて測定した。両者の測定には、 $\text{CaSO}_4:\text{Tm}$ の熱ルミネッセンス線量計が使用された。 β 線量の測定は、土器の粉末に線量計を29日間入れて放置した後、取り出して測定した。 γ 線量の測定は、線量計を遺跡の文化層中に96日間埋めこんだ後、取り出して測定した。

このようにして求めたTL年代測定の結果が第15表に示してある。表の中のSは前述したスーパー・リニアリティ補正値である。測定誤差は正確には求めているが、大体において、 $\pm 6\sim 7\%$ 程度である。ただし、試料7、7100の土器片は大きさが小さいため β 線量の測定が正確にできなかったので、その誤差は大きくなると考えられる。

第15表 西浦橋遺跡の縄文土器のTL年代測定の結果

試料	等価線量 (ラド)	S (ラド)	蓄積線量 (ラド)	β 線量 (ラド)	γ 線量 (ラド)	年間線量 (ラド)	TL年代 (B.P)
1. 7062	950	221	1171	0.177	0.118	0.295	3970
2. 7079	1332	13	1345	0.197	0.118	0.315	4270
3. 7063	1524	102	1626	0.247	0.118	0.365	4450
4. 7053	675	34	709	0.068	0.120	0.188	3770
5. 7016	1148	32	1180	0.177	0.120	0.297	3970
6. 7047	824	4	828	0.088	0.120	0.208	3980
7. 7100	756	3	759	0.104	0.105	0.209	3630
8. 7140	818	0	818	0.169	0.105	0.274	2980
9. 6725	728	21	749	0.214	0.105	0.319	2340

樹種鑑定報告

元典寺文化財研究所 松田隆嗣

第16表 樹種鑑定結果一覧表

番号	採取データ	樹種	番号	採取データ	樹種
001	B区下層砂礫上面腐植土	ムクノキ	031	A区河川のベース	広葉樹(収縮)
002	B区下層砂礫	カシ	032	〃	カシ
003	〃	サクラ	033	A区シュートバー	〃
004	〃	ムクロジ	034	A区河川のベース	〃
005	〃	〃	035	〃	〃
006	〃	ムクノキ	036	〃	〃
007	〃	ムクロジ	037	〃	樹皮
008	〃	〃	038	〃	カシ
009	〃	〃	039	〃	〃
010	〃	カシ	040	〃	〃
011	〃	トネリコの一種?	041	〃	〃
012	〃	ムクノキ	042	〃	〃
013	〃	カシ	043	〃	カシ
014	〃	〃	044	〃	〃
015	〃	トネリコ類	045	〃	〃
016	〃	ムクロジ	046	〃	カシ(?)
017	〃	カシ	047	〃	シキミ
018	〃	シイノキ?(収縮)	048	〃	カシ
019	B区下層砂礫上面腐植土	カシ	049	〃	シキミ
020	〃	〃	050	〃	ムクノキ
021	〃	〃	051	A区縄文河川	カシ
022	〃	ムクノキ	052	〃	〃
023	〃	〃	053	〃	〃
024	〃	サカキ	054	〃	〃
025	〃	カシ	055	〃	〃
026	B区下層砂礫	〃	056	〃	〃
027	B区シュートバー	〃	057	〃	〃
028	〃	〃	058	〃	〃
029	〃	〃	059	〃	トネリコ類
030	〃	〃	060	〃	〃

番号	採取データ	樹種
061	A区縄文河川	カシ
062	〃	〃
063	〃	〃
064	〃	〃
065	〃	クリ
066	〃	カシ
067	〃	〃
068	〃	〃
069	〃	〃
070	〃	〃
071	〃	〃
072	〃	カシ
073	〃	モッコク
074	〃	カシ
075	〃	〃
076	〃	〃
077	〃	〃
078	〃	〃
079	〃	シイノキ
080	〃	カシ
081	〃	〃
082	C区河川のベース	カシ
083	C区縄文河川	カシ? (収縮)
084	C区河川のベース	〃
085	〃	カシ
086	A区下層砂礫	〃
087	C区縄文河川	サカキ
088	〃	タブノキ
089	縄文河川	カシ
090	C区縄文河川	〃
091	〃	〃
092	〃	〃
093	〃	クスギ
094	〃	カシ
095	〃	広葉樹 (収縮)

番号	採取データ	樹種
096	C区縄文河川	カシ
097	〃	シイノキ
098	〃	カシ
099	C区河川のベース	広葉樹 (収縮)
100	C区縄文河川	カシ
101	〃	ユズリハ
102	A区下層砂礫	カシ
103	C区縄文河川	シイノキ
104	〃	カシ
105	〃	〃
106	〃	サカキ
107	〃	〃
108	〃	シキミ?
109	A区下層砂礫	シャシャンボ
110	〃	ユズリハ?
111	〃	〃
112	〃	カシ
113	〃	〃
114	〃	シャシャンボ
115	C区縄文河川	カシ
116	〃	シャシャンボ
117	〃	カシ
118	〃	〃
119	〃	〃
120	〃	〃
121	〃	〃
122	〃	〃
123	〃	〃
124	〃	広葉樹 (収縮)
125	〃	〃
126	〃	カシ
127	〃	〃
128	〃	〃
129	〃	カシ
130	〃	〃

番号	採取データ	樹種	番号	採取データ	樹種
131	C区龍文河川	カシ	166	C区龍文河川	
132	〃	〃	167	〃	カシ
133	〃		168	〃	タブノキ
134	〃	コナラ?	169	〃	ユズリハ
135	〃		170	〃	カシ
136	〃	ユズリハ	171	〃	シイノキ
137	〃	ムクノキ	172	〃	カシ
138	〃		173	〃	〃
139	〃	カシ	174	〃	コナラ
140	〃	〃	175	〃	カシ
141	〃	クスノキ	176	〃	〃
142	〃	ヤブツバキ	177	〃	ヒノキ
143	〃	コナラ	178	〃	サカキ
144	〃		179	〃	カシ
145	〃	カシ	180	〃	クスギ
146	〃	ユズリハ	181	〃	カシ
147	〃	シャシャンボ	182	不明	
148	〃		183	〃	カシ
149	〃	ユズリハ	184	C区弥生河川	〃
150	〃	シイノキ(収縮)	185	〃	広葉樹(収縮)
151	〃	シャシャンボ	186	D区龍文河川	カシ
152	〃	カシ	187	シュートバー	〃
153	〃	クリ	188	C区龍文河川	〃
154	〃	カシ	189	不明	ヤマグワ?
155	〃	〃	190	〃	
156	〃	〃	191	C区龍文河川	
157	〃	サカキ	192	〃	カシ
158	B区下層砂礫	〃	193	〃	コナラ
159	〃	ムクロジ	194	〃	広葉樹(収縮)
160	C区龍文河川	サカキ	195	〃	カシ
161	〃	ユズリハ	196	〃	〃
162	〃		197	〃	〃
163	〃	カシ	198	〃	タブノキ
164	〃	サカキ	199	〃	クスギ
165	〃	カシ	200	下層トレンチ	カシ

西浦橋遺跡花粉分析結果 (抄)

パリオ・サーヴェイ社

解説

本項は、大阪文化財センターが、パリオ・サーヴェイ社に依頼した、西浦橋遺跡Ⅰ・Ⅱ工区における花粉分析結果の抄報である。分析された試料は、総数31地点148サンプルに及ぶが、ここでは、出土遺物によって時期の明確な層、ないしはそれと層位的対比ができた6地点の柱状採取サンプルを掲載した。紙数の都合上、パリオ・サーヴェイ社報告から基本資料を抜き出し、これらをまとめた。また、花粉分析とあわせて珪藻分析も行ったが、これは割愛した。

掲載資料については、第Ⅲ章第2節で縄文時代の資料について、同章第4節で古墳時代～江戸時代の資料について、それぞれ遺構、遺物などの対比で解析所見が述べられている。(安里)

試料採取地点と試料相互の層位関係——第72図

試料表——第17表

分析の方法

Ⅰ工区A、B地点——試料秤量(8～50g)→HCl処理→HF処理→重液分離→アセトリシス処理→KOH処理→封入。検鏡に際しては400～1000倍で500～100個体鑑定した。

Ⅰ工区D地点——Sample 20g～100g秤量→HCl処理→HF処理→重液分離→アセトリシス処理→KOH処理→封入→検鏡・鑑定。

Ⅰ工区67-bライン1、2——試料200g(湿重)秤量→HCl処理→48%処理→重液分離(ZnBr₂)→10%KOH→プレパラート作成→鑑定。

Ⅰ工区Scライン——花粉・胞子化石の抽出は、試料20～30g(湿重)を秤量→4.8%HF→重液分離(ZnBr₂・比重2.14)→アセトリシス処理→10%KOH→検鏡。№49試料については、40g(湿重)を秤量し傾斜法により粗粒物質を除去後、前記処理を行った。

第17-1表 花粉分析試料表

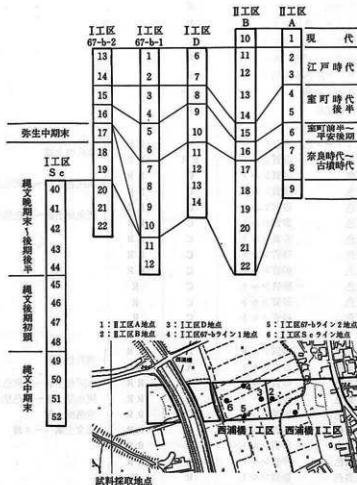
地点	番号	土 質	微化石産出傾向		備 考
			花粉・胞子	珪 藻	
Ⅰ工区 A地点	1	黒褐色砂質粘土	C	—	現耕作土
	2	にぶい黄褐色 中～細砂	RR	RR	
	3	黄褐色中粒砂(礫を含む)	RR	RR	
	4	暗褐色シルト質砂	RR	R	
	5	黒褐色中～細砂	RR	R	
	6	黒褐色礫混り砂質土	RR	R	
	7	黒褐色礫混りシルト	C	C	奈良～古墳時代の溝(SDN02) 内堆積層
	8	黒褐色砂質粘土	C	RR	
	9	黄灰色礫混りシルト	RR	RR	

第17-2表 花粉分析試料表

地点	番号	土 質	微化石産出傾向		備 考
			花粉・孢子	珪 藻	
I 工 区 B 地 点	10	灰黄褐色シルト	A	—	現耕作土
	11	オリーブ褐色微粒砂	R	—	
	12	黄褐色細砂	C	—	
	15	にぶい黄色礫混り砂質シルト	RR	N. D.	
	17	オリーブ黄色砂質粘土	RR	—	
	18	明黄褐色砂質シルト	RR	—	
	19	灰オリーブ色シルト質粘土	RR	R	
	20	灰オリーブ色シルト質粘土	RR	R	
	21	灰色粗粒砂	A	R	
	22	灰色砂礫	C	—	
I 工 区 D 地 点	6	灰オリーブ色シルト	R		
	7	灰オリーブ色シルト	R		
	8	灰色礫混りシルト	R		
	9	灰オリーブ色シルト	R		
	10	黄灰オリーブ色シルト	R		
	11	黄灰オリーブ色シルト	R		
	12	オリーブ灰色砂質粘土	R		
	13	灰色中〜細砂	NP		
I 工 区 67 b 1	1	灰オリーブ色 礫混りシルト	R	ND	黄灰色土層
	2	灰色 砂質シルト	RR	RR	
	3	灰色 砂質シルト	C	RR	茶灰色土層〜茶灰色土下層
	4	灰色 砂質シルト	C	ND	
	5	灰色 砂質シルト	C	RR	灰色粘土層〜灰色粘土下層
	6	灰色 砂質シルト	C	RR	
	7	灰色 砂質シルト	C	RR	
	8	灰色 砂質シルト	C	RR	
	9	灰色 砂質シルト	C	RR	
	10	灰色 砂質シルト	C	R	
	11	灰色 砂質シルト	C	R	
	12	灰色 砂質シルト	C	R	
I 工 区 67 b 2	13	灰黄色 砂質シルト	R	RR	黄灰色土層
	14	灰黄色 砂質シルト	A	ND	
	15	灰黄色 砂質シルト	C	RR	茶灰色土層〜茶灰色土下層
	16	灰黄色 砂質シルト	C	RR	
	17	灰黄色 砂質シルト	C	RR	灰色粘土層〜灰色粘土下層
	18	灰黄色 砂質シルト	R	RR	
	19	灰黄色 砂質シルト	R	RR	縄文土横ベース層
	20	灰黄色 砂質シルト	R	RR	
	21	灰黄色 砂質シルト	R	R	
	22	灰黄色 砂質シルト	C	R	

第17-3表 花粉分析試料表

地点	番号	土 質	備 考
I 工 区 Sc ラ イ ン	40	grayish olive clayey silt	
	41	grayish olive clayey silt	
	42	yellowish gray silty clay	
	43	grayish olive sandy silt	
	44	olive yellow sandy silt	
	45	grayish olive sandy silt	
	46	grayish olive sandy silt	
	47	olive yellow fine-very fine sand	
	48	olive yellow fine-very fine sand	
	49	grayish olive medium-fine sand	
	50	dark grayish yellow clay	
	51	dark grayish yellow clay	
52	yellowish gray clay		



第72図 花粉分析試料の採取地点と層位的対比

第21表 西樞樞産地花粉分析結果 I区 Sセクション

試料採取地点 及び 試料番号 花粉, 胞子化石名	試料採取地点 及び 試料番号											試料採取地点 及び 試料番号 花粉, 胞子化石名	試料採取地点 及び 試料番号																						
	Sc	No.40	No.41	No.42	No.43	No.44	No.45	No.46	No.47	No.48	No.49		No.50	No.51	No.52	No.54	No.55	No.56	Sc	No.40	No.41	No.42	No.43	No.44	No.45	No.46	No.47	No.48	No.49	No.50	No.51	No.52	No.54	No.55	No.56
<i>Podocarpus</i>																		<i>Typha</i>																	
<i>Alnus</i>												12	1	2	<i>Cornaceae</i>	1																			
<i>Fraxus</i>				1											<i>Cyperaceae</i>		2																		
<i>Pinus</i>															<i>Polygonum sect. Persicaria</i>	1																			
<i>Pinus subgen. Haploxylo</i>															<i>Chenopodiaceae</i>																				
<i>Pinus subgen. Diploxylo</i>															<i>Caryophyllaceae</i>																				
<i>Pinus</i>	1											4	1	2	<i>Thalictrum</i>																				
<i>Sotadopsis</i>		10	1	1	5	12	20	22	82	8	8	6	3	26	<i>Cruciferae</i>																				
<i>Cryptomeria</i>												13	2	1	<i>Geranium</i>	1																			
T.-G.												17	11	5	<i>Umbelliferae</i>																				
<i>Metasequoia</i>															<i>Artemisia</i>																				
AP-1	1	10	2	2	6	12	22	22	83	8	55	24	12	46	3	7	<i>Carduioideae</i>	1																	
<i>Salix</i>															<i>Cichorioideae</i>																				
<i>Myrica</i>															NAP	2	8	2	6	2	1	4	2	4	4	8	8	5	2	20	8	4			
<i>Juglans</i>												1	1	1	<i>Trisoneporate pollen</i>																				
<i>Corylus</i>												2	1	1	<i>Trisonecolpate pollen</i>																				
<i>Corylus</i>															<i>Polypastoporate pollen</i>																				
<i>Betula</i>															FF	6	8	1	1	1	6	2	6	1	100	17	12	5	4	0	0				
<i>Alnus</i>	2	1			2	1	8		19	8		120	4	2	<i>Lycopodium</i>																				
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>												2	1	2	<i>Gimnada</i>																				
<i>Quercus subgen. Quercobalanus</i>	3								9	94	131	189	8	1	<i>Pteris</i>	1	1	3		1	2	2	4	1											
<i>Castanea</i>												11	4	1	<i>Polypodiaceae</i>	32	1	12	8	2	24	12	82	28											
<i>Castanopsis</i>												25	8	17	<i>Saxifraga nutans</i>																				
<i>Ulmus-Silvius</i>	1	1										4	2	1	5	<i>Monoletes spore</i>	88	295	143	282	282	218	204	203	280	17	17	4	8	84	3	112			
<i>Celtis-Aphananthe</i>												11	1	20	2	1	<i>Trilete spore</i>	82	29	48	84	50	89	52	124	185	3	16	3						
<i>Noraceae</i>															FS	144	332	206	384	298	344	274	417	594	21	27	7	8	84	3	225				
<i>Liquidambar</i>															Total Number	129	345	217	387	288	280	222	441	683	388	258	249	258	246	11	248				
<i>Phellodendron</i>															<i>Pedicularium</i>																				
<i>Malilus</i>												1	2		<i>Pseudochizinae</i>																				
<i>Tilia</i>												1	1	1	<i>Botryococcus</i>																				
<i>Acer</i>															AP-1 (Σ)	0.8	2.0	0.9	0.5	2.2	3.3	9.0	5.0	12.2	3.8	21.2	9.0	4.8	13.2	2.0					
<i>Aesculus</i>															AP-2 (Σ)	0.6	0.6	2.8	8.0	1.1	0.6	3.1	0.9	0.1	31.0	58.5	88.2	98.8	47.8	4.1					
<i>Vicia</i>															NAP (Σ)	2.4	0.6	0.6	0.8	0.7	0.3	1.2	0.5	0.6	2.7	2.3	2.1	0.4	10.9	1.6					
<i>Parthenocissus</i>															FF (Σ)	0.6	0.6	0.5	0.3	0.4	0.6	0.0	0.0	0.1	58.3	8.6	4.0	2.0	1.1	8.9					
<i>Nitella</i>															FS (Σ)	88.8	88.2	94.6	88.2	85.8	85.0	85.2	94.5	87.0	7.8	10.4	2.8	3.8	27.0	81.5					
<i>Camellia</i>																																			
<i>Araliaceae</i>																																			
<i>Asarum</i>																																			
<i>Cornus</i>																																			
<i>Ericaceae</i>																																			
<i>Samolus</i>																																			
<i>Ligustrum</i>																																			
AP-2	8	3	8	6	5	2	16	8	1	83	184	189	222	188	5	16																			
AP	1	12	8	2	6	14	42	22	84	182	208	218	224	212	8	17																			

第IV章 ま と め

西浦橋遺跡の発掘調査は、昭和54年度に大阪府教育委員会によって試掘調査が実施されて以降大阪府教育委員会、堺市教育委員会、当文化財センターにより6度にわたって行われている。

先にも述べられている様に当遺跡は、遺跡の西部を南北に流れる和田川によって形成された沖積段丘と東から張り出す洪積段丘中位面にまたがった形で立地している。今回の調査では、現和田川の東岸の沖積平地をG.L. - 3.5mまで掘り下げることによって、自然河川が幾度となく氾濫を繰り返して、沖積段丘を形成する過程、及びその土地利用、又洪積段丘面との有機的なつながりを知る上で重要な資料を得たと言える。

当遺跡が縄文時代中期末から江戸時代に至る変遷過程を、地形の変化と共に周辺遺跡との関連も含めて各時代順に述べることにする。

1 縄文時代

今回の調査では、自然河川・氾濫原内からではあるが縄文時代中期末から晩期に至る遺物を出した。これらの遺物が全て人為的な遺構から出土したものでないために、遺跡の実体を現状で知ることとは不可能である。しかし、縄文時代中期末から後期前葉にかけての土器は比較的まとまって出土したこと、出土した土器があまり磨滅していないこと、縄文時代晩期終末に沖積段丘化した時点で土器棺を含む土城墓群が検出されたこと、から今回の調査区より上流のそれほど遠くない位置に縄文時代中期末以降晩期に至るまで長期間営まれた集落を想定することができたが、実体を明確にすることが今後の大きな課題として残されており、石津川・和田川流域の縄文時代の動向を知る上においても急がれるべきであろう。

2 弥生時代

段丘崖直下に縄文時代晩期終末の土城墓群のベースとなっている黄色粘土層を切って自然河川が見られる。河川は、調査区中央付近で「く」の字状に大きく蛇行している。河川は、大きく3回の土砂の堆積によって埋没している。1度目は灰色砂礫層によつて約40程度埋没しており、灰色砂礫層内にはⅡ様式の土器を比較的多く含んでいる。又、Ⅱ様式に混ってⅠ様式新段階の土器を2点出土している。前回の調査で検出された「シガラミ」状の杭列群はこの灰色砂礫層をベースとして河川の屈曲部分に川幅いっぱい打設されており、杭列群の東端から北東方向へ向かう溝があり、杭列群によって堰き止められた水を溝を通して水田に導入したと考えられる。弥生時代の西浦橋遺跡は、洪積段丘上の当遺跡の東に市道33号線を隔てて隣接する菱木下遺跡と密接な関わりを持っている。当遺跡の東端から菱木下遺跡の西端にかけて方形周溝墓が見られ、更にそ

の東には竪穴住居址群がある。これらは全てⅡ様式からⅢ様式にかけての時期に存続するものであって、当遺跡の自然河川が2度目の砂礫層の堆積によって河川自体がほぼ埋没する、すなわち杭列群を廃絶に導いた砂礫層内にⅢ様式新段階の土器を含んでいることから集落の存続期間ともほぼ合致している。逆に言えば、杭列群の廃絶が、水田に再起不能な打撃を与え、新たな水田耕作地を求めて集落が移動したと考えられる。

さて、当遺跡及び菱木下遺跡から検出された遺構を見れば、弥生時代中期前半から中期中葉にかけて展開していると言える。しかし、当遺跡の自然河川内出土の土器の中に2点ではあるが前期(Ⅰ様式新段階)に属する土器が出土していることを考慮すれば、近辺に現在検出されている中期の遺構の前身となる前期の遺構の存在する可能性は強く、縄文時代晩期終末との関係についても今後の課題として残されてくる。

最後に、石津川・和田川流域の弥生時代に属する遺跡の中で前期から存続しているものは、縄文時代の遺跡とラップしている点を指摘しておきたい。

3 古墳時代

弥生時代中期(Ⅲ様式新段階)に砂礫層によってほぼ埋没した自然河川は以後上面に均一な黄色粘質土層の堆積によってその面影を全くなくし、沖積段丘化する。黄色粘質土層内には遺物が認められず、正確な時期を知ることはできないが、弥生時代中期後半以降である。この時期から古墳時代中期(須恵器出現期頃)までは、西浦橋遺跡の断絶期である。

5世紀後半になると、洪積段丘縁辺に突然竪穴住居址群^{Ⅲ9}が現れる。この竪穴住居址群は、6世紀中葉頃まであり、10数棟検出され段丘崖直下には総柱の倉庫も1棟検出されている。しかし、沖積段丘部分にはこの時期の遺構は、ほとんど認められず小さな自然流路程度で、水田の痕跡もなく、沖積地も安定さに欠けていたものと考えられる。

又、6世紀後半頃になると集落は東に移動し菱木下遺跡西部に掘立柱建物群として新たな様相を示し始める。

4 歴史時代

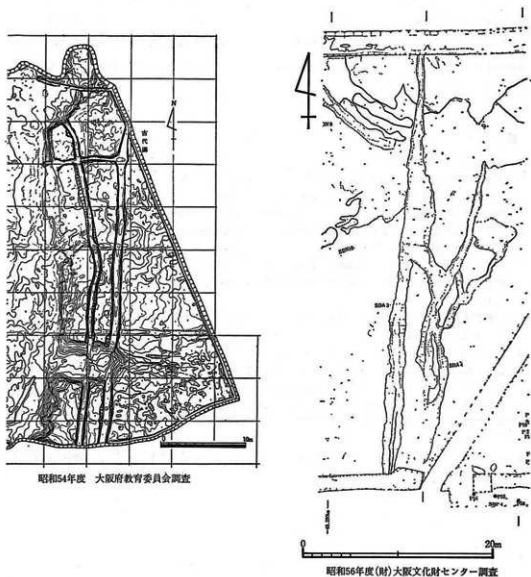
今回の調査によって5面6時期にわたる水田を確認した。最下面である第1次水田面からは二時期の水田が重複して検出されており、水田の方向すなわち条里の方向としては、現在和田川流域に広がる水田の方向と等しく、現在残存する条里が西浦橋遺跡第1次水田面当時の条里の方向を踏襲していると言える。

この第1次水田面の時期であるが、出土遺物からすれば、重複して検出された水田遺構を明確に区分することは困難であるが、新しく位置付けられる水田に関しては13世紀を下るものではないと言える。一方、古く位置付けられる水田は、13世紀の遺物に混って少量ではあるが黒色土器が出土していること、菱木下遺跡の開発、万崎池遺跡の谷の開発等^{Ⅲ11}每斤段縁辺部における開発が

10世紀後半以降に見られること、を加味すれば10世紀後半という時期も十分に考えられる。

次に、15世紀以降に新たな開発が見られる。第3次・第4次水田層内出土遺物に詳細な検討を加えた結果、この二時期の水田は客土されることによって構築していると言える。段丘上を削平することによって畑地を造成し、削平した土を水田の客土としている。台地上の開発と沖積地の水田開発が一体となって行われたと考えられる。

これらの開発が、村々を単位として実施されたものか、荘園を単位として実施されたものか、あるいは国術的な組織で実施されたかは今後の課題であるが、ただ、水利等の関係上小範囲を対象としたものではなく、上流から下流にかけてかなり広範囲にしかも組織的に行なわれたと思わ



第73図 奈良時代溝平面図

れる。

最後に、和田川流域の条里遺構について一つの問題を提起しておきたい。現在残されている条里の方向が10世紀後半代までさかのぼり得る可能性は先に指摘したとおりであるが、この地域の条里の起源が下流から上流に至るまで10世紀後半に施行されたものであるとは考え難い。

まず考えられる点は、下流から上流に向かって年月を負う毎に条里が延長され、西浦橋遺跡付近に施行されたのが10世紀後半段階であった。あるいは、更にもう一つ考えられることは、10世紀後半以降現在に至る条里の軸はN16°Wと大きく西に傾斜し、地形に即した方向を持つ。ところがこの地域の式内社である大鳥大社・日部神社の軸はN3°Wと若干西にふれるに過ぎず、前回の当センターによる調査によって検出された8世紀に属する溝(第73図)及び昭和54年度の大阪府教育委員会の調査によって検出された奈良時代溝(第73図)についてもほぼ北に向かって延びており、これらがすべて何らかの規制によるものと仮定すれば、10世紀以前に北向きの条里が存在した可能性も考えられる。ただこの問題については、資料的にも不十分な点が多く今後の調査成果に期待したい。

(橋本)

註

- 1 井藤 徹主査担当(現係長)
- 2 芝野圭之助「西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要」(1980 大阪府教育委員会)
上林史郎「西浦橋遺跡発掘調査概要」(1981 大阪府教育委員会)
- 3 野田方正「西浦橋遺跡発掘調査報告」(『堺市文化財調査報告』第12集 1983 堺市教育委員会)
- 4 芝野圭之助・橋本高明「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書・I—西浦橋遺跡第Ⅱ調査区—」(1984 財団法人大阪文化財センター)
- 5 調査工法の限界からG.L.—3.5mまで掘削して調査は一応終了としているが、縄文時代中期末の土器を包含する青灰色砂礫層半ばであり、更に下層から前期・早期の遺物を出土する可能性は残されている。
- 6 註4に同じ。
- 7 久米雅雄「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書・I—菱木下遺跡第Ⅱ調査区—」(1984 財団法人大阪文化財センター)
- 8 近年、河内平野を中心として注目されている「長原式」の土器が、泉州・泉南地域においても出土例を増している。「長原式」が河内平野の一部で弥生土器Ⅱ様式中段階と共存関係をもつ事実がほぼ認められつつあるが、泉州地域では、現段階ではⅡ様式中段階との共存例は確認されておらず、堺市上遺跡(大阪府教育委員会技師森井貞雄氏御教示)では新段階と共存しているのが現状である。
- 9 註4に同じ。
- 10 註7に同じ。
- 11 福田実人「府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書・I—一万崎池遺跡第Ⅱ調査区—」(1984 財団法人大阪文化財センター)
- 12 註4に同じ。
- 13 註2に同じ。